（毎月二回五日廿日發行）明治廿五年三月十一日第三種郵便物認可

明治三十四年一月五日發兌

女鑑

第貳百廿一號

國光社

女鑑第貳百貳拾號

目録

定價
一冊　金拾錢
六冊三ヶ月分　金五拾五錢
十二冊半年分　金壹圓
全國無遞送料

明治三十四年一月四日印刷
明治三十四年一月五日發行

編輯兼發行人　川崎　直衛
印刷人　並木　頁雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　國光社
發賣元　東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地　靜思館
(電話本局一千三百七番)

稟告

從來本誌の發賣に係る事務は國光社雜誌部に於て取扱ひ居候處向後東京市京橋區南傳馬町壹丁目七番地靜思館に於て取扱ひ候事に致候間自今國光及女鑑に關する御照會、御送金、御通知等は總て必靜思館宛にて御發信被成下度候也

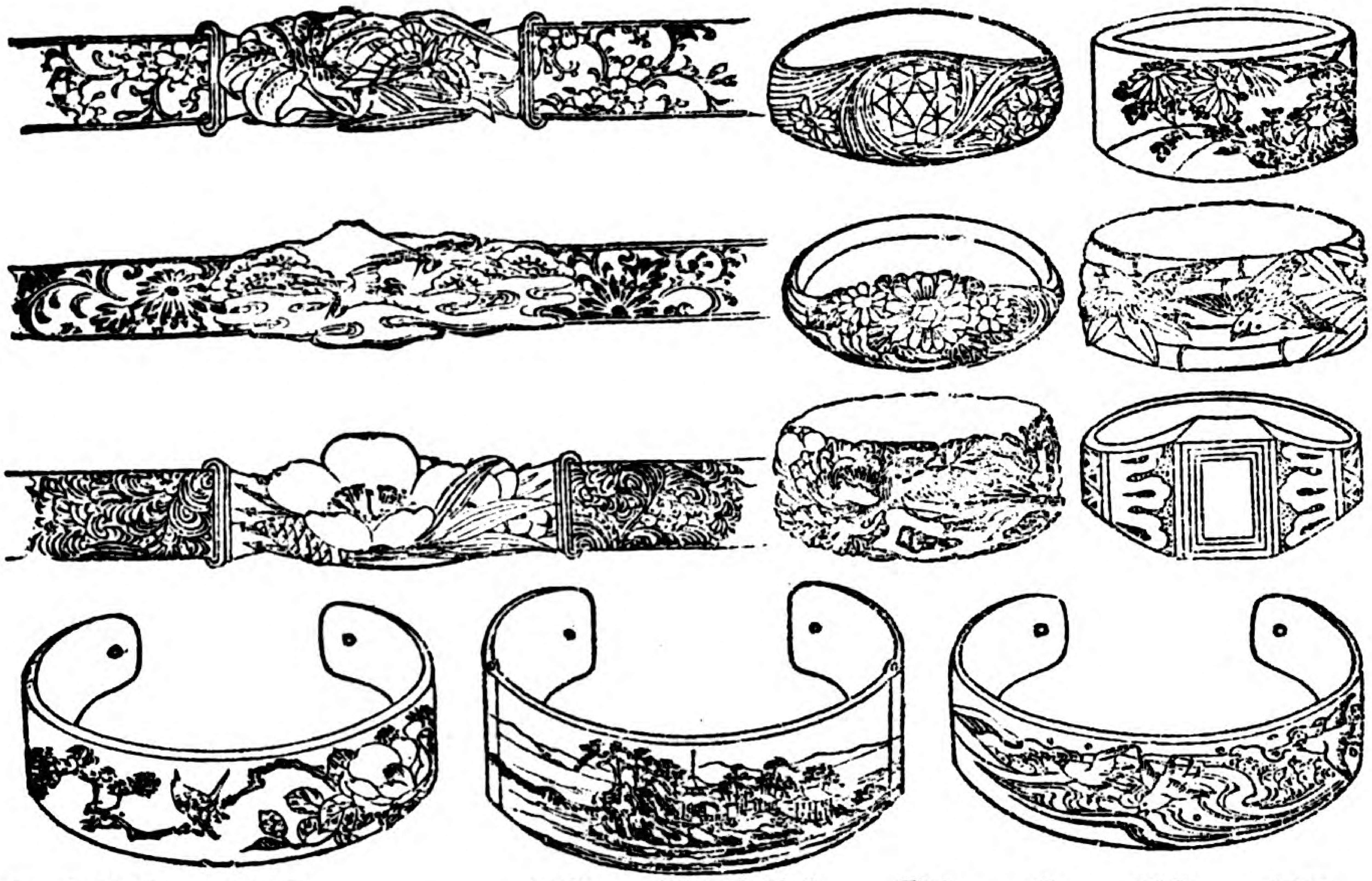
追て編輯に關する件は從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候

明治三十三年十二月

東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社編輯部

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館
（電話本局千三百七番）

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價十六圓
乙價十四圓

●廿金三匁付ペ象嵌片切彫刻付
甲價廿二圓
乙價十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價廿六圓
乙價廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價卅四圓
乙價廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價卅六圓
乙價卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價卅八圓
乙價卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價二百五十圓
乙價百八十圓
丙價百三十圓
丁價九十圓
戊價六十五圓
巳價五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢

●純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模樣付形狀ノ難易ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫繻珍綾織紐付
甲價卅五圓
乙價三十一圓
丙價廿七圓
丁價廿三圓
戊價十九圓
巳價十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價十一圓
乙價九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價十四圓五十錢
乙價十二圓五十錢

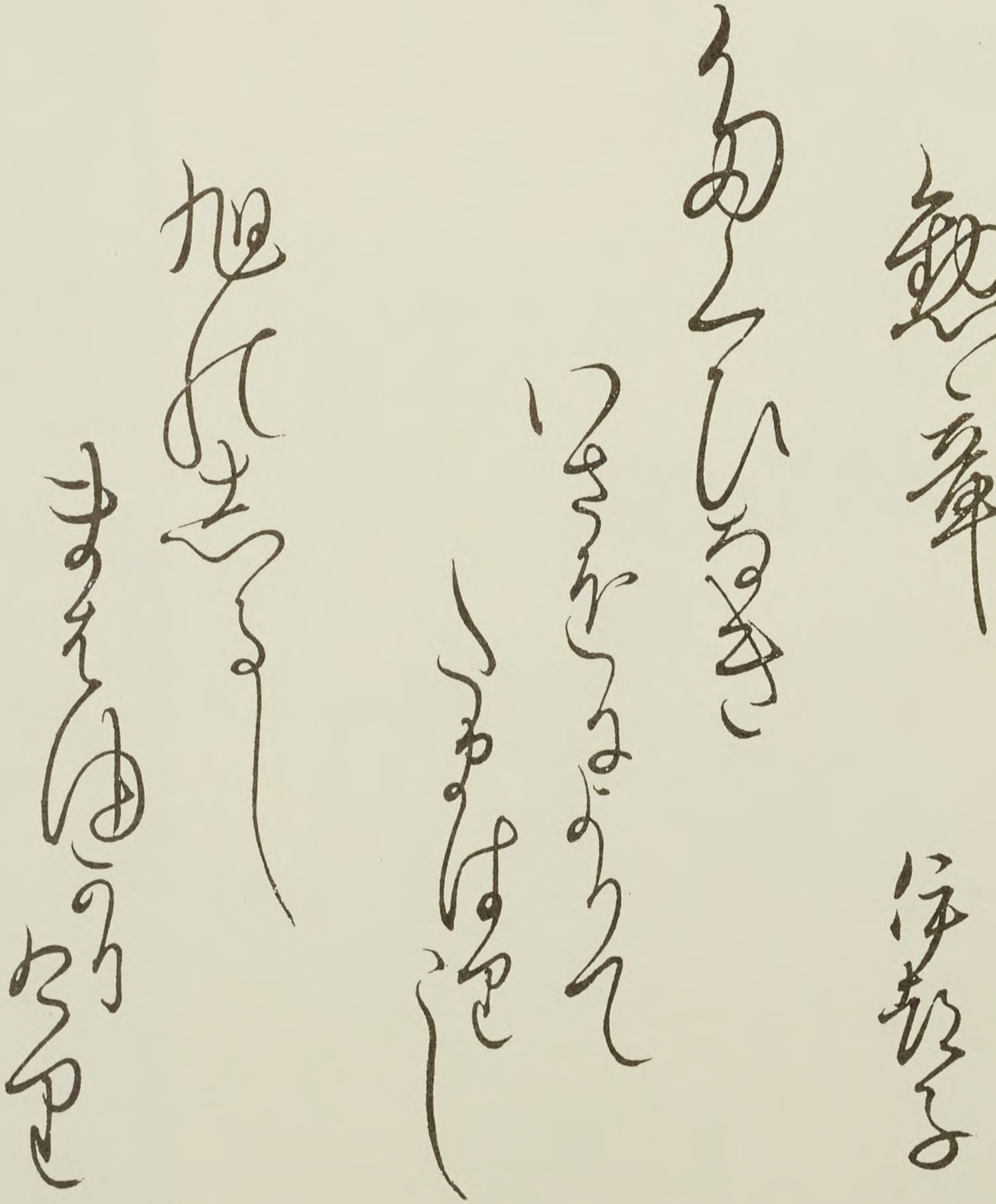
●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價十九圓
乙價十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價廿圓
乙價十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片切彫刻付
甲價廿三圓
乙價廿圓

◎印材製作篆刻
應需

右の外金屬の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品種々あり



近江國の紀野女



明治三十四年

紫雲靉靆、祥瑞著き朝暾を拜して、茲に、明治三十四年を迎へぬ。國運の年と共に旺盛に趣くは、ひとへに列聖の積威、聖皇の稜威によること今更、申すも畏からむ。たゞ謹みて。國家の萬歲を祝し奉る。あはれ、讀者諸媛も、昨三十三年に比して、ます〱多幸多福におはせよかし。わが女鑑は、亦、いよ〱、其の本領を發揮して、諸媛に酬ゆるところあらむことを期せむ。

女鑑 第貳百二拾號

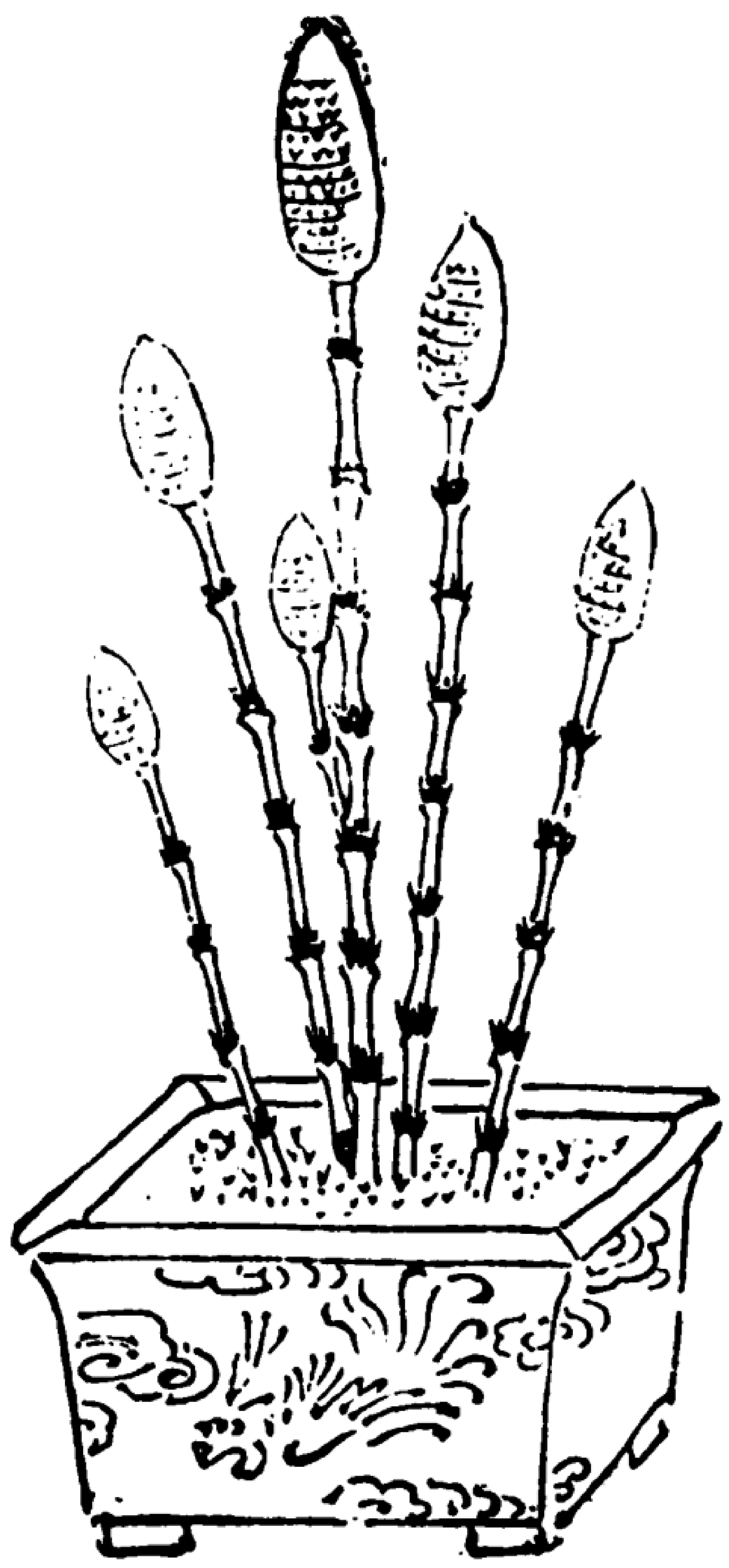
將來の女學界

明治三十三年は、とにかくに、女子界にとりては、幸福なる年ありきといふを得べし。嘗つては、世態の變遷の激甚なりしに乘じて女子の責任と位地とを認めず、たゞ冷遇し、動もすれば虐待し、剩へ、秀美卓絶なる固有の女敎を擲却し、彼等をして、無智不德の悲酸なる境遇に彷徨せしめて、毫も顧みるところなかりし社會が、女子の重大なる責務を負ふことを識り、決して、注意を怠るべからざるもののあることを覺るに至れり、彼の福澤諭吉氏の新女大學、及び、女大學評論と稱せらるゝもの、たとへ、本誌にても、屢、論せしごとく、はなはだ、女子の前途を謬り、女德を汚損せしむべきものありとはいへ、世人が、女子のために、彼等の言論をだに忽諸にせざるの注意を深く喜ばずばあるべからず、されば、女學校の如きも、明治三十三年に於いて創立せられたるもの尠からず、高等女學校のみ

にても、公私新舊を併せて其の數四十、一年の經費殆ど廿五萬圓、敎員の數は五百人を超え、學生は既に一萬に及びぬ。之を三四年以前に比すれば、學校の數に於いて四倍、經費に於いては殆ど二十倍、敎員の數にては七倍、學生に於いて十倍以上の增加あり。其の進步の度、むしろ非常といふべし。その他、地方に於ける婦人會の增加、女學雜誌の發行、彼の新聞紙が特に女子のために其の欄を設け、さらぬも、家庭の讀みものたるに適するやう、漸々、其の紙面を改めつゝある等、之を數ふれば、即ち、幸福なる年ありきといふも、不當ならざるべきなり。あはれ、幸福ありし明治三十三年は逝きて、今や新しき年を迎ひぬ。明治三十四年は、更に、多幸多福ならざるべからざるなり。

世人が女子に對ひて與へたる注意の多くは、其の要を得たるものなるべきか。また、女子自らが經營せし各種の事業は、果して能く、其の特性美質を發展して遺憾なきものなるべきか。彼の、非常に膨脹せし學校敎育は、皆、よく、彼等を眞誠の幸福ある地に導き能ふべきか。明治三十三年に於いての幸福が、三十四年に至りて或は幸福あらざる結果を貽すことなきを必しがたきものなり。

蓋し、明治三十三年に於ける幸福は、實に幸福の首途にして、眞誠に幸福なる地に達せむには、今後、非常なる艱難と經營とを經ざるべからず。而して、將來の女學界に於いて第一に決すべき問題は、猶、本誌二百號の臨時發刊にて論せし『如何にして女子の品性を高むべきか』ならざるべからず。



論説



愛情につきて（元）

三輪田　眞佐子

新玉の年のはじめのことほぎまをす。おのれ、女鑑紙上に於て、讀者と相交る、殆ど十年の久しきに及びけり。されども、いまだ、その聲を聞かず、その影を見ざりし讀者を、さながら、姉妹のごとき心を以て、老のくりことと煩はしからんもはゞからず、ます〳〵、女界の研究を共にせんことを、たのしみとはなしぬ。されば、本年も互に安全をいのりて、我ら同胞の祥祉を進めざるべからず。

去年の夏友人阿部優子の君の紹介を以て、秋田の人中川氏、おのれを訪ひ來り、種々愛情につきて質議せられけり。氏は、地方にて教育に從事する人とかや。實に愛情の如何なるかを研究するは、教育上必要なるのみならず、一家の團欒、及び、國民の團結に欠くべからざるものあるを以て、茲に、愛情の問題につき、愚見をものすることゝはなしぬ。

おのれいふ、愛情とは、廣き意味に用ひて、夫婦間の感情は更なり、親子相思ひ、兄弟相親み、朋友相助け、國民相救ふ、感情の根底は、恐らく愛情にありと信ずれば、教育に於て、人々に愛情を養成する必要あるのみならず、國民の生活上、一日も愛情を離れては、互に安堵あること能はず。亦、快樂あること、能はざるを以て、實際に於ても、必要ありといふべし。

儒教に仁は愛の理と說き、佛教にも慈悲を根本と

なし、耶蘇教にも神は愛なりといふを見ても、人生には、愛情の無かるべからざるを、知るに足らん。翻つて、我が三千年の歴史を見れば、大和民族は固有特得の國風をなし、世界萬國中、最も義を重んじ、愛を尊びしは、説明を要せざるなり。今人の感情を述ぶる和歌に就きて、例證を擧ぐれば、伊勢の詠に、

いなり山ゆきかふ人は君が代を
ひとつこゝろに祈りやはせぬ

これ、日本國民の御代を思ふ特徴なり。されど世亂れてたま〱逆臣なきにあらざりしかど、千歳の後までも、なほ、逆臣を惡みて、切齒するは、我が國民の君を愛し奉る至情にあらざるか。増鏡を讀みて、後醍醐天皇が北條高時のため、隱岐に遷され給ひしとき、美作にかりそめの、御宿りせさせ給ひしより、武士ども、けぢかく拜し奉るをあはれにめでたしと、おもひきこえければ、天皇

あはれとはなれも見るらんわが民を
おもふ心は今もかはらず

との、御製を遊ばさせ給ひし段に至りて、誰か涙にむせばざるものやはある。これ、君臣の至情にあらざるか、亦、土佐日記に於て、紀の貫之は子をおもふ情を述べて、

世の中におもひあれども子を戀ふる
おもひにまさるおもひなきかな

とあり。これにつけても、讀者は、親愛の唯ならざるを忘るべからず。小澤蘆庵の六帖詠草に、

父母のたびなる我をおもふらむ
まつらむさまのおもかげに見ゆ

と歌ひけり。そも〱、親を思ふ心にまさる親心と、吉田松蔭ももの し給ひけるがごとく、親の子

をおもふは、子の親を思ふ情より切なり。果して然らば、子たるもの、いかでか、慚愧感激せざるべき。故に、孝心の起らざるものは、夜半夢さむるころ、親が我を如何に保育し、如何に苦慮せしかを思繹せよ。誰か、沛然として親を愛する熱情起らざらん。

これを以て、人は、幼時に親を愛する情を養はざるときは、夙に親恩の深きに心つかで、後に至りて悔悟することあるべし。古人歌ひけり。樹靜かならんとすれども風やまず、子親を養はんとすれども親いまさずと。

一家の道徳上に於ける女子の力

岸田松二郎

人の家をなすや、必らず男女ありて、一家の支柱となり、之に屬する家族は、皆、之に依て支配せられ、其、運命を共にするなり。此の支柱は、實に一家の盛衰汚隆をなすの淵源にして、一家道徳の本源となるなり。詳言すれば、一家の婦たるもの、其の、夫に事ふるに、柔順貞實にして渝ることなくんば、其婦の誠實なる意に感じて、惰夫も尚其の志を立て、其の業に勵みて、終には、有爲の業を興すに至らん。普通識の男子に在りては、益其の志業を研磨して、端莊謹嚴の生活をなし、出では世人の標榜となり、入ては一家の模範となるに至るべし。貞淑なる婦人が、淫佚なる良夫に事へて、其の志氣を立てしめ、其の徳操を改めしめたる實例、古來、尠少にあらざるなり。婉娩聽從なる婦人が、頑冥の舅姑に事へて姦に至らしめざりしことも、其の例、亦、鮮なきにあらざるなり。良夫舅姑に事へて和順貞淑の徳全からんに

は、和氣靄々として室に充ち、温風徐々として堂に滿ち、他の弟妹子女に在ても此の圓滿平滑にして、而かも、和樂の濃露に沾ひ、忿嫉怨惡の聲を聞かざるなり。世間常に傳ふる所の、一家の風波なるものは、多くは、夫婦舅姑の間に胚胎せずんばあらず。其の所謂風波の動原たるもの、常に、婦人の行爲如何に存するなり。其の故何ぞや。蓋し、婦人は全く骨肉を分たざる他家より、枝葉根幹互に相離るべからざる親子兄弟の間に入り、其の最も親密なる親子の情を裁するに、其の最も、疎遠なる他人の心を以てするものなれば、事々物く親疎を異にし、離隔の念慮を其の間に存するは、必然免るべからざるの數なりとす。舅姑と良夫との間は、濃厚なる愛情を以て相交るが故に、時に或は念爭の事ありとも、固より、根幹相連るの間柄なるを以て、勃發せる感情作用の、既に業に、冷却するに至りては、純然たる親愛の情を損戕することなしと雖も、他家より入りて婦と呼び、舅姑と唱ふる間柄に在りては、一たび、心に含むことあらば、其の念慮の消長あるべしと雖も淡然として親愛の本情に立戻ること、蓋し、難しとする所なり。是を以て、舅姑と婦との交情は、如何に密なりと云ふと雖も、親子の濃厚なるには如かざるが故に、優良貞實の婦人と雖も、舅姑の親愛を買ふこと甚だ難し、況や。婦德の全からざるものに於てをや。是に至らば、如何に文學に長じ、如何に工藝に巧なりとも、之を以て彼に代ふること能はざるが故に、如何に學校敎育を受けたるものと雖も、必らずしも、此の患を除去して、圓滿なる交際を全うし得べしとは思はれざるなり。只、順良の心性を有し、嚴肅整齊なる父母の膝下に人となりたるものは、能く舅姑良夫の間に處して、渾

然たる和氣を保全し得べきのみ。苟くも、舅姑と良夫との間柄親密にして、夫婦の間柄も、亦、琴瑟を鼓するが如くならんには茲に、一家道德の基礎既に鞏固なりと謂ふべく、從て、之に屬從せる子女弟妹の如きも、皆、其の長を長とし其の幼を幼として、一家の德風全く成を告げたるものと謂ふべし。若し夫れ、一家の婦たるもの、德念の欠乏することあらば、夫婦の間柄親睦なるに從ひ、益舅姑と良夫との情交を隔離せしめ、或は良夫を敬重するの、念憂の、日々に消損し來りて、狎褻の擧措に陷り、他人をして嘔吐に堪へざらしむるもの、往々なきにあらず。此の類のものは、舅姑をして、我子は婦を娶らざるの前は孝心深かりしも、今は變じて、不孝に墮落し了れりとの歎聲を漏らすに至らしむる所以なり。嗚呼手を覆せば雲となり、手を飜せば雨と。男子の鐵腸、能く婦人の巧舌に翻弄せられざるもの、果して幾人かある。女子涓滴の涙は、能く、男子の萬斛の熱涙を釀さしむるに足るべく、其の巧言令色は、能く、男子を不理に導びき、不仁に傾かしむるに足るべし。家内風波の動原は、洵に、茲に基因すとは、豫言にあらざるなり。試みに思へ。一家の婦たるもの、舅姑に事へて巽順の德なく、良夫に事へて貞淑の心なくば、其の子女に敎ふるに、孝道を以てすと雖も、子女たるもの、其の母の素行を視て、爭でか、其の敎に遵由することあらんや、又、其の弟妹に諭すに、友悌の道を以てすと雖も、之が子弟たるもの、焉ぞ頭を低れて之に率由する所あらんや。子女弟妹既に統一せず。焉ぞ僕婢の矜式する所あらんや。家内の風波既に興る。焉ぞ、一家の、德風をなさんや。又、矧や、一家の隆昌に於てをや。蓋、如何なる家に於て

も、必ず家風なるもの丶存するなり。而して、家風なるもの、多くは婦人に依て維持せらる丶ものなり。嚴然たる家風の存するものは、其の家必ず鞏固にして、家風の變遷常ならざるものは、其の家の隆替定らざるなり。此の家風なるもの、何故に、婦人に依て維持せらる丶か。他なし。男子は其の性粗宕にして、細節に區々たるに堪へず。又、其の職とする所、多くは表面に在て事をなし、内事を顧慮するの暇を得ず。終生營々として外事に奔走し、又、婦人に先て死することの多きは、統計の上に視て知るべし。故に、婦人は、常に家内に在て、其の先代の家風を繼承し、又、之を以て其の子に授くるを以て、世の老姑が、其の婦に嚴酷視せらる丶を見て明なりとす。然らば、則ち、家風の良否正邪を視て、其の家婦の德不德を察するに足れり。君子は家を出でずして敎を國に成すと。余は、敢て曰んとす。婦人は閨閫に在りて敎を家に爲すと。

養蜂業と蜂蜜（四）

近藤隆

第二　蜂蜜は佳絕なる醬なり

蜂蜜は、啻に、健康を保護するのみならず、又、佳絕なる醬なり。人類の巧技は、如何ぞ蜂房の美にして芳ばしきに如んや。蜜蜂は、恰も稅吏の如く、爛熳たる百花より馥郁たる花蜜を徵收し、蠟様の巣房に蓄へ、純白なる蓋を以て覆ふものなれば、豪奢なる食卓上にありても、常に第一の呼物たり。而かも、其の價貴からずして、一般人民の常食にも適すとは、又、重寶ならずや。

第三　蜂蜜は經濟的食料なり

蜂蜜は、バタに比し之を食するに於て、消費量に大差なきも、價格廉なれば、之をバタ又はジヤミに代用して、經費を節するを得べし。而して、バタは最良なるものと雖も、新鮮なる時のみ使用に堪ふるも、蜂蜜は長時間保存するも、腐敗の恐なし。

第四　蜂蜜は小兒の食料に適す

クック教授が、凡て小兒は甘味を嗜む事甚しく、甘味は、又、日常缺く能はざる所のものなれば、よろしく食事の都度之れを與ふべし。即ち、蜂蜜を與ふる時は、一方には、砂糖の食量を輕減し、他方には、砂糖の過用による疾病を豫防して安全なりと云しが如く、老人が、割合に脂肪ある食品を好むに反し、小兒は、甘き蜂蜜を好むことは、バタに於けるより甚し、蜂蜜は、實に、小兒の好食料なり。

第五　蜂蜜は飲料に適す

砂糖は、茶又はコーヒーに混じて、普く用ゐらるゝも、砂糖に代ふるに、蜂蜜を以てせば、衛生上大効あり。日耳曼にて所謂蜂蜜茶の如き之なり。「一杯の湯に一二匙の分離蜜を加へたるもの」如此き蜂蜜茶を用ふる事永年にして、爲に長命を保てるものさへありと云ふ。

第六　蜂蜜の種類と香氣

世人、動もすれば即ち曰く、蜜は蜜なり、蜜豈に種あらんやと。之れ大に誤れり。蜂蜜は、或は凝固体を爲すものあり。之れ養蜂者の成熟蜜と呼ぶものにして、一瓦(二升五合強)十二封度の重量あり。或は、全く之に反して稀薄なるものあり。或は顆粒狀の結晶体を爲すものあり。或は、水の如く無色なるものあり。或は、又、全く暗黒色を呈するものあり。

又、蜂蜜は、其の原料たる花の何たるによりて、其の香を異にす。されど、茲に諸種の香氣を區別して説明する事頗に難し。吾人は、よく薔薇と和蘭石竹との香氣を分つことを得んか。なれども、始めて之を嗅ぎたる時は、何れか何れの香なるかは、到底辨別する能はざるべし。兎に角、花は各各その香を異にする如く、同樣に、蜂蜜も其の香を異にするものなり。

淡色の蜂蜜は白和蘭蓮花、菩提樹、爽路花等より得べく、黑色の蜂蜜は薫菜、白揚、蕎麥等より得べし。而して、味も亦蜜の種類によりて差異なり。和蘭石竹の蜂蜜は、蕎麥の蜂蜜に比して價高し。これ、其の色と香の優れるも、又味の良きとによる。されど、或は前者より却て後者を好む人あり。或は自己の尤も慣熟せるによりて、特種のものを好む人あり。必ずしも一概に云ふを得ず。例へば、カリフォルニア人は菩提樹蜜を嗜み、ペンシルバニア人は和蘭石竹の蜜を費するが如し。





勅語要義（承前）

東久世通禧謹述

斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の倶に遵守すべき所、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず、朕爾臣民と倶に、拳々服膺して、咸、其の徳を一にせんことを庶幾ふ。

〔斯道〕謹みて案ずるに、我が神州固有の大道は、其の源、天に出で、皇祖皇宗の遺訓によりて、愈、益、明に、歷世の臣子遵奉顯彰して、今日に至り、以て、其の美を完うせるなり。されば、其の原く所、自然にして、人爲假想のものあらず。故に、事、即、道にして、道、即、事なり。事と、道とは、常に、一致同體にして、天地開闢の元始より、祖宗の履み行はせたまへる事は即斯の道なり。斯の道ありて後に、この事ありしには非ず。故に、忠孝の實ありて後に、忠孝の名あり。徒に、其の名を美にして、其の實なきが如きに非ず。懿倫、道徳の標準は、今古一貫神聖なる歷史にかゞやけり。抑、世界各國、道徳の教、一ならず。其の國家の體相と共に、各異なり。獨、わが皇道は、天下の公道、萬世の大經にして、時と處とによりて、其の宜を異にせず、今古、東西、之に遵ひて可ならずといふことなし。他の、專一部民族のみ信仰崇拜して、動もすれば、他族の信仰と、相矛盾するが如き比にあらず。誠に、宇内萬邦に照被すべき大道なり。我等臣民、ひとしく、皇祖の

末裔を辱うし、萬世一系の　皇室の厚徳に浴する者、斯の道の高大神聖なる所以を鑑み、之に遵ひ之を守り、以て、　祖宗無疆の洪徳深恩に報いんことを思ふべきなり。

〔咸一其徳〕高大神聖、萬古不易の大道は、實に、天地開闢以來、我が磅礴して、天神、天祖、歷代の皇上、之を宣布し給ひ、以て、世々其の光輝を顯揚せさせ給へり。時に治亂あり、道に顯晦ありと雖、皇上、御躬、斯道の明範、萬民の儀表となさせ給ひ、皇徳を布かせ給はざるなし。而して、今、又、　今上天皇陛下、この優渥なる聖諭を申ね、衆に先ち、御身を以て、之を率ゐ、相共に之を愼み、之を守り、以て、齊しく、美徳を成さんとし給ふ。誰か感佩し奉らざる者あらん。我等この皇徳の下に立ち、斯の聖勅を崇る者、深く、斯の大御心に鑑み、造次顛沛にも忘るゝ事なく、夙夜、精勵刻苦して聖意に協ひ奉り、以て、人生の大義臣民の本分を全うせん事を期すべきなり。

伏して惟るに、政教一途は、我が國家神聖卓絕なる所以の本源にして、歷世の　皇上は、國家統治の大權を總べさせ給ふと共に、又臣民の教化の本源にましませり。故に、臣民の形體を撫育せさせ給ふのみならず、その精神をも愛養せさせ給ふこと是、古來の明範なり。さて、臣民聖慮を奉じて一なるは、これ、億兆一體なるなり。億兆一體上下一心、唯、聖上の示させ給ふまに〳〵、怠らず、過たず、以て、この國家を擁護せんには忠孝の道、これより大なるはなし。

近江國の紀野女

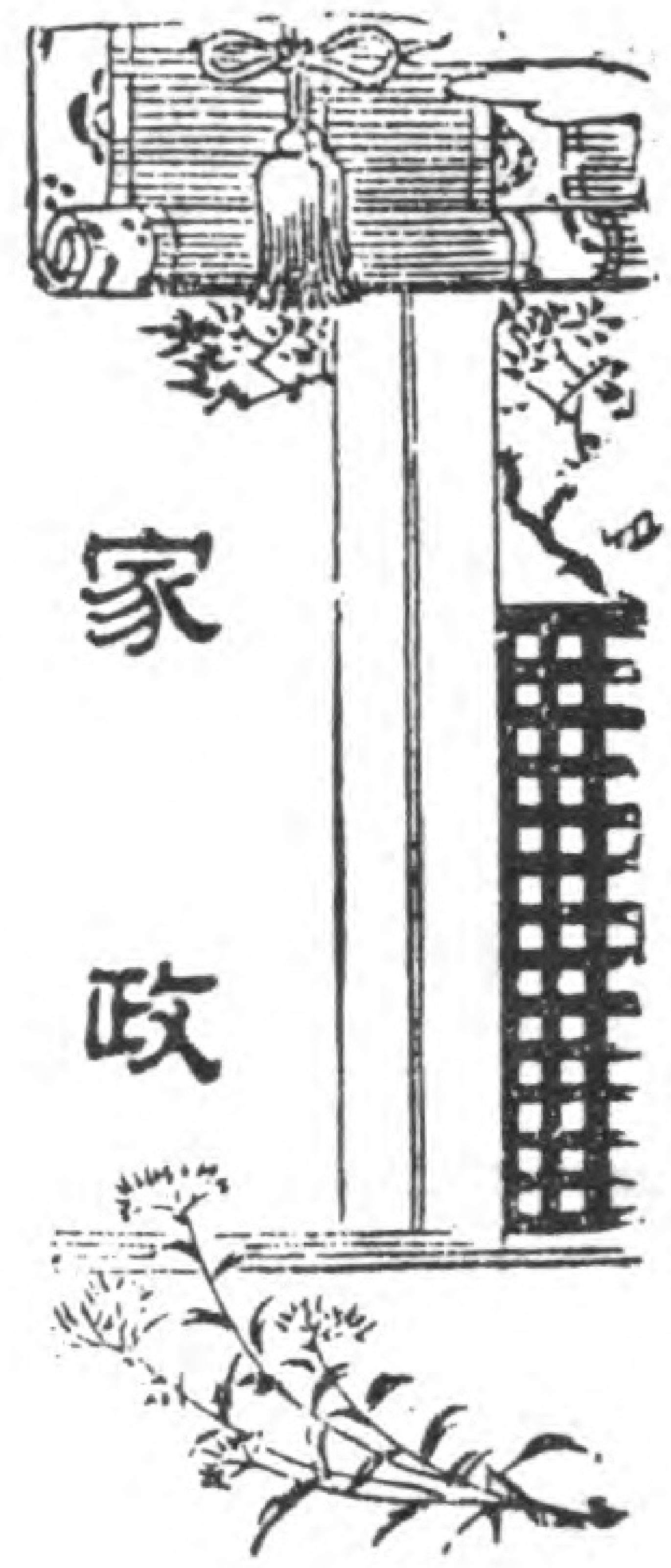
田島利三郎

今こそあれ、封建のころほひには、百姓と稱せらるゝ者は、士より御言葉を賜はるをなどあれば、此の上もなき面目なりき。實に、同じく諸侯に仕ふる中にて、足輕といはるゝ身分のものは、しのつく雨の中にても、手足の指の墜ちむばかりの吹雪の時にても、若し、路にて、士以上の人に行遇へば、傘をとり下駄を脱ぎて禮せざるべからざるが通例なりきといふ。況や、水呑百姓の女の身として、領主の前近く召出され、手づから物を賜はり褒詞を下されし、一家一門の榮譽いかばかりなりけむ。さても、心ひとつの善行は、千々の寶珠黄金にもまして貴きものなりけり。

近江國犬上郡高安村に紀野といへるものありけり。妹二人と、晝は、餅團子やうの物を往來の旅人にあきなひ、夜は、よもすがら、苧をうみ縫物の賃仕事などして、辛くも、活計をつゞけぬ。父は作次といひて天明七年に死去り、母なる人も其の翌年に失せき。兩親ともに極めて正直なりしが、病苦の中にても、年ごろ借財を殘せることを強くなげき、うせなんとせし時には、父も母も、皆、娘を枕頭に呼集ひ、われ等存生の中に、如何にもして借財をつくのひ、夫々に、嫁せてむと日夕思煩ひしが、夫かなはずして露の命いま消えなむとす。あはれ少女等の行末のおぼつかなさよと、手をとりつゝ打泣きければ、紀野は、夫ばかりの事心にかけ給ふべき事か、償はむに何事か候ふべき。妹も既に成人びて候へば、共に、この家を守りて、手業をも勵みなば、いくばくの歳月を經ずして償了へ候はむ、その上にて、三人が身の寄邊をも定

め、永く亡御跡を吊ひまゐらせむ。必ず必ず、御心になな懸けさせ給ひそと、流るゝ涙おしぬぐひつつ、言慰めければ、然らばとて、父も母も、打悦びてこそ空しくなりしか。

これより、父母の靈前には、坐すが如く日々に供物たてまつりて、恭敬おこたらず、また、年弱き女のみなれば、萬一、世のそしりにもやあづからむ。さては、わが身は兎に角も、亡き人々のため、最口惜しからむとて、身のかざりをさけ、萬につつしみ戒め、晝は終日家業をいそしみ、日暮におよべば、内より戸をしかと鎖して、餘業を勵みつとめて、月々、なにがしか借財を償ひぬ。債主も、其の志をあはれがり、其の儀には及ばずとて強ひて止めしかど、さては、親の遺言にたがひて、不孝の罪いと恐かれぞと、決して返濟を怠ることなかりき。婿をといへば、それも、やがて償了へたらむ後にこそとて、是も亦うべなはず、妹を戒めはげまして、一向、亡親に立てし言を果さむとする志、世に類例もあるまじう聞えけり。寛政二年十二月、領主より米を賜ひて其の行を賞せしが、次の年の三月、巡郷の事ありし時、側近く紀野を召して、わが領分よりかゝる孝行者を出ししこと、わが面目も此上なきぞと、負債を償ひて餘あるばかり黄金を賜はり、村役人にも、よき婿がねをえらびて亡父母の心を安うせさせよと、この孝女のために、たのみ聞えさせ給ひければ、彼の女と村を同じうしたるばかりに、勿體なきほどの榮譽を得つるよと村役人ならぬ人々さへ、涙をおとして感ぜしとぞ。霜雪を經て松柏の操いよいよあらはるとかや、年頃の姉妹の心づくし、聞くだに傷ましき限ならずや。されど遂に斯の榮譽を荷ふに至れる、其の折の歡喜、亦、いかばかりりなけむ。



女禮

婚禮式

有住常子

(合盃)

○長熨斗蚫進めたりし樣

嫁婿上下の座につくとき、次席より通の女、長熨斗蚫を衝重(俗に三方を云)大奉書紙ひと重敷きて、熨斗蚫の元を、紅白の紙にて包形してのせて、前に象眼をして左手をいれて、さゝげ、右にて縁を下より受て、向の右左に白米、干山椒、手前の右左に熨斗蚫、ちひさく結びたる昆布もさしたるを、少づゝ置れたる元包は、紅白の水引にて、梅の形結たるを、つけたりき。是等の物のゆれざるやうもちて出きたるを、婿方の介副立て、筋違に互に向合て、左半足づゝ引て居り、通の者衝重を置て、縁をそと取りて、左にめぐらし、頭を右、元包を左に持出たりし如く、介副に進めて退く。介副受けて上座を向き立て進み行きて、男女の眞中少下座に居り、熨斗蚫臺下に置きて、衝重の裾をもちて、眞中に進め、右左の手を膝頭につけて、右膝を引きて爪だち左膝を引きて、爪立、又、右左右と引て、左右の手を膝の上につけて、右膝頭を、すこし持擧、左膝頭を疊にずらせて、右に躰を捻るやうにして、(是は立よきためあり)眞正面を向いて立ちて、右足左足と引さがり、右

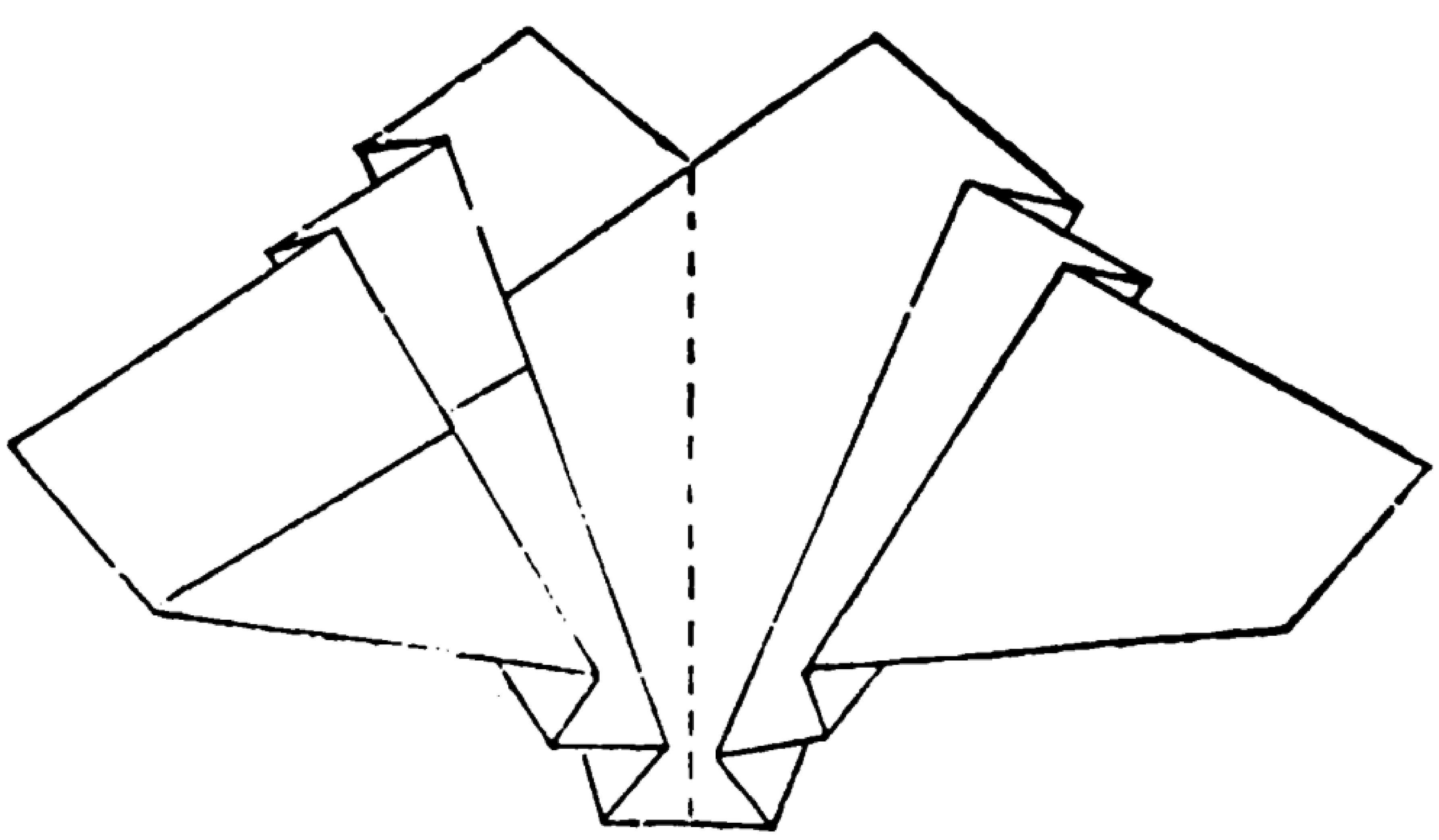
足を二番目にさげたる、左足の後に一文字につけ、次に、左足を右足の爪先に冠らせて、踏揃へ、左足より進めて、梱外まで退きて、右足を左足の爪先に横につけて、次に、左足を右足の後につけて踏揃へ、左半足引て居りて、右足の手を進め頭をさげ、禮をなせりき。此の時、婿も嫁も介副も一同に平伏したりき。介副は、直に立て進み行て、衝重より、三尺ほど手前にて居り、左足の手を並べ進め、右膝左膝を進めて衝重の持よき所に至り裾を持ちて引寄て右手に緣左手眼象と先の如くもたげて、右膝を引きて爪立左膝を引て爪立て、右に躰を捻ること先の如くして、右左右とめぐる事もさきの如くして、次席に退きぬ。

折方

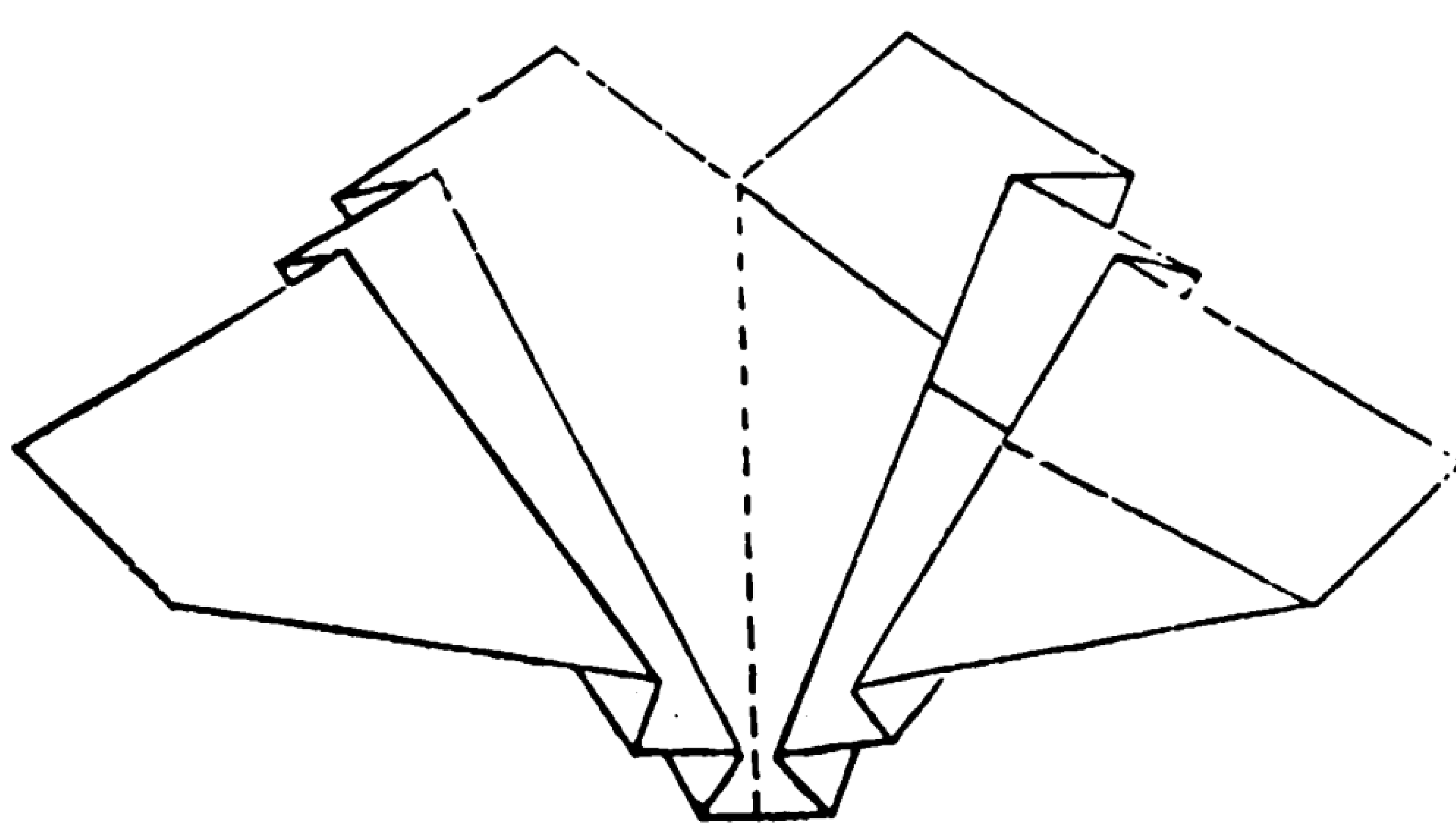
瓶子蝶

有住くわう子

雄蝶は、はねを下にまき、雌蝶は、はねを上にまく。紅白二枚重なり。また、中折は、雄蝶は表へ、雌蝶は裏へ折りへこますあり。



雄蝶



雌蝶

茶の湯

茶禮初學

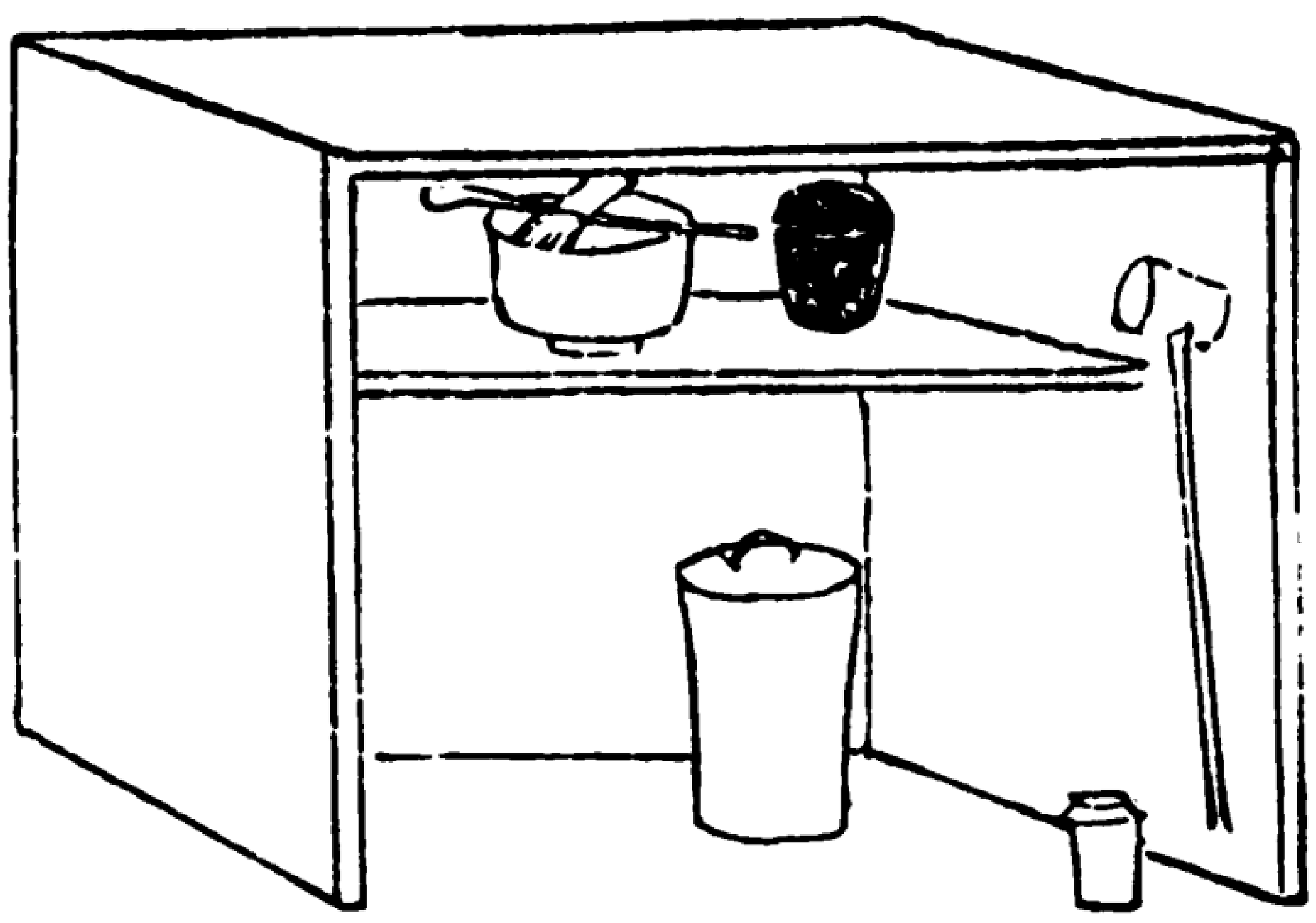
孤峯庵碌仙齋不羨

關 葦 雄

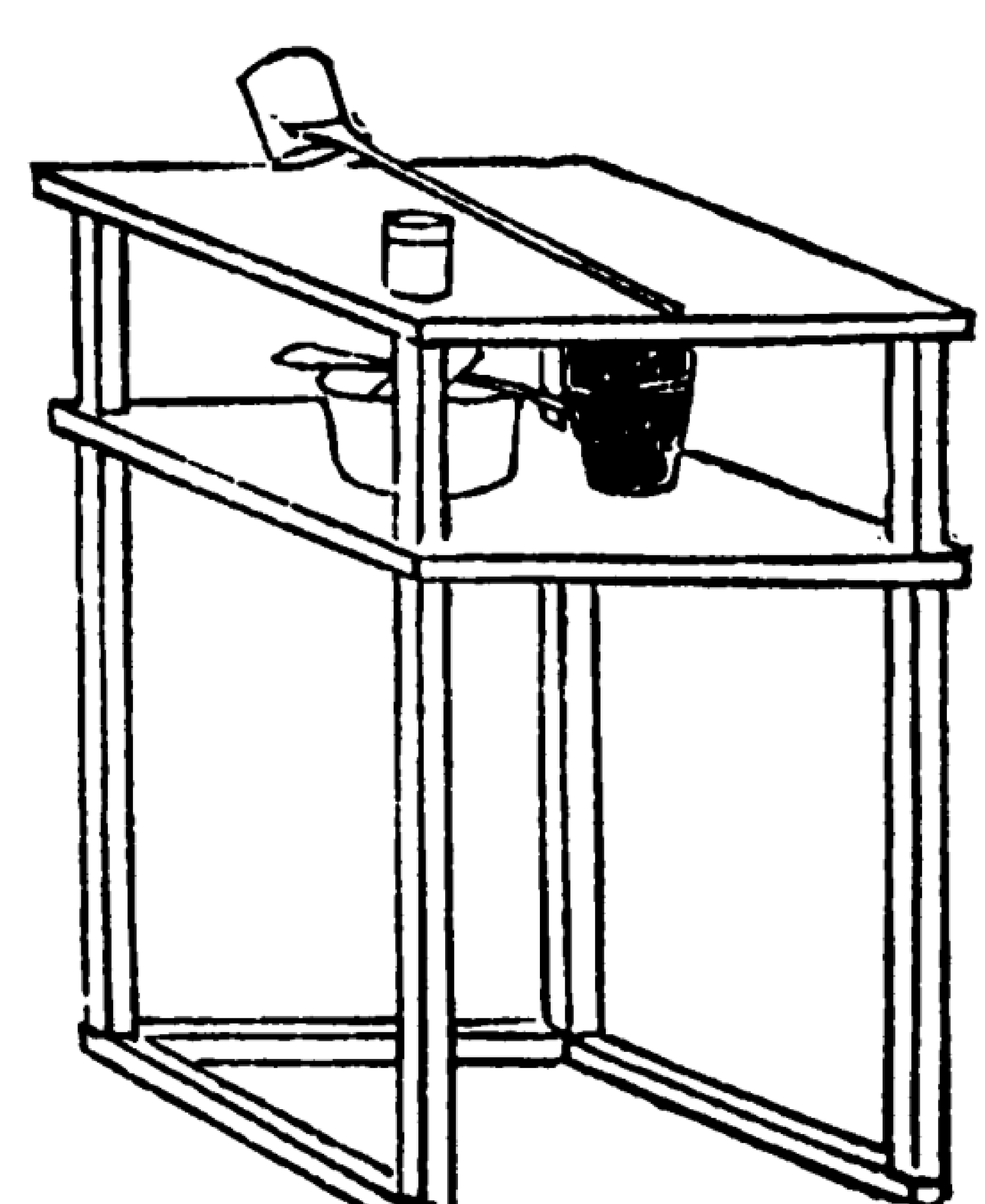
偖、是は、鳥渡皆樣方へ御咄が有升。明治の大御世も、茲に最早積て三十四年一月一日に相當致し升た。今上天皇恐多事ながら聖賢慈仁の大御心を以て、國を治め臣民を撫育し給ふ。民是に靡き仕奉り、士農工商各安穩に業を營む。洵に、幸福の至りならずや。孤峰庵不羨、茶道禮節の業務を執る聖代の民難レ有と言ざるを得ず。然るに、本鑑一月五日、第二百二十號の發兌に臨み、一言以て愛讀の諸君に對し、新年の祝意を呈せんと欲し、考一考首頭を捻りたれ共、學なく識淺く、加レ之、再兒の老耄如何ともなす能はず、雖レ然、茶道上にては、一月中は數奇の人々、又、斯技に專門家も、各自發會を催し、知己友人又門人社中を集合して、大福の茶を點らる。是も、古き濫觴にして、東京にては川上不白以來（但天明年間よりの事なり）諸流共に、其の古例の式を行ふ事は大同小異なり。今は當流の例式を概略書して、諸孃令閨方の參考に供し、一月の祝詞に換んと欲す。先、日限は各隨意なり。知音社中の人々へ案内をなす。但そかき又は口達成規なし。偖其の當日、床には三幅對二幅對一幅物にても、目出度圖柄の掛物を掛る、床の隅柳釘には、青竹の花入を掛、柳椿を生る。柳の枝は、一月は花葉無レ之故、枝數を多くし房々と生べし。椿は根締なり。床

の上には中央鏡餅（利休好丸形餅臺足は十文字足左の方は熨斗）折形に包み、遠山臺に据置。右に喰摘（但如心齋發明の小形臺有レ之。內に高立を付、洗ひ米を山形に盛、眞中に若松を立、四方の隅には海老或は舞鶴の類を建る。米の上に勝栗、棐、キンカン、結熨斗、結昆布を置飾付る。釜は、富士形、千本松、炉縁高臺寺蒔繪、

飾り道庫
大目點
總飾



二重棚 檜製造溜塗 祥翁吸江齋宗左發明
一閑張は碌々齋宗左發明
大寧三重棚に仝し



臺子は定旦好、爪紅、青漆、刷毛目、（但し、此の臺子、東福門院樣へ獻上のため好みし由。高貴の御婦人方の御遣料には、至極美麗にして最妙あり。）臺子飾の器具は、年々見計無二定式一、茶入は、川上宗汁好、在判金紛潰し蒔繪棗中形、甲に舞鶴蓋裏には金粉にて龜の蒔繪、茶杓孤峰不白翁作十二本入の內、十二支を合せて用レ之。茶碗は、赤樂例の島臺あり。（但し、是は不白翁在世中、千家傳來の道具諸方へ散在せし中、

冬木某所藏に係るもの數點在しを、同翁大に周旋盡力して、再、千家へ復歸したり。如心齋、大に歡喜雀躍して、不白翁を招待し、酒宴を催し饗應す。此の時に樂吉左衛門に命じ、大盃二ッ組を令レ燒。是を出して酒を奨め、其の忝を謝す。不白翁、此の盃を持江戸に歸りて、則、發會の大福に用ひしより社中は勿論衆人是を購求し用ること丶はなれり。）二個組、上は内金箔置下は銀箔なり。我草庵も是を用ゆる事例也。毎年一月十二日を以て定日とす。先、當日自他の賓客來會次第、懷石の配膳をなす。五人或は拾人宛、献立も定式なし。一汁三菜、午後四時頃、右畢て門人の内、高弟の者炭手前を務む。炭臺敷紙色目交合ブリゝ、利齋作久田宗參箱書付、灰器燒拔煮音松風に至れば、不羨正服を着し、十德を穿ち、紫の帛紗を腰に差はさみ、

既に點前へ臨むに及んで客員の座を定む。席の順序は、發物の階級に居並ぶ。次に菓子を出す。腰高の饅頭なり。一の側二の側と區別す。次に、庵主茶碗を持出、正格に嚴肅に且座修禪して心氣一息一禮をなし、大福の茶を點出す。上の茶碗は一の側に傳喫し、二の茶碗は二の側に喫廻す。服加減、茶銘、詰主、聽合等の式は、上客常の通、一の側の茶碗戻れば、各一禮して主方仕舞事如レ常。次に、棗、茶杓袋を上客好みて拜見すること如レ常。啻、此の時の道具拜見に限り、餘り多人數の時は略して、上客より直に主方へ返す事例也。右、目出度畢て、後段を出す事もあり。若、出せば吸物肴三種を進めて祝宴を催し、座興には口演の茶番狂言を務むるものもあり、隱し藝を取出し、立ちて舞ひ或は語り、或は小謠もあり、其の階樂は又茶の外にて、

愉々快々、場合に寄りては、鳴物の出る事も有レ之、衆庶佳興に入て、終りを告、披きて各自歸途に付く。

たちぬひ

毬のかゞり方

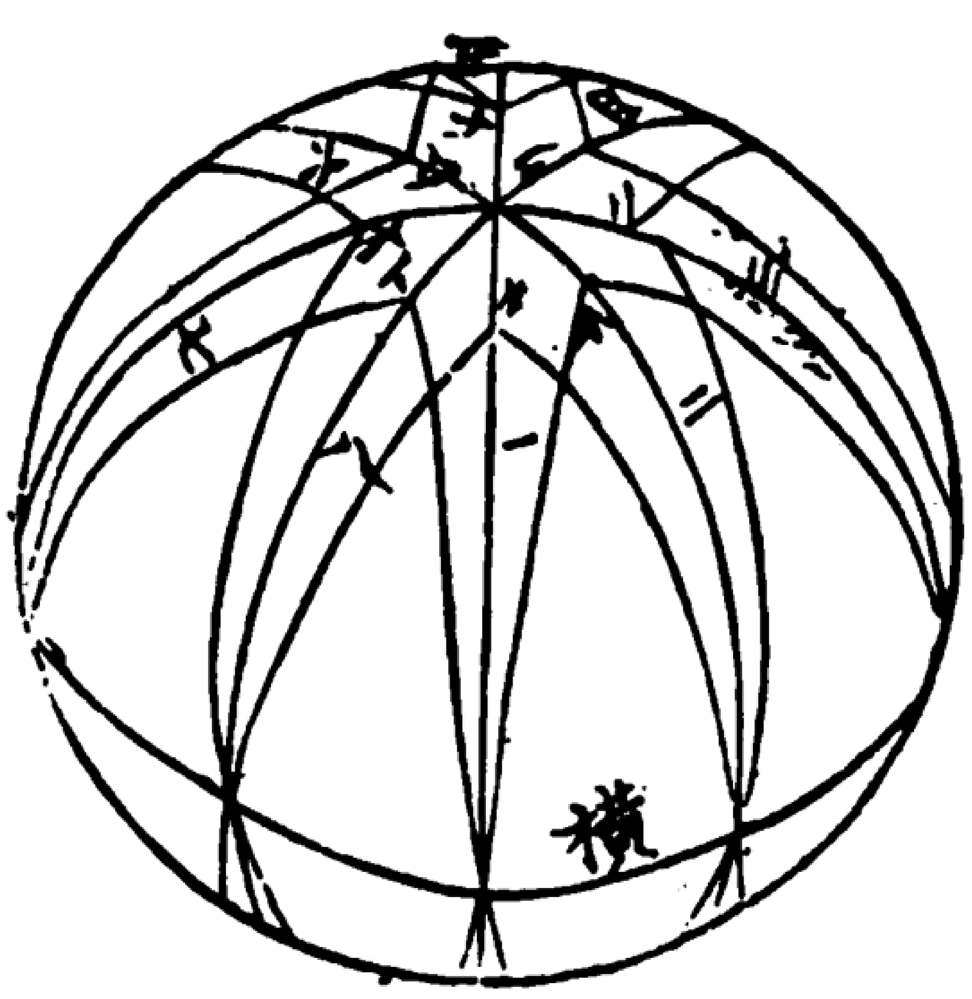
西山たい子

新玉のゝどけさに、毬などかゞらんも、また、興ある事にて、初春のよき細工なるべし。毬のかゞり方はいろ〳〵あれども、丸きもの故、云ひとき難ければ、此處には其の中の説明易きをのみものせん。

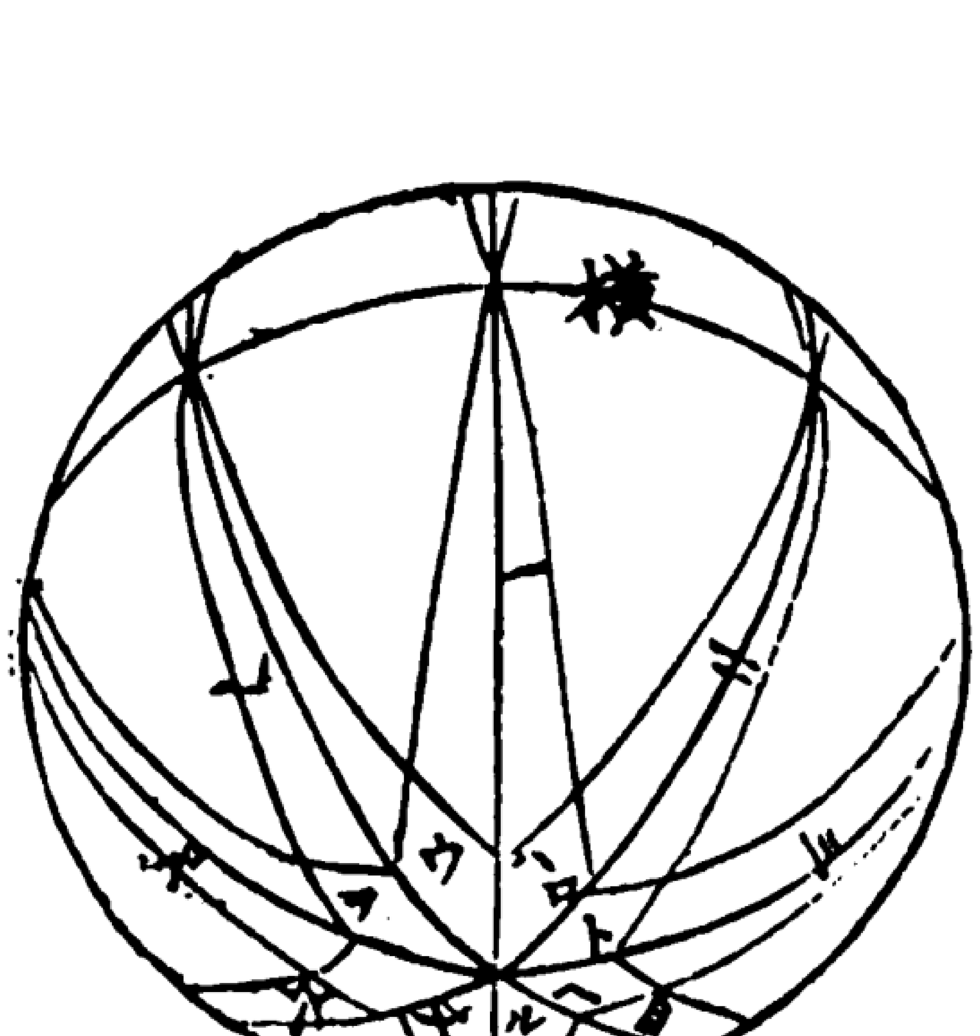
八花形のかゞり

まづ毬の眞中を定めて、始めは口かゞりにて、

上圖の如く、り毬形に四條をかくるときは、往き返へりにて、即ち八條になるべし。但し、その條の間を、廣き、狹き事なきやうに、平等になしおくべし。さらぬ時は、花の形いびつになりて、見苦しかるべし。かりに、その條を縦と見なして、毬を横にまわし、其の條の眞中を横ぎつて、一すぢをぐるりとかくべし。即ち  圖の如くすべし。これ等、針にてかゞるもよろしけれど、人の、口かゞりによくなす所なれば、分明やすきため、口かゞりを用ひおきぬ。



上半毬



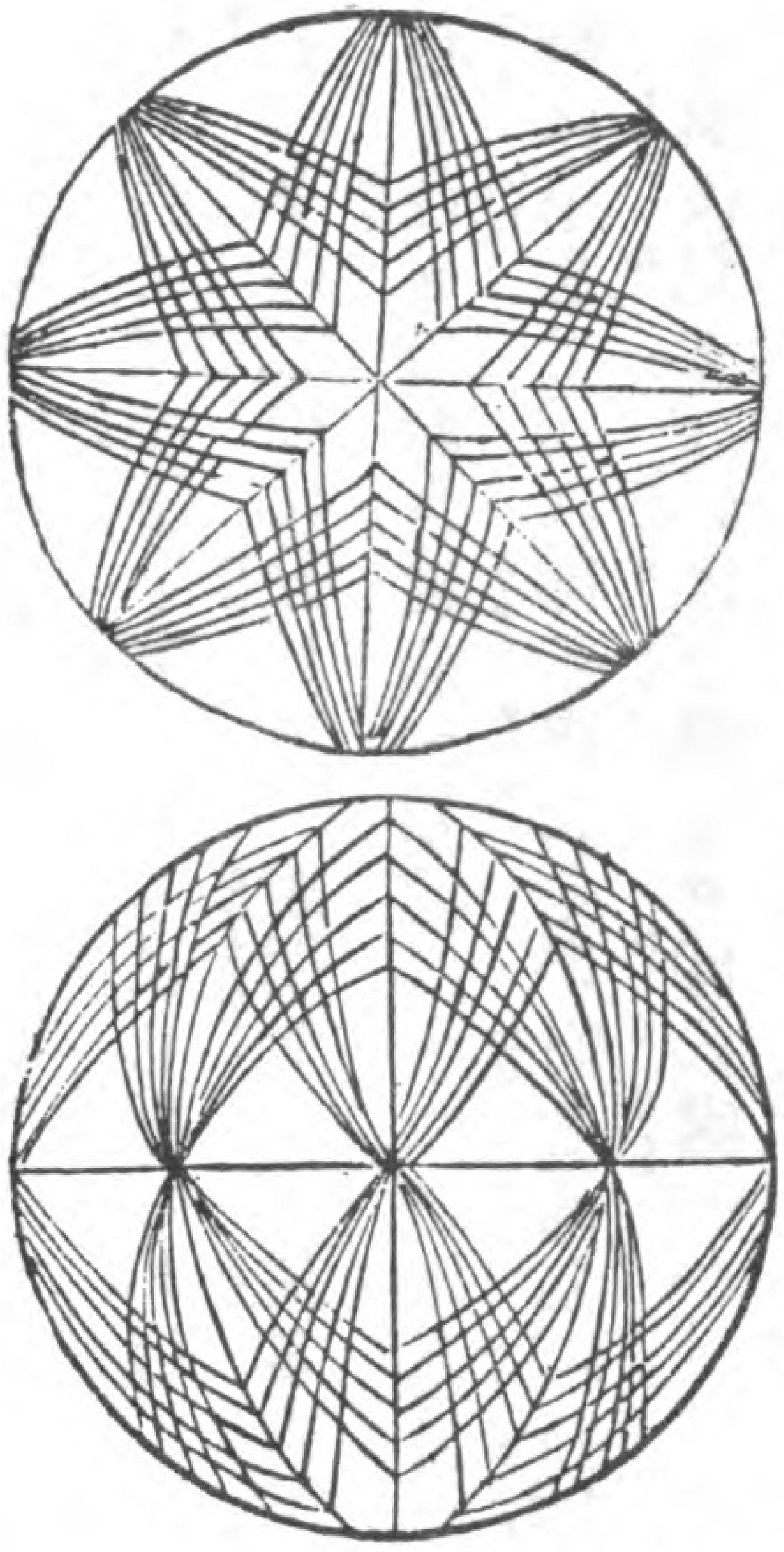
下半毬

毬は、丸き故に、うしろより、前あり、上を明せば下かくれて、上下を共にあらはし難ければ、此處に上、下の二つに分けて、説明せば、見る人、よろしく合せてわきまふべし。

まづ針に糸して、イ印の處にその針を通し、一印の線を眞に見て、斜に下圖のロ印の處へかけ、そのロ印の處へ針先を通し、ハ印の處にぬき出し、此度は、二印の線を眞にしてまた斜に上圖のニ印の處に針先をさし、ホ印の所に通し、それより、三の線を眞にみて、前の如く横線を斜めにかけて、下圖のヘ印の處へもち行き、その針先をトの所へ出し、此の圖の裏側四線を眞に見て、同じく斜めに、上圖のチ印の處へもち行きて、針先をさし、リ印の所に出して、五の線を眞に見て、圖のうらがはを例の如く斜めに下圖のヌ印の所へもち來り、針を通し、その先きをル印の所に出し、

六の線を眞に見て、又圖の裏側を斜めに、上圖のヲ印の處に針を通し、ル印の所にはりさきを出して、七の線を眞に見て、例の如く斜めに下圖のカ印の處へもち行きて、針をヨの所に通し、八の線を眞に見て、上圖のタ印の所に持ち行き針先をオ印の所に通し、八の線を眞に見て、下圖のハ印の所に持ち來り、針をその處より、カ印の所にぬき出し、一の線を眞に見て、上圖のホ印の所にもち行きて、針を通し、タ印の所にさきを出し、二の線を眞にして、下圖のト印の所へ針を通し、ロ印の所へ出し、三の線を眞にして、上圖のリの所へ通し、ニ印の所へ出し、四の線を眞に見て、斜めに下圖のル印の所へ持ち行き、への所へ針先を出し、五の線を眞にして、上圖のワ印の所にもち行き、針を通し、さきをチ印の所へ出し、六の線を眞に見て、例の如くなゝめに下圖のヨ印の處まで

もち行き、ヨより又印の處へ針を通し、七の線を眞に見て、上圖のハ印の所へ持ち來り、針先を其の處より何方へなりと通して切るべし。まづそれにて、一重の花の形をしたるなり。二重めは、その重の少し下に、一重をかゞりしと同じやうにすべし。三重めも、四重めも、みなその例にならひて、五重にも八重にもすべし。圖を見て推しはかり給へ。又、針を通す時には、線の彼方側に出すべし。花になし終りし後に、また、横線を上より、一め〳〵にぐるりとまはしかくるべし。



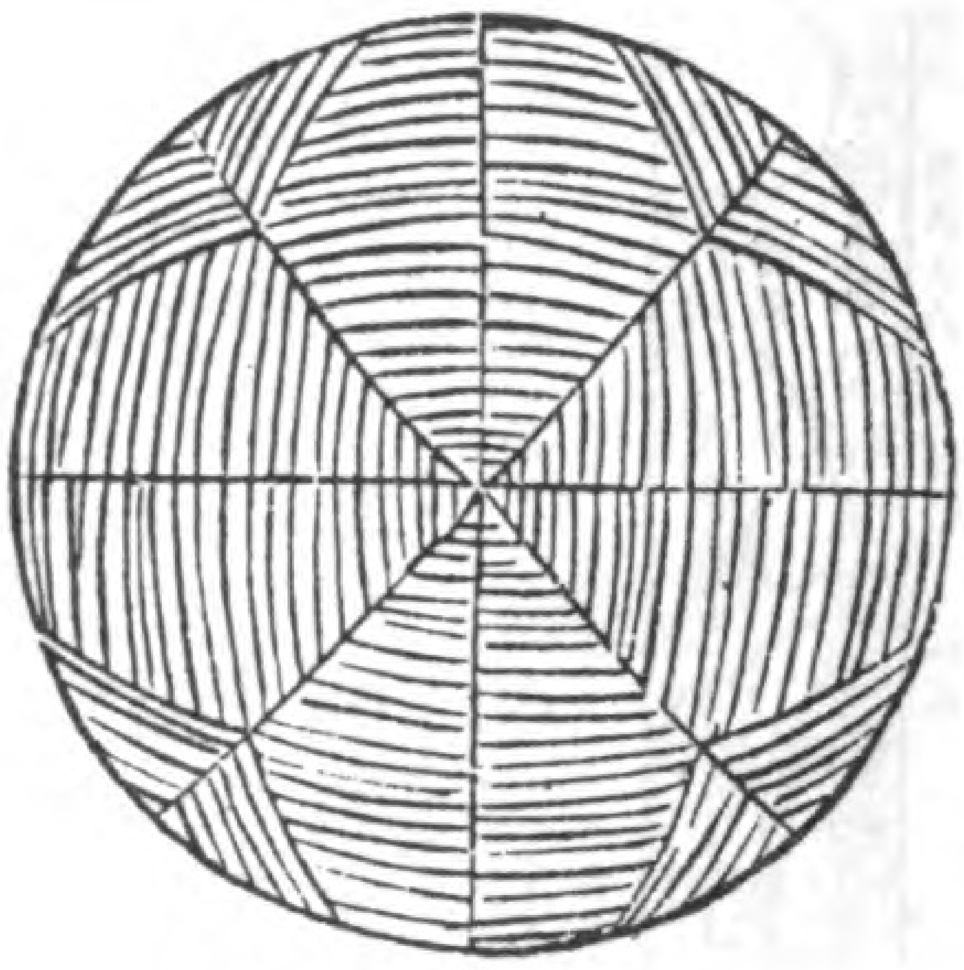
その圖

ますかゞり

ますかゞりも、最初は、八つ花のかゞりの如く、縦に口かゞりにする如く四すぢ、線をかけ、横に三すぢまたかくれば、縦横共に同じく上圖の如くなるべし。その角になりたる所、即ち、イロハの印のある所を、イより口、口よりハ、ハよりニ、ニよりホ、ホよりヘ、ヘよりト、トよりチ、チよりイへと針に糸してかゞり行き、イに至らば、まづ口に行き、ハに行き、最初の如く一面に糸をかけゆくべし。又上圖の如くなりたる處へは、イロの條の如く、横に糸をかけ渡し、前の如くにかゞり行くべし。さやうに四角に〳〵ととりてかゞり行く時は、四角の處、八面出來るなり。かゝるを升かゞりと云ふなり。糸は一面にかくる故、太き糸にては、あまり重くなりて、はづみわるし、すが糸の如き細き糸を用ゆべし。また

糸の色を、隣り合ふ處はかへるがよろし。

その圖



だいどころ

淡雪鶏卵

鶏卵の白身をとり、平たき丼にいれ、箸又は、茶筅にて、かきまはし、泡立ちたる時、沸騰ちたる、清汁の中に、一杓子づゝ、いれ、ざつと、沸騰て、椀に盛り、出すべし、風流にて、よきものなり。

蛋黄蒲鉾

前に、白身をとりたる、黄身を、丼にいれ、よくかきまはし、葛粉を、水にてとき、交ぜ合せ、食鹽少量を、加へて、鹽梅し、器にいれ、蒸籠にて蒸しこれを小さく、賽の目にきり、前の吸物の、實となし、其上へ、淡雪を、加へるも、よろし。

鯛ふか〳〵

新鮮き、鯛の鱗をとり、三枚におろし、皮を去り、身をこまかにたゝき摺鉢にてすり、長芋を、摺金にて、おろし、能く摺まぜ、鰹節の煮汁に、醬油にて、鹽梅し、沸騰ちたる中へ、前に摺たる、鯛を、いれて、かきまはし、一煮したる時、金杓子にて、能程に、すくひて、椀に盛り、山葵を添て、出すべし。

村時雨

牛肉を、細かにたゝき、玉葱と、人參を、能程に、刻み、鰹節の煮汁を、鹽梅し、沸騰ちたる中へ、

前にきり置たる、葱、人參と、たゝきたる、肉をいれ、煮えたる時、鷄卵を割り、能くかきたて、味淋少量を、加へ、鍋の中に注ぎいれ、沸騰ちたるを、見て、椀に盛り、食すべし。

大和しちう

牛肉を、能程にきり、鍋にて、燒き、色の變りたる時、湯をいれ、じやがいも、人參、慈姑抔、能程にきり、ゆでたるものを、いれ、能く煮たる後、醬油にて、鹽梅し、葛粉を、水にてとき、汁の中に、いれ、かきまはし、煮て、椀に盛る時は、すり生姜を、添て、出すべし。



割烹と禮節（承前）

石井泰次郎

第二編割烹教授

（第一節近來の教師と教授法槪）

此の章の發端にいへる如く、

今昔ともに、割烹講師の傳流は、悉皆四條流を汲める者なり。

其の古傳を調理し、斬新の流行を以てする者も、此の流末ならざるなし。

と云ふ言を證せんに、以上あげ來れる割烹教師の教授法を略評せば、先田邊和氣子刀自が教授法は、近世料理法の中心點たりし江戸の遺風に非ずして京大阪地方の遺風に由られたる所なれど、なは、其の遺風を專として講せられたるは論なく、四條流の流末を汲みて、其の地方に傳へられたる

料理法に依られたるなり。次に岩間芳松氏が教授法は、表面上は斬新の方に偏せるが如しと雖ども、反りて然らざる所あり。そは、近世の江戸遺風を講せんとして、わざと、初めに洋風料理をも兼講せられたるなり。只、其の順序を轉倒して、内外の尊卑を少しく誤られたる所に於て、或は四條流の流外に走れる物と思はれんが、却りて、四條流の流末たる江戸遺風を以て、現今に應用するの可否に迷はれたる、即ち、最も其の流末に緣故を存ずる教授法と定むべきか。次に家永榮子女史が教授法に至りては、其の着眼點としては、少しく岩間氏に習ふ所あるが如きも、其の教授法としては、遠く岩間氏に及ばざるのみならず、或は幽香女史厨女、翠香女史等と同一の傳へを受けられたるには非ざるか。そはともあれ、江戸遺風と、某地方の遺風と混化せる近世料理に由れたれば、勿論四條流の流末をけがす者たり。次に、赤堀老人の教授法は、表面上治庖會の會名と共に宜敷樣なれども、裏面に立入りて觀察する時は、四條流の流末の流れを汲みながら、或は、四條流以外に置ても見るべく思はるゝ節有るを如何せん。次に、井上善兵衛老人が教授法は、自身四條流の流末を汲みて、其の眞正の傳流者が門下生なれど、能く近世江戸遺風を教授すべきは勿論なるに、今は其の遺風を傳ふるの力なし。然るに、聞く所によれば、何れの方よりにか。割烹教師の免狀を受け得たりと。若、此の事にして眞ならば、かけまくもかしこき、

畏き御あたりに捧奉る大御食調進ふる司も無く、食物料理傳統の歴史といふ事もなく、飯と汁との別もなく、割と烹との別も無き國體なるかなど、海外人をして一笑に付し去らるゝなり、誠に我國

には、大御食調進の司なきに非ず。食物料理の傳流の歴史なきに非ず。飯汁割烹の別勿論なりと辨護せんも、割烹敎師にして、其の割烹の敎授法に割方の一通も知らざる者に、割烹敎師の免狀を下附する如きに於いては、其他の事も推察し得らるるとあざけられんには、再び言を發すを得ざるなり。此の免狀の出所に附では、後來の割烹敎師の、如何に零落ゆくかを確かむるを得べし。我未だ此の出所を知らず。次に、増田順子が敎授法は、其の主眼點を時勢應用に採て、嶄新に走らんとせる趣あり。然れども、其の由る所の江戸遺風の採集の仕方も甚たくみにして、表面上嶄新に走ると見えながら、裏面に養生しつゝ有るは、江戸遺風も江戸遺風の最も平民的なるを採集したるなり。初め、食物の調理につきての論文中に含有せる物は、三百年前の料理書、また材料の遣ひ様も其の料理書によりたるにて、江戸時代三百年間の料理書に由て立てられたると、時勢に兼用すべき洋風料理、及び、自らが習ひ得たる四條流末の傳へとを合併したる敎授法なり。次に、幽香女史のは、其の條に明らかに論じたればいはず。又、中村濱子のも、又、赤堀老人の條に、龜井女史のを別に論ずべく云ひおきたるが、頃日、食物學者殘跡庵に附いて、其の敎授法を論ずる事を見合せくれよと同女史より依賴せられたれば、余も、又、こゝに擧げて論じたる敎師の門下生等の敎授法を論ずるの時期早きを思へば、暫くこゝに論ぜざる事とはなせり。





學藝

國文學講義

紫式部日記講義(六)

井上頼文

わた殿の、戸ぐちの、つぼねに、みいだせば、ほの、うちきりたる、あしたの露も、まだおちぬに、殿ありかせ給ひて、みずゐじんめして、やり水はらはせたまふ。

はしのみなみなる、をみなへしの、いみじうさかりなるを、一枝をらせたまひて、几帳のかみより、さしのぞかせたまへり。

御さまの、いとはづかしげなるに、我があさがほの思ひしらるれば、これおそくては、わろからんと、のたまはするにことづけて、すゞりのもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに
露のわきける身こそしらるれ

あな、とゝ、ほゝゑみて、すゞりめしいづ。

しら露はわきてもおかしをみなへし
こゝろからにや色のそむらむ

釋義

秋のけしき云々より、この歌までにて一段あり。さて、上の寛弘五年七月の上旬より、こゝまでは、同年八月の上旬頃の事なり。

○わた殿の、戸ぐちの、つぼね　寝殿より、對の屋に通行する、渡殿の戸口にある部屋なり。

○ほの、うちきりたる　ほのは、ほのかのほとおなじく、物の明らかに見えぬ意にて、ボッと

して薄暗きさまなり。うちきりたるの、うちは、たゞ添へていへる詞、きりたるは、朝霧などのたちこめたるさまあり。

○殿　中宮の御父藤原道長公をさせり。道長公は攝政大政大臣、東三條兼家公の五男にて、母は、攝津守中正の女なり。万壽四年十二月薨ず、歳六十二、世に、御堂の關白とも、又、法成寺入道とも、又、御堂殿ともいふ。

○みずゐじん　御随身あり。随身とは、元來、近衛の舍人などが、弓箭を持ち、劍を帶び、供奉するものゝ稱にて、朝廷より、攝政關白、および兵仗を賜へる大臣等に附せらるゝ者ありされど、こゝは、私第のことなれば、武裝にはあらで、普通の供人をいへるなるべし。さて、随身を賜はるに、官位によりて定員あり。弘安禮節に、攝政關白、十八人、大臣、大將、八人、納言、參議、六人、中將、四人、少將、二人、諸衛督四人、佐、二人など見えたり。

○いみじう　すぐれて、甚しき意あり。以下もみなおなじ。

○几丁　几帳とも、木丁ともかけど、何れもおなじ物なり。外面より、姿をあらはに見られぬため、座の側に立つる具なり。臺あり、柱ありて帷を懸く、すなはち、後世の衝立に布帛を掛けたる如きものなり。類聚雜要抄に、几帳の帷、夏は白生、白泥を以て、野筋秋草等を畫く凡裏は、白粉張ありと見ゆ。

○さしのぞかせたまへり　さしは添へ詞、たまへりの、りはるの誤なるべしと、鈴木朗ぬしはいはれたり。されど、諸本ことぐくりとあれば、善本のいづるまで、しばらく改めがたし。

○あさがほ　朝起きたるまゝにて、化粧なども

せぬ顔をいふ。
○をみなへしさかりの色を云々　この歌は、式部の歌にて、新古今集、雑の部にいづ。
○あな、と、ゝ　　あなは、感歎詞にて、俗に、ア、、アラ　などいふにおなじ。とは、疾にて、早しの意なり。
○しら露はわきてもおかじ云々　この歌は、道長公の返歌にて、新古今集の雑の部に出づ。さて、この歌は、式部の、露のわきける、と、ある四の句をうけて、よまれしなり。

譯　解

あるあした、寝殿より、對の屋に通行する、渡殿の戸口にある部屋に居て、庭の景色を見やれば、朝霧の立ちこめて、まだ薄暗く、草木にやどれる暁の露も、まだ落ちぬほどに、殿（道長）は歩行したまひて、御供の御隨身を召して、遣水の中にある塵芥など取り除けさせたまふ。その遣水にかけたる橋の南に生て居る女郎花の大層うつくしく咲きたるを、一枝折り取られて、式部の側に立てたる几帳の上よりさしのぞきて見たまへり。
その、さしのぞきて見たまへる道長公の、御やうすの、はなはだ、うつくしきにより、それに對すれば、式部自身の姿の、見ぐるしきが、恥かしく思はるゝに、まして今朝は、あやにくに、朝のことなれば、まだ、化粧もせぬゆゑ、ことさら、見ぐるしからんと思ひ知りて居れば、如何せんと、思ひたるに、
殿は、手に持てる女郎花を見せたまひて
これ見て、早く歌をよめ、遲くては、興少なからん
と、仰せらるゝに、

然らば、早く歌よみはべらんと、いふにかこつけて、それより、硯のある處によりて、見ぐるしき朝顔をもかくし、歌をもよみて奉りぬ。

その歌は、

今、その、御折りあそばされた、女郎花の色が、めだッて、うつくしいのは、露のおき添うためでありませう、今、そのうつくしい色を見まするにつけても、自分は、女郎花といふ名のごとく、女の身でありますから、此の花のやうに、うつくしければよいのに、御覧あそばす通り、見苦しいのは、コリヤ、キット、露が依怙贔負をして、わたくしの身には置いてくれぬ故、このやうに、見ぐるしいのでありませう、かやうに、露にまでも、わけへだてをせられましたる事の、あさけなくぞんじます。それにつけても、わたくしの身の上の、不仕合せなことは知られまするでござりますワイナ

と、よみて、さしあぐれば、

道長公は、

ア、早いと、ニッコリと笑て、今、式部が差上げたる歌のかへしせんとて、硯をいださしめたまふ。

さて、その御返歌は

そなたは、白露がわけへだてをして、女郎花にばかり、多く露を置いたるやうにいはるれど、決して、サウジヤナイ、女郎花じやとて、露が別段、多くおく次第ではない、その色のよいのは、まッたく、女郎花、自分の心から、あのやうに、うつくしう咲いたのである。人も、自分の心がけひとつで、自をうつくしうも、はでにも持つ事のできるものじや。

それを、自分から、クスンデ居ては、しまいには、容貌までが見ぐるしうなるものじや。
と、いふ返歌をよまれました。

漢文學講義

佐々木天游

題楠公訓子圖　中井履軒

訓レ子勗二其忠一。父之慈也。繼レ父忠二其君一。子之孝也。一忠而孝慈併焉。大哉忠乎。及下其和二於家一。睦二於族一。撫レ士恤上レ民。莫レ非レ忠也。亦莫レ非レ孝也。然千歲之下。無下不レ墮二涙乎斯圖一者上。蓋公之訓レ子。非三特訓二其子一也。亦所下以訓中萬世爲二人臣一者上。

子に訓へて其の忠を勗めしむるは、父の慈なり。父に繼いで其の君に忠なるは、子の孝なり。一忠にして而も孝慈併す。大なるかな忠か、其の家に和し族に睦じく、士を撫し民を恤むに及ぶまで、忠に非るはなきなり、亦孝に非るはなきなり。然して千歲の下、斯圖に墮涙せざるものなし。蓋し公の子を訓ふるは、特に其の子を訓ふるのみに非るなり。亦萬世の人臣たるものを訓ふる所以なり。

此は、中井履軒先生の、楠公訓子の圖に題するの文であります。皆様も御存の通、後醍醐天皇様の延元元年五月に、楠正成公が、湊川に戰死なされます前に、櫻井驛で（山城國山崎停車塲の少し横の方に、楠公訣子の跡が遺りてをります。此所が古の櫻井驛の趾であります。滊車より大阪に御出になります御方は、滊車の左の窓より御眺めになりますと、直にみえて居ります。）子の正行卿に御訣別になりまして、兼て、後醍醐天皇様より、御拜領なされて居ります所の、菊作の太刀を與へ

られまして、逆賊足利を滅して天下を匡さねばならぬことを、深く誡められまして、サウシテ正行卿を河内の國に遣歸されて。湊川に向て陣を進められました。誠に美談で御坐りますから、後の人が、此の圖を畫にしました。ソレが、即楠公訓子の圖であります。人によりては、楠公訣子、又は訣兒の圖とも申します。ソレハ、正成公が、正行卿に御訣別にあつたと謂ふ所からで、訣は別るゝと謂ふことであります。此は、楠公が正行卿に、訓へ戒めらるゝに、皇室に忠義を盡さねばならぬと申すことを以てせられたと謂ふ所よりして、訓子と謂ふたものであります。題とは、矢張、文の一體であります。題以品物と申しまして、物を品題するの義であります。又、題は諦也と申しまして、其の意を審諦にするの義であります。

偖、子の正行卿を訓へ戒められまして、其の忠義の心を、勗め勵ましめて、必ず、力を王室に盡して、賊を平げ、叡慮を御安んじ申さなければならぬと、戒めハリコマしむるものは、父正成公の、子を慈しみ、可愛がられます所の、慈愛心と申すものヂヤ。(也は、决語にて、ヂヤと謂ふ程のこゝろもち。)子を慈むの心が深いから、子正行も。忠臣になる樣にと、親の慈愛心で訓へ戒められましたものであります。又、父正成公の心を受續いで、其の仕へ奉る所の君　天皇樣に、忠義の心を盡さるゝものは、子正行卿の、親に孝行をなされると謂ふものジヤ。正行卿が、親を思はれる心が深いから、親の心を續ぎて忠義を盡し、父正成公の心を成就せしめんとなされるのであるから、孝と謂ふものであります。サウシテミマスト。唯一つの忠と謂ふ心の内に、孝行と慈愛との二つの道が、合併して、正成公の忠の心は、子に對して

は慈となり、正行卿の忠の心は、父に對しては孝となりて、一つの忠と謂ふ內に、やがて、孝と慈との道がコモリ合うてをりますが、(焉は、歇語辭にして、コノトコロニ、又はコノヿになどゝ謂ふ意にて、其の場所を指し言うて、文意を引合せ補ふ字なり。也の字に較れば、輕淸の意なり。一忠、コノコトに、孝慈の二つが、合せ盡すの意)楠氏の忠と謂ふものは、何とした、大きなものぞや(大哉。哉は語勢の助辭にて、乎字よりは、少し緩くして、咏歎の味を帶ぶ。ゾイ。又はカイの意にて、大哉は、大きいゾイの意、忠ヵ乎。乎も、矢張、同じ助辭にて、デアラウカ、又は、デアラウゾの意にて、忠乎は、忠デアラウゾの意ソコデ、大哉忠ヵ乎で。大きなものゾイ。大きなものは、楠氏の忠デアラウゾと、咏歎の味を帶せて、申したものであります。)大、哉。楠氏の忠義は、何

とした大忠ぞや。サウシテ、其の楠公父子が、一家內に和合して、和らぎあひ、一族親類に、親み睦じく、士侍を愛撫してはごくまみ、民百姓を哀恤して憐れみ、なさけを加へらるゝに、及び至る迄、忠と謂ふ心に非るはなく、(忠は中心と書く字にて、中心を盡すことゝなり。至誠の心なり。中心を公に盡せば、忠義となり、人に盡せば、忠實となる。)一家に和らぎ、一族に睦じく、士を撫で、百姓を恤むも、皆正成公が、王室に忠義を盡さんと思うてなされしことだから、正成公の至誠の忠心に非ることはないのジヤ。亦、正行卿が、同じく家に和し、族に睦しく、士を撫し、民を恤みて、忠を王室に盡されしも、皆父の心を受續きて、成遂るの孝心から、出でたものでありますから、正行卿の至誠の孝心に非ることはないのジヤ。王室に忠を盡さるゝも、一家族を和睦せしめらる

るも、士民を撫恤せらるゝも、何でも蚊でも、皆、楠氏の忠と謂ふものヂヤ。亦楠氏の孝と謂ふものヂヤ。

然してサウシテ、楠氏の世を距る、遙か千歳の後の世の下末まで、墮㆓涙平斯圖㆒で、斯楠公訓子の圖をみて、楠氏の忠孝を感じて、涙を墮し流して、當時の事を思ひ玄のばぬものは、一人もない。ダレデモ、皆斯圖をみれば、感涙を墮して感動せぬものはありません。是は、皆、楠氏父子の至誠の忠孝心の然らしむる所であります。蓋、（蓋は發語の辭にて。ナントアルニモセヨ。又は、ナニガアッタニモセヨの意なり。）公の楠公が。子正行卿に訓へ戒めて、忠義の心をツトメハゲマしめられしは、但々に、其の自分の子、正行卿一人に限りてのみ、訓へ戒められしものではないのヂヤ。其の自分の子を訓へ戒めらるゝと同時に、兼て、亦、

天下萬世の末の代までの、人の臣となりて、君に事へまつるもの迄にも、力を盡し、身を致して、忠義を王室に盡さなければならぬと謂ふことを、訓へ戒められしワケヤイのものである。盖、ナントアルニモセヨ、天下萬世の人臣たるもの、皆、楠公の精神に感動して、忠義の心を勗めて、力を王室に盡すは、取も直さす、公が、唯其の子一人を訓へられしのみに非ずして、萬期末代迄の臣下たるものを訓戒せられしも、同じ譯合である。盖と語を改めて、作者一段の精神を用ゐて、玆文を結び、楠公訓子が、萬世人臣たるものに迄大關係あるの語をなして、結尾の文勢をして、一振せしめたとのであります。



和畫通信講義（第四回）

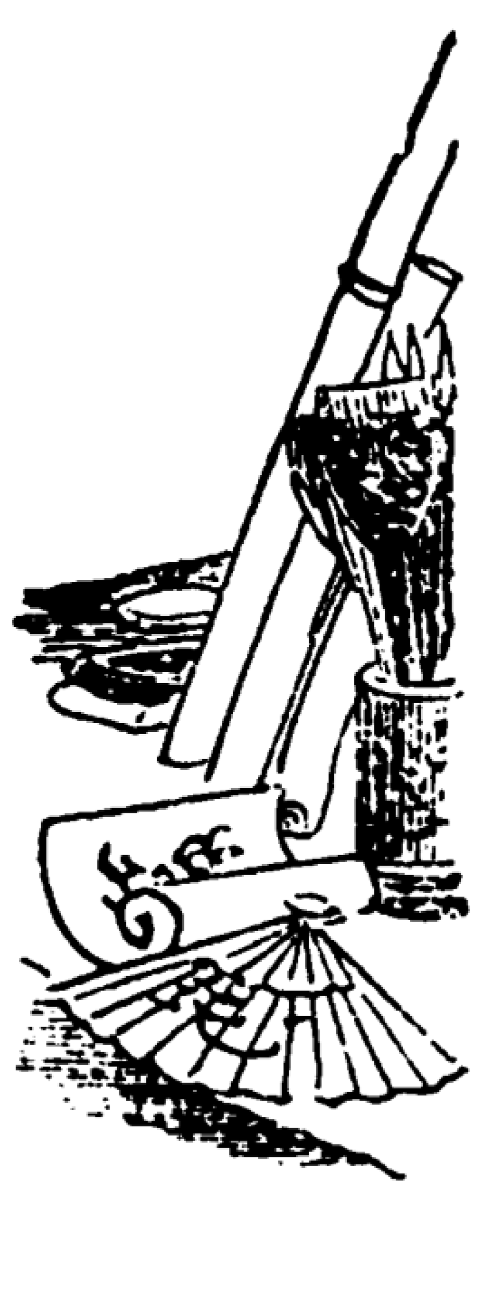
山崎彩峨

淡墨にて、符號の順に、花葉を畫き、次に、枝を畫き、後、濃墨にて、花蕋葉脈を入るゝなり。此を、彩色にて畫くには、先づ、淡き赭墨にて、花葉及び、（枝を畫き、枝は、例の如く、兩端、又は、片端に、濃き墨を附けて、畫けば、甚だよし。こを挾墨と云ふなり。また、その挾墨をなすには、筆を、器底にてしらめになして、端の方を、濃き墨の上にあてゝ、たてば、後方にひくなり。さすれば、墨、細くつくなり）それより、筆を清洗するか、又は、他のよごれけなき筆に、胡粉を含め、先へ猩艶脂を附して、二筋に限取り、（白色胭脂）其の紅色、もし淡きときは、よく乾きて後、再び、紅色を施してよし。最も、初歩の方は、運筆自由ならざるなり。見惡き着色の筆跡を、顯すとなれば、かゝるときは、筆二本を使用する方安全なり。（是は、初歩に限らず、常用するなり）大底限を入るゝときは、筆二本を使用する方、都合宜しく、極めて、手の早き人なれば、一本づゝ、代へて使ふも宜しけれども、不馴の内は、手の遲れやすきもの故、兎角する內、礬水紙に非ざれば、乾燥して、繕ひ難くなることなり。其の筆二本を使用すといふは、一の着色の筆を、御家流の如く、ひとさし指と、なか指との間に挾み、清水に潤したる筆を、浸染せざる程に、水氣を去りて、なか指と、くすり指との間にはさみて、着色の筆を使用する時はなか指とくすり指にて、清水の筆頭、紙面に抵觸せざる程に、繰り上げ、ぼかす、ときは、ひとさし指となか指にて、着色の筆をくり上げ、水筆を繰り出して、直ちに使用するなり。かくい




己
ヲ
ワ
戊
ル
丙
ヘ
乙
丁
イ
ホ
ロ
ハ
チ
ト
甲
リ
ヌ

はゞ、誠に、面倒の樣なれども馴るゝに從ひ何の苦もなし、自由になるものなれは、却りて、意の如く、着色するを得て、都合よきものなり。花瓣の裏の折れ返りたる處は、少しく、色の濃き方よし、淡濃其の表の花瓣は、他の着色より、少しく、色の淡き方よろし、最も、折れかへりたる部分を塗り、直に、其傍を彩るときは、互に浸染して見苦しければ、先づ折れかへりたる部分のみ、總て隈取り、充分乾きて後、傍の花瓣に着色すべし。(折れ返りある瓣は、直に、黄に入るゝもよし)次によく、乾きたる時、黄勝ちの淡き青色にて、花心を彩り、乾きて後、雌蕋を、通常の黄勝ちの青色にて畫き、次に岱赭、又は、猩艶脂にて、雄蕋及び、花粉の點を畫き、乾きて後、黄色を、花粉の部分のみ塗るなり。次に、淡き赭墨にて、花蕚を墨かきの線に沿ひて、内部を、細く隈取り、墨赭墨乾きて後、葉と同じく青色を施し、(花蕚は、少し、黄勝ちに葉は、藍勝ちの方よし)次に濃墨にて、葉脈を入るゝなり。





女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一多くの人中に立交るに、匂ひ袋をたしなまるべし。昔しは、薫物または留木とて、伽羅を衣に炷こめしなり。そは、高貴の方々は、格別なみ〳〵の人は、香袋のみ用ゐる様になりたり。坊間にひさぐ物は、匂いやし。こゝに一方をあぐ。試に用ゐる可し。

龍腦　二文目　梅花手の上品を用う薄様ひさへにつゝみ用うべし

丁子　一文目　あらくきざみて用う

甘松　一文目　きざみて用う

沈香　一文目　極上品を撰み米つぶ程にきざみて用う

桂心　一文目　東京肉桂を用ゐてよし米つぶ程にきざみて用う

麝香　三分　極上品こぼれといふを用うちん香の極末粉五分ばかりへよくませ薄粘にて丸くしちんかう末をころもにかけ但し五分のうち二分ばかりを衣にかくへし薄様の紙につゝむ

麝香皮　一文目　極上品を米粒ほどにきざみ薄様の紙につゝむ

右、丁甘沈桂の薬末をひろげ、龍麝々皮三種紙包のまゝ、四味の薬末へ入れ、さて、薄様にて大包みにして、紅梅煉の絹袋に入れて、衣類の中へ入れ、懐中にも入るべし。

一懐紙と帛紗とは、必ず懐中すべし。帛紗は、鹽瀬の寸法ふくさを用ゐるべし。もしなくば、羽二重をあはせにして、ぬい上り、凡そねさし九寸四分に、仕立裏白の状を折る様に、八ッ折にたゝみて、懐中すべし。緋の羽二重、または、龍門を用ゐるべし。

一近來は、只人の婦女も、みづから髪をあぐるもの稀なり。これは、便利の爲なるべけれど、以の外のひが事なり。天保の頃迄は、士族の室女に、みづから髪を結ばざるものなし。たま〳〵、人にゆはするものあれば、波佐羅なる家風なりと、こころある人は、爪彈きして、譏りたるなり。殊に、女髪結抔は、彼の三姑六婆に比すべきものにて、内治修齊の家には、立入らせまじき者なり。近世の習俗にたかふと雖も、心あらん人は、親ら、髪とりあぐる事を、心がけあるべきなり、とは、婦容の條にいふべきなるが、遺漏せし故こゝに追記せり。

一素禮己下、日用立振舞、一汁五菜、倍膳及び、手掛代茶菓吸物一献の、給仕食法等を初段とし、包結の業、消息文例、二汁五菜中酒後、菓子抹茶の給仕食法等を二段とし、是を、躾方初學の業とす、中二段は、香茶の大略、雜煮三献三汁十一菜、後段宴席倍膳給仕および、食法を示す、奥三段は、諸祝儀婚禮式および、衣服粧飾の故實等を示すべし。

一近頃は、坐敷の様體、富貴の家には、おほく、外國風を用ゐ、椅子にかゝり、食案などを用ゐるゆゑ、立振舞古法を用ゐがたし。されども、古法によつて學ばざれば、趨徐俯仰の儀容閑雅の風姿をなす事、能はざるべし。今示す所の儀節も、伊勢家の眞法を以てすべきなれども、世に、これを習ひ得し者少し、俗に、小笠原流と稱する者は、水島卜也といふ者の僞撰にして、正しきものにあらず。然れども、世上に、ひろく流布し、諸禮躾方と云へば、十に八九、この水島の小笠原流なり。兒女子に示すには、耳目に習慣するものにあらざれば、輙く入り難き事も有らんかと、普通の小笠

原流を採り、伊勢家の古法を參錯して、一二の今按を加へて、兒女進退周旋を嫻はすの、摸型にあてんとす。もと、水島の僞撰に係ると雖も、その演習する儀容曲節を觀るに、雅馴にして、古樣を存するもの多し。今、これによりて、文體を調習せば、おのづから、態度その宜しきを得て、洋風の動作をなすに於ても、その益多かるべし。これを無用の長物として、廢棄すべからざらん事を希ふ。



各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資つて我が短を補ふべし。他の短は、以つて反省の料となすべし。

▲たゞ、我が長をすてゝ、他の長短をあはせとるの愚をなすべからず。

第一章　英吉利婦人

（其の一）英吉利婦人の氣質

剛毅耐忍百年一日の如くに、能く、其の業を建て、其事を貫ぬくは、英吉利人の特質で、今や世界の海王とし時めくも、西歐の覇者と仰ぎ視らるゝも、皆この特質が數百年の歳月を積み數千回の鍛錬を經て、鐵の如くに固まり、山の如くに築かれたのであるが、其の反映として、英國人は、古習舊慣を瓦落と捨てゝ、新趣向を取り、新機軸を出す樣な豹變が出來ない。例之ば今日の下議院に附する

に、其の古昔の議場の名、何々ハウスを以てし、此の他學校を建設するも、市街を新設するも、皆舊名古稱を附するなり。此等は、其の保守の性質の一端を見るに足るか、今一例を擧ぐれば、往年グラットストーン翁が、議員撰擧を其の地に於て、某貴公子と爭ひて、大に失敗せしことあり。グ翁の聲望は、固より六年を壓せしには相違なきも、少年が、門閥家として、撰擧地に推重せられし舊習は、グ翁の聲望を容易に打破ッた。

贅話休題保守てふ不觀念は、婦人にも非常に鞏固で、一旦思込んだる事は、改めない、殊に、其の長く慣れ來れる風習は、決して除かない、で、佛蘭西婦人の如く、時々刻々に新流行を作り出す樣のことは、微塵もなく、婦人としての趣味は乏しいが、亦其の輕佻浮薄のない所が、世帶女房としては、無上の好趣味ならむ、左れば、上中下何れ

の社會を論せず、婦人は、其の良夫を神の如く佛の如く、能く尊み、能く親み仕へて、甚だ、貞操である。殊に、其の家政も巧みで、濫費をなさず。良人をして內顧の憂あらしむる樣のことはない。英吉利婦人は、一般に子福者で、少きも四五人多きは十人以上に出るものあり。故に下等社會などでは、如何に勤勉の婦人も、是等の女子を一々養育し、躾をして、相應の處女、青年ならしむることは、非常の困難であるが、傍で思ふ程のことはなく、見事に、之を育て上げて、拔目なく世帶を切廻はし、良夫にも不自由を感ぜしめず、交際向にも、味噌を付けない所は、天晴の働である。是等の婦人は、十五六歲頃より、紳士紳商の家に小間使等となり。起居動作より、世帶何くれとなく、見習ひ、或は裁縫料理を學びて、廿四五歲の頃までは、一日幾何かの賃錢を受けて、立働きて、之

を貯へ、一方には思ふ男子と交際し、結婚迄には、互に相當の財產を作り、而る後に、結婚し、家を搆ふるなり。中等社會以上に至れば固より、ある一定の時期迄は、學校生活をなし、多少の文字を注入せられ。又音樂等も、一般に能く學ばせらるゝなり。結婚後は、彼等は、一家の家政と常務の外、專ら良人に代りて交際塲裏に立つも、子女の續々として、其の產聲を擧ぐるや。彼等は、之が爲に何事をも、其の半ばぎき取らるゝなり。貴族社會は、割合に、夫婦の情交に風雨多くて、屢々離婚訴訟を聽く、法官の命する處は、潔く、財產を分ち、諸種の關係を絕ち、笑つて元の他人となるなり

（其の二）　英國婦人と敎育

英國に於ける女子敎育は、十九世紀の中葉より、著しく進步し、其の以前は、格段見るべきものなかりき。今、其の發達の大要を擧くれば、十九世紀の初葉に各地に、高等女學校を設立し、次でケンブリッヂ、オックスフォールド等の有力なる大學が、地方試驗を男子と同じく、女子にも施し、其より、敎育改善に關する諸種の協會出で、大に振興の運に向へり。

一千八百六十九年高等の女子專問學校設立せられ、其の翌年には、ケンブリッヂ大學に婦女の爲に講座法を設けられ、地方より負笈來學者の數次第に殖え、次で、各地方に續々專科の女學校の勃興を見るに至れり。

一千八百七十二年ブス女史孤力を奮つて、北倫敦專問學校を興して、牛耳を執り、別に貧民の爲に一の女學校を設けしが、銳意精勵、大に人目を聳動せり。此の時に當り、婦女敎育協會は、有限責任の株式會社を起して、遍く資金を募集し、遂に

十餘年間に倫敦、及、各地方に二十五校を設立し、六千の生徒を養成し、而も、月謝の最高額は、一人一ヶ年十五磅を出でずして、株主は、各々五分の配當を受け、頗る好成績を得てければ、爾來、此の組織を模倣し、更に幾多の學校は、現出するに至り、同時に、女教員養成の學校建設も、亦、盛に唱導せられて、其の續出を見る。

英國の大學にては、初め女子は、男子と均しく、入學を許されざりしが、女子教育の盛大に赴くと共に、千八百八十二年倫敦、大學は遂に、女子をして醫科大學に入るを許し、次てケンブリッヂ、エッキスフオールドの二大學は、共に、女子を三分科に入り、男子と對等の位置を保たしむるに至れり。

以上は、英國に於ける女子教育發達の一端を叙するに過ぎざれ共、今日英國の女子教育が如何ある地位にあるかを窺ふに足らむ。猶左に、英蘭、及、ウォールスに於て、女子が各種の工業に從事する千八百六十一年と、千八百七十一年との比較表を掲ぐ、(該表は太陽第二卷第十三號抄錄)

職業	千八百六十一年の員數	千八百七十一年の員數
文官	一、九三一	三、三一四
法律業	二一	五一
齒工及彫刻師	八五三	一、〇六九
寫眞師	一六八	六九四
商家の番頭及勘定方の類	四〇四	一、七五五
賣子	一、〇五五	一、七二一
吳服商	一一、九九三	一九、一一二
メリヤス商及小間物商	二、一二六	四、一四七
小賣商人	四、五二〇	八、三三三
徒弟	一八五	七四三
文具商	一、七五二	三、〇〇四
書籍商及出版商	九五二	一、〇七七
印刷業	四一九	七四一
理髮師及假髮商	五〇七	一、二四〇
鍍金匠	七四	二〇四

女子の權力は、謂ふ迄もなく、敎育の進歩と女子が、獨立の職業を得るとに由つて、發達するもの

なり。即ち、該表に徴するも、英國女子の權力は、今日如何に發達しつゝあるかを見るべし。

女子要書解題（其の三）

三浦千畝

仁の部

庭の訓　一卷

一名乳母の文といふ。阿佛尼の作なり。阿佛尼は、左衞門尉平康繁の女にして、安嘉門院の乳母なり。四條の局、また右衞門佐といへり。後に、中院大納言爲家の繼室となり、爲相爲守等を生む。尼と爲り、阿佛と號す。又北林禪尼とも云へり。廣聞博覽にして、當時女博士の稱ありしとぞ。初、爲家、長子爲氏と不快のことありて、所領等をば、悉く、阿佛の腹なる爲相に與へたりしを、爲家薨去の後、これを爲氏に奪はれぬ。こゝに於て、尼忿然鎌倉に往き、これを幕府に訴へ、遂に利運を得てかへり、爲相の幼なるを助けて、冷泉家を起されたり。その鎌倉に下りし時の日記は、十六夜日記とて、歌文共に後人の摸範となりぬ。

この庭の訓は、東へ出立つとて、その女なる、紀内侍の爲にものして、贈られしよしなり。さて尼が東へ下りしは、前後二度あるやうなれば、この書を書きしは、二度のうちいづれにや。書題を庭の訓といふは、孔子の子伯魚、趨りて庭を過ぎたる時、敎訓の事ありし故事によりて、其の息女に示したる名なり。又一名めのとの文といふは、此尼、安嘉門院の御めのとにて有りし故にや。これらの考は、伴蒿蹊の庭の訓抄にあり（群書類從雜部にあり）

庭の訓抄　一卷

この書は、伴蒿蹊の著にして、阿佛尼の庭の訓を註釋せしものなり。蒿蹊名は資芳、閑田子と號す。近江八幡の人。少より文雅を好み、京師に出でゝ、和學を有賀長伯に學び、後武者小路實岳の門に入る。遂に一家を成し、文章和歌を以て一時に鳴る。文化三年七月二十五日歿す。年七十四。著書亦多し。閑田耕筆、近世畸人傳、國文世々跡等、最世に行はる。この書、卷首に作者並に紀内侍の事を記し、次に題號のことを說き、さて本文には、句每に一々註釋をものして、やゝ詳かなる所、いとめでたし。

女房官品　一卷

此の書、卷尾に永德二年二月十日とあり。永德は、北朝後圓融帝の時の年號なれば、今より凡そ五百五十年程以前の著なり。群書一覽の女官飾抄の解題に『はじめ女房の官品の事を記す、その奥書に云、永德二年二月一日作進、攝政判○中略攝政と侍るは、後普光園攝政良基なり云々』といへるは、蓋しこの書をいへるならんか。此の書、禁裏の内侍のかみより、仙洞、執柄家、その外凡そ女房の官職品階を簡略に記したるものにて、その事を一通心得んには、便よきものなり。群書類從本には「右之一冊尤珍重すべき物也云々、萬治二年三月日、權少外記中原定友』と奥書あり。（群書類從官職部）

茶話指月集（承前）

河東散人鵜集

寄稿人孤峰庵不羨

利休は、柚の色つくを見て口切を催し、古織は樅のわか葉の出る比、風爐の茶湯よしと申され

き。

解釋、不美曰、利休居士は、柚の色つくを見て口切を催しとは、柚は、申迄もなく、柚の實の色付を見留られて、茶壺の口を切は、則ち、開くなり。是、則、口切の茶を催す季節は、中々面倒なるものなり。單に言時は、舊曆十月寒暖の見斗ひ風爐を仕舞、爐を明けて、茶壺の口を切、濃茶を出して茶の湯を催し、知己友人或は數奇者を招待して、一會を團欒するを云ふ。此の口切の好時季と云ふは、故人先哲も談論せられたり。餘り時侯若き時には、遲く寒き時には早くすべきは勿論なれども、先づは、柚の實の色付頃可レ然歟。老予は、休居士の説に從ふ。古田織部は、樅の若葉の出る比風爐の茶湯よしと教へられしも、休居士の爐の口切と一對をとりて訓諭せられしは、何れも不レ働卓説ならん。茶の湯御稽古の料材として活用せられたし。諸孃たち。

さる方の朝茶湯に、利休其の外まねられたるが、朝嵐に椋の落葉ちりつもりて、露地の面、さながら、山林の心地す。休、あとをかへりみ、何もおもしろく候。されど、亭主無功なれば、そき捨るにてぞあるらんといふ。案のごとく、後の入りに一葉もれし。その時、休、惣して露路の掃除は、朝の客ならば宵にはかせ、晝ならば朝、その後は、おち葉のつもるも、その儘掃ぬが功者なりといへり。

解釋、此の條の如きは、別に演説すべきこともなく、聽えたる道理なれども、旨味に於いては、大いに面白く、露地は、則、庭清淨潔白と掃留りたる土石、或は、下草などの上に、嵐山颪に無レ之、そよ〳〵と吹微風に、偶、

一葉二葉或は三四葉吹飛ばす、枝より眞直に地上に落たる風情は、心を留めて是を見れは、人間一生の無常も又如レ斯なるべし。休居士は、流石に、茲に着眼せられたるなるべし。又、掃除の仕方も、朝の客は宵、則、前日、夕方晝の客は朝と云ふ順序も注意せし規則なり。又、掃除は、見ゆる所斗に無之、木蔭物陰下草の中程へ落葉吹入けるを、能、手指或は塵箸にて出し排ふべし。下婢奴僕へ命するとも、此の邊に心せよと敎ふべし。因に言、軍艦抔は、鐵にて製造し、ペンキとやらん云ものを以て塗飾し、海水に年中浮むものなれば、不潔にすれば、忽に腐朽する故、旦夕、時々に掃除する事、最、親切なり。又、目前に見ゆる所より、大炮据付の陰など、特別に注意して奇麗にすると云ふ。是は、素人の説にて、或は一笑に附する哉も知べからずと雖、思ひ出る儘、評點は本鑑御愛讀の奥様孃様方に任す。

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の十八）

白松園主人

余は此の新しき年の始に、諸孃だちに見ゆるに當り、先づ硯を洗ひ若水を酌みて、前號誌上の續きなる、典膳が娘園花が、半七のもとに嫁するといふ、最もめでたき條を紹介せんとす。去る程に、筒井の老臣蟻松が家には、其の一人娘園花が爲めに、婿を擇びてよめらする事なれば、彼是の準備に急はしく、衣服調度のまうけに、黄金を費すことを厭はず、すべて善盡し、美盡さず

といふことなし。即ち、冬も果てゝ、年たちかへるはつ春のはじめに、いよゝ結婚の式を擧げぬ。

……あら玉の年のはじめになりにければ、典膳夫婦はわが子の爲めに、黄道吉日をゑらみて、既に婚姻の日にもなりぬ、

之れより、園花は、父の家を出でゝ、豫て夫と定まれる、半七の家に赴むかむとするなり。其の母敷波が之を戒むる言葉、まことに婦人たる者の、肝に銘じて鑑とすべき、金玉の誓言なり。乞ふ、方に之を讀みて、暗誦數回座右の銘となすべし。

園花やゝ大橋に娵らんとせる時、敷波は女にいふやう、婦は三界に家なし、一旦百年の苦も亦樂も、みな他人にまかする身なれば、只ものやわらかにして、妬なきを恒の心とせよとは、物の本見ても知り給ひつらむ、されば幼ききは父母に從ひ、成長ては夫に從ひ、老いては子に從ふなる、この三從はいふも更なり、五つの障もありといへば、ひとりの女兒とあまやかせし、親の權威を笠に被て、夫に侮かれ給ふなよ、一たび夫の家を出でゝは、覆水盆にかへりがたし、あだし心を慎みて、誠を竭して、かしづきたまへ、やよくと教へさとせば、園花はしばしく應へて、さていふやう、稚きより、汝が夫ぞと聞えしらせ給ひしかば、ふりわけ髪も肩過ぎて、かくまゐりかしづく者を、なでふ等閑に侍るべき、よしや身の恐なるより、疎まるとも、生きて彼處を出でんとは、思ひ侍らずといふに、敷波はさもこそ、とうち點頭きつゝ、目送りけり。

既に、佳人才子は、天縁を全うして、諧老の契を結び込めたり。草紙の地は之を評して曰く、

……園花は稚きより、見もし見られもして、生ごゝろつきしより、この人ならではと、こゝろに誓ひし妹夫なるに、年紀は二八の春にして、容止いと艶妖に、心ざまいと怜悧かりき。又半七は、今茲廿一才にして、顔色の端麗なる事は、梨花の雪をも欺むくべく、文武に宏才なる事は、竹林の群にも入りぬべし。古より、佳人は才子に因がたく、駿馬は伯樂に遇ひがたし、かゝる夫婦は、實に天なめりとて、或は羨み、或は妬しと思ふものもおそかり。……

かくて、半七夫婦は、表面より見る時は、人もうらやむばかり、いと睦まじう見えたれど、こはこれ、門外漢の瞥見なりけり。半七は、かつて、園花をめとる事を、其父にいなみたりき。父半六の怒りにあひて、止むを得ず園花をめとりしといへども、固く其の母の遺言を守り、また失せにし、おさんに對して、再び女にあはじと、心に誓ひたれば、園花入嫁の後も、嘗つて、一夜にても、園花と臥床を共にせず。さればとて、つれなき氣色は見せず、晝はことさらに、他事なく語らひて、坐する時は席を隔てず、食する時は案を同じくして、いと睦まじく見えしかば、父半六は、甚だよろこび、彌よ蟻松に媚び佞ひ、わが子の新婦を款待すこと、只賓客の如くせり。

嗚呼讀者は、此の條をよみて、如何なる感をかなす。うるはしき事花の如き、無垢清潔のをとめ園花は、故なくして夫に疎まれ、罪なくして、無形の囹圄にさまよひ、無形の鞭撻を受け、精神的無上の苦楚に陥りぬ。婦人終天の恨事、婦人一世の悲慘、實に何ぞ之れに過ぐる者あらむ。出で丶歸らむか、生きて夫の家をば出でじと、母に誓ひし言を如何せむ。此のまゝ居らんか、心片時も安からで、おもなく、耻かしく、こよなく居づらきを如何せむ。告ぐるによしなく、訴ふるに處なく、人しれぬ歎きの淵は、涙の泉涸るゝ時なかりき。半七、さしもの才子なれど、まだ年わかければ、かくの如き姑息の策をもて、人の女を傷けずと、思ひあやまれるは、男子として、口惜しき次第と云はざるを得ず。たとひ、母の遺言なればとて、餘りに女々しき手段を取れるは、幼きより、主として、母の手に育せられたるにもよるべけれど、君子は豹變すといふべき處に缺けたるを惜まざる

を得ず。故に、余輩は、半七が此れ等の行爲をもて、女子の操行を、かへまほしき心地す。女子としてかゝらんには、こよなき貞婦なるべし。男子としては首肯すべき限りに非ず。曲亭氏、別に考ふる處ありや。否や。

此くの如き秘密の埋沒は、いつまでも、地平線下に、無事平穏なるべき。導火は燃料を盛んにして、爆發の機會をまてり。一日、園花の母敷波は、愛女の婿なる半七が家を訪ひぬ。而して、悲慘の動機は、忽地此の時に與へられぬ。事の態、悽惋として物悲しく、之を讀む者、潸然として涙下るを覺えず。今、左に、其の文章を紹介せむ。

さる程に園花は、こゝろに足らざる所あれば、紙を隔てゝ痒きを掻くが如く、又啞子の苦きを甜るが如く、思ひ迫れどいひも知らせず、夜はいたづらに、山鷄の尾の上の月さへ在明て、對なき枕を恨みつゝ、春もやゝ暮れゆきて、四月にもなりにけり、此のごろは日の長き限りなれば、ある日敷波は、奴婢を將て歩より五條に到りつ、赤根が家に音なはするに、半六は奈良へ出仕して、半七は園花と共に、小座敷になるよしを、婢が申しゝかば、敷波は從者を出居のかたに待たせ、案内もさせず、只ひとり、半開け放ちたる亮隔を、二隔ばかり越えてゆくに、女兒も婿もこれをば知らで、半七は紙窓の下に、物の本を閉して見かへりもせず、園花はそのほとりに侍りて、何やらんものゝいひたげなれば、わかき夫婦の、さしむかひなるを、うち驚かさんは、心づきなきわざなりと思ひて、立ちもいらず、なほ亮隔のかげに佇みて、扇を半おしひらき、胸のあたりをうちあふき、をり〳〵彼處を闚窺たり。

此の如き事は、尤もあり勝ちの事ながら、馬琴が筆つきの、いかにも優にして、「をり〳〵かしこをかいまみたり」など、只の一句にして、千萬無量の意を寓せたるなど、馬琴が尤も得意の處なり。之れより以下、男女の情を描く處、尤も難くして、普通の作者に書かしめたらんには、千言萬語を費

して猶足らざるべく、しかも、不潔汚穢醜陋の文字を羅列するに非ざれば、その景をあらはす能はざる習ひなるに、流石は、千古の文豪たる丈けありて、少しも卑猥の厭ふべきふしなく、流麗沈痛の、心ゆくばかりなる、實に文藻の富贍なるを欽せずんばあらず。

園花は半七に、ものいふよすがやなかりけむ、たてゝ出す茶の茶杓にも、水漏らすまじと思へども、心おかるゝ夫に向ひ、世の人は物に參り、遊山して日を暮す頃なるに、物の本のみ見給はゞ、御身の爲めにあしかりなんわらはがなさなき手まへなれど、これきこしめされずや、少しは心はるけくもなり給はめ、といひかけて、さし出す茶碗を半七は、やをら手に稟けて喫みをはり、けふは終日の日暇なれば、心ゆりせられて、ふと見かゝりたる草紙の捨てがたくて、日の闌くるをも知らざりき、われよりは御身こそ、うち守り居て倦みもし給ひけめ、と答へするに、園花はなほいはんとして、云ひも出でず、膝のあたりに手習うて、すみつきながらまだしらぬ、

閨の留奇南の移香を、とめてほしさのわが袖へ、赧らむ顔をおしあてゝ、芽出し楓のはづかはしさを、やうやくに思ひ堪へ、何事の御こゝろに、稱はぬとも得わきまへぬ、身の愚さに人をうらむかとおぼさんは、なほおぞましけれど、わが身こゝにまゐりて、春もすぎはや百日にもなり侍れど、眞の情を見せ給はず、さりとては又一すぢに、つれなくも、聞え給はで、活けみ殺しみし給ふは、罵り打たるゝより苦しく侍り、夫婦の縁は出雲にて、神の結ばせ給ふとぞ心からにて近江なる、筑摩の鍋のかず〲に、結びもはてぬ縁は、あぢ潟の海の鯛ならで、ありとも、吉備の中山なか〲に、浮きたる戀はいざしらず、貞女兩夫に見えずと、稚きよりいひ諭され、又稚きより親と親とが、心に許せし妹夫とは、人さへ知りて侍るなる、心づきなき事あらば、打ちも懲らしもし給はで、かくまで物は思ひ侍らじ推辭がたくて娶り給へど、豫ねてながむるます花の、栞に道をかへじとて、出て行けがしの人目のみ、愛々しげに見せたまふ歟、戀しとおもへど恨みわぶ、よすがもひとり泣くばかり、まどろみもせぬ枕には、涙のかゝらぬ夜間もなし、思ひほそりて仇野の、露と消ぬと

も一言の、怨みはいはじ、さたしなみても、女子ごゝろの淺はかにも、深き歎きのやるかたなきた、憐れさは見給はずや心づよしさばかりに、一聲よゝさ泣き沈めば………

愁雲空に滿ちて、槿花朝の雨に惱めり。馬琴が文字の高尚なるは、尤もかくの如きに顯はれたり。之れ、余が婦女童蒙の、讀本としても、毫も害なしといふ所以にして、若し此の事實を、劇場に於いて演ぜしめんか、彼の下等卑劣なる野人の事とて、美はしき處はさもなくて、酖淫邪放僻の媒介を爲すに留まるのみ。此頃、大阪毎日新聞紙上に載する處の、小說若き妻といふを見よ。いかに淫辭の多きぞや。苟も、文字あらん者は、同じくば、此の如き文章を味ひて、その品性を淘冶せよ。

（以下次號）

柿屋餘談

赤松景福

○果安古人の名に、果安といふものあり。歷史に、これをハタヤスと訓めり。されど、名義を按ずるに、行末の安きをいふなるべければ、ハテヤスと訓べきなりと、あるものに見えたり。果は、漢文にハタシテと訓なれたれば、ハタと訓が穩かなるやうなれど、さにはあらじ。

○長生地　おのれ若き時、三木郡氷上村。長松秀次郎の家に寓さき。此の村は、平木村に接きて、平木川の邊に、長生といへる地名ありと、長松氏語られき。已按ずるに、國史に、持統天皇の五年。畿內及諸國置ニ長生地一とあり。釋日本紀に、長生地をイキハナットコロを訓て、兼方案レ之、令レ禁ニ斷殺生一之所也とあり。イキハナツとは、即

ち、放生の義と聞ゆ。さて、今の平木川の邊なる長生といへるは、古の長生地にてや有む。錄して史家の考に備ふ。

○遠賀　おのが隣なる人、九州に行きて歸る。何地に宿れりしかと問へば、其の人、ヲンガ郡に在きといふ。已、さる郡の名は未聞ざれど、若はヲカ郡にあらずやと云へば、其の人ヲカ郡なれどいへるは非ずと云ひき。その後、おのれ、上京したりし頃、筑前國の人に逢ひて、右の話をせしに、遠賀郡、今はヲンガ郡と呼りと、其の人もいへり。若、果して然云改めきとせば、中々無益の事と云ふべし。元のまゝ云ふ時は、和名抄に、遠賀とあり。日本書紀に、天皇至二筑紫國崗水門一とある崗も、そことよく聞えてよし。然るに、かくの如き事、諸方にあるは如何。

○阿拜　伊賀國に、阿拜といへる郡名あり。先年、朝日新聞に、これに假字附けて、阿拜とあり。已、是はアへといへりしを、いひ改めたるにやと思ひて、今年伊勢人なにがしに問へば、近頃アハイと唱ふるもの多しとか。已按ずるに、拜字をハイと讀むが、常の例より見れば、よく叶ひたるやうなれど、古來、此の拜字をばへの假字に用ゐたるなり。神武紀に、比苫破易。廼毛、（又。倍字を所々に用ゐたり。音同じ。）又、仁德紀に、那羅陪務耆瀰破、（神武紀なるは清音。爰なるは濁音）齊明紀に、都那遇何播杯能、此の倍字、陪字、杯字、普通にバイハイと讀む字なれど、假字には、へべに用ゐたるにて、拜字もへなる事見るべし。又、覇字の如きも、書紀、續紀ともに、への假字に用ゐたり。倭名抄郡名にも阿拜（安倍國府）とあれば、是よかるべし。

又云、右の陪陪をへとするは、五十音第一列を第四列に成せるにて、（ハは一番。へは四番なり。）此の

例多し。該開、戒をケとし、細、劑、齋をセとし、梅、賓、をメとするが如し。

○水晶。　潜確類書に曰、水精千年水也。倭水精第一、南水精白、北水精白、信州水精濁と云へり。かゝれば、彼國にて、我國の水精を第一等と賞せし事あり。さるに、我國人は、唐水精とて、彼産を最上と思ひて、我産は如ずとする骨董家などあり。是も遠きを貴んで、近きを賤しむものか。

但し、右の潜確類書に、水精千年水也とあるはいかゞ。明の曹昭が格古要論に曰、多年老氷爲二水精一、然日本國有二青水精紅水精一則水精非二氷也明矣といへり。水氷などの水精とあるにはあらじ。但し、水晶の中に、水、或は、種々の物を含めるあり。已が先人のもたりし。小さき水精の中に、一露流れ動けり。先人、その匣に題して、一滴千春とありき。

古今叢談

山岡螢雪

天の戸に朝寢はあらじ初日影

と、乙由が口吟みたる如く、東天光、東天光と初鷄の聲勇ましく、やがて、寂寥沈靜たる殘夜の色も、次第にうすらぎて、山の端ほの〴〵と明渡り、茲に、初日の影は、都鄙の門戸に掲げし、日章旗に輝きてうるはしく、先づ陽光を拜して、陛下の聖壽萬歲を祝しまつり、藹々たるまどひに、屠蘇酒を酌み、雜煮餅をいはひて、樂しく明治三十四年の元旦を迎へぬ。

元日や此の心にて世に居たし

とは闌更の詠、實に無邪氣なるは人心かな。

萬歲、々々、萬々歲、門松をくゞりて來る、萬歲も、誠に目出度う候らひけると、皷を鳴らして祝ひける。さなり、愛讀の諸媛も、幸多き年を迎へ玉ふ事なればと、聊か、新年の賀辭に代へて、屠蘇酒の機嫌に、赤面ながら、古今の種種の事ども、なにくれとなく、集めたれば、名も、古今叢談とぞかきするめ、豆ならぬ牛蒡筆をまはして、必要なる數の子と、云ふ迄にはあらねど、胡麻事ならぬ實話を、五つ六つ摘んで諸媛に呈すべし。

あはれ、羽子の戲れ、カルタの遊などに、あき玉ひし頃、御笑覽し玉ひてよ。

（一）一月の異名

●●一月を、正月と云ふは、正しくすべき月と、云ふ義なるべし。

陳氏曰不レ曰二一月一而曰二正月一取二王者居レ正之義一。

亦、●●謹月と云ふ。これぞ、一年の計は元日にありとの古語の如く、其の始を、謹むべき義なるべし。

又、●●太簇と云ふは、はなはだすゝむと讀み、春の陽氣にて、萬物皆、すゝみ生ずるの意ならんか。

月令曰正月律中二太簇一。

●●睦月と云ふは、清輔奥儀抄にいへる如く、貴きも、賤しきも、互に、むつまじく徃き來するより、云ひたるならんとぞ。

●●陬月とは、正月の、寅の位にあるより、起ると古書に曰く、

太歲在レ寅曰二攝提格一正月爲レ陬孟陬者春正月也。

●●正月を孟春と云ふも、蓋し、之れより起りたらんか。

●●夏月とも云ふ、唐の夏の代よりぞ起りたる。

廣義曰大禹以二金德一王二都安邑一國號レ夏仍有

虞以建寅之月爲歲首、故謂夏正。

太郎月と云ふもあり、俗に、人の子の初めて生れたるを太郎と云ひ、次なるを次郎と云ふ如く、月の第一なるよりぞ、いひ習したる。

又、暮新月とも云ふ、年くれて新しき月となるの意あるぞかし。

藏王には、初春月とあり。

霞たつ初春月の朝日かげ
のどけき色や空に見ゆらん

後鳥羽院の御製には、初空月と詠み玉ひたる。

雪はなほふるとしながら立春は
さえにしものゝ初空の月

更に、御集には、端月とも見ゆ。

春は來ていく夜もわらぬまきむくの
ひばらにくもるやまの端の月

此の外、發春、献春、規春、開春、上春、初春、發歲、初陽、新陽、三陽、など、種々の名も、皆一月の異名にぞある。又正五九、即、正月、五月、九月の三月をならべて、三長月ともいへり。

（二）我邦詩賦の始

人皇第三十九代に、まします、弘文天皇は、天智天皇の皇子にましまして、幼きより、學を好ませ給ひ、御性極めて明悟、才識人に勝れさせ給ひ、頗る典籍に通じ、文藻特に高妙におはしましきとぞ。嘗て、御父の帝の御宴に侍り、詩を賦して、之を、献つり給ふ、御製にのたまはく、

皇明光日月。　帝德載天地。
三才幷泰昌。　萬國表臣儀。

是我國詩賦の始めなり、と史に傳ふれど、留學生問法僧等が、唐との往來、既に頻繁なれば、此の御代に至るまで、詩を賦する者無き理なし、如何にぞや。

（三）細き俳諧

俳諧を以て名に高き貞徳が、門人等の、此の度は如何にもしてなど丶、心を盡して讀み出でたるに、いつもながら、高點の少なければ、各相顧てかこちけるを、貞徳きゝて、申しつかはしけるに、

三線の糸より細き俳諧に
　てんとろ〳〵と云ふぞかしき

門人等もさるものあり、さらば返しせんとて、

三線の糸より細き俳諧に
　てんちんとろと云ふぞをかしき

あはれ口さがなき言いも言ひけり、返すも返したり、最もをかしき洒落にこそ。

（四）特風

古語に曰はずや。物の成るは、成るの日に成るにあらず、と見よ、いづれの國も、各、皆、其の特風の存するを。日本人は忠を貴び、支那人は孝

を重じ、佛人は華美をこのみ、獨人は理窟を悦び英人は忍耐つよく、米人は金を拜すと、あはれ、祖先の遺風と、天與の地勢、其の他、百般の事物によりて、國風を異にする特相あるを。

（五）天下一の聖人

古文辭の學を以て、名をはしひまゝにしたる、碩儒物徂徠、常に人に戯れて曰く、仁齋の徳行、番山の明智と、予の才識を合せなば、恐くは宇宙第一の聖人ならんと、いみじくも誇たる言の葉かなされど、拙きものだに、三人よれば文珠の智恵といへば、あながち、とがむべきにもあらざるべし。





伊雑宮の大御田祭

井上頼文

かけまくも、あやにかしこき、さく鈴の五十鈴の宮の、遙宮とまします、志摩國、志摩郡、磯部のさとある伊雑宮の、大御田祭こそめでたけれ。去年の紙上に、そのおほむねはかゝげたりしが、今、御田植の神事を、まのあたり見て記せる圖を得たれば、瑞穂の稲の八束穂の、いやさかゆかむためしとて、年のはじめにかくあむ。

大御田祭の神事は、十二ヶ村、毎年巡番にてつとむるあり。くはしき事は、さきに載せたれば、大要のみ摘てしるす。

大御田祭奉仕の役員

田植女郎　六人

服装　衣服　白むく

帯　黒繻子の丸帯を立結とし、緋縮緬のウハジメをしめ、湯モジは赤色

襷　赤色

笠　一文字　紐は　白縮緬

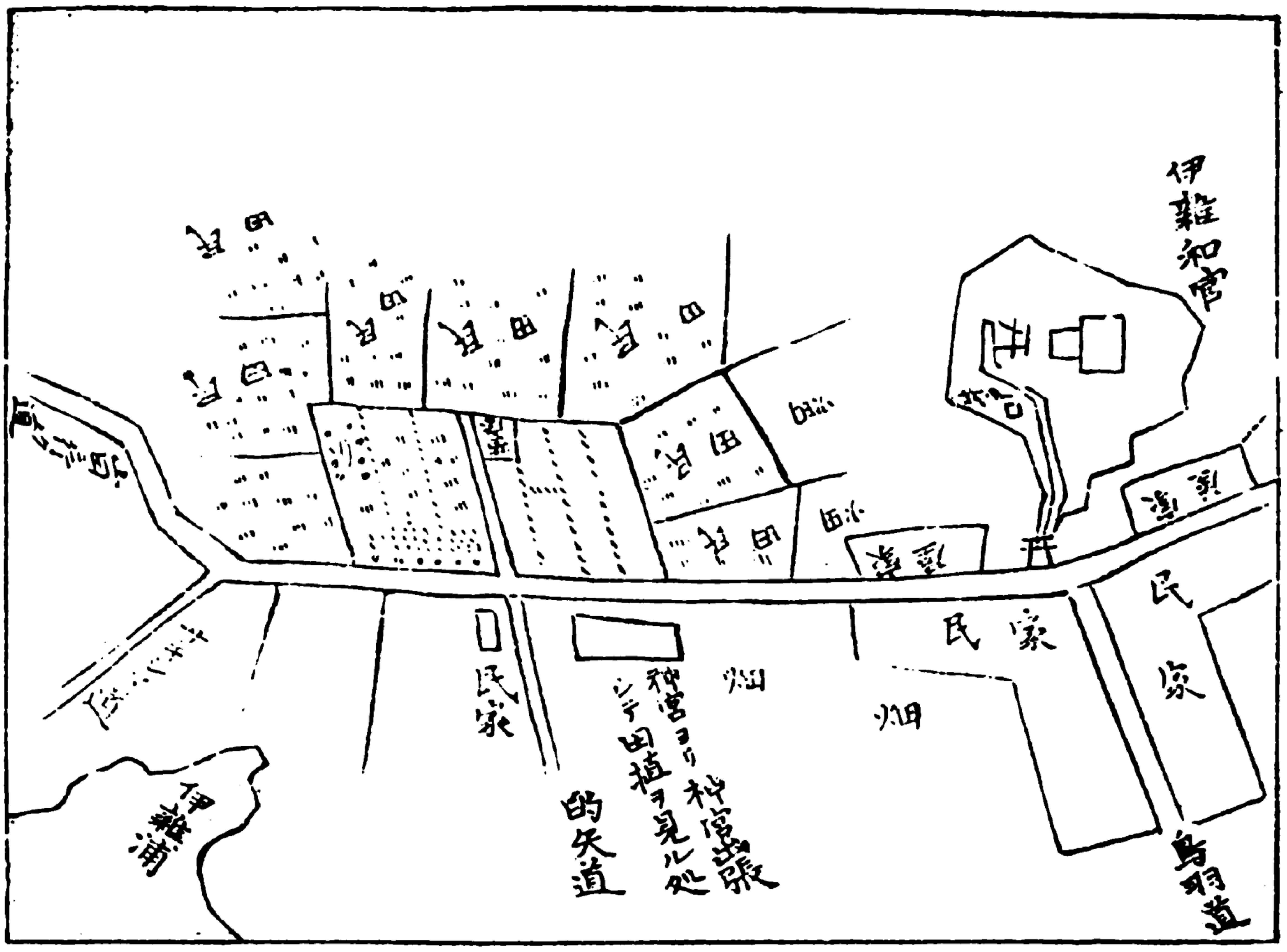
年齢　十五六歳より、十七八歳までなり。年番に當りたる村内にて、富める家の娘の、いまだ、月のものを見ぬを撰ぶ。

兄若丸　弟若丸　田植女郎六人の内にて、年うへある娘を、さいわかとて、まつさきに列し、その次の年齢なるを、

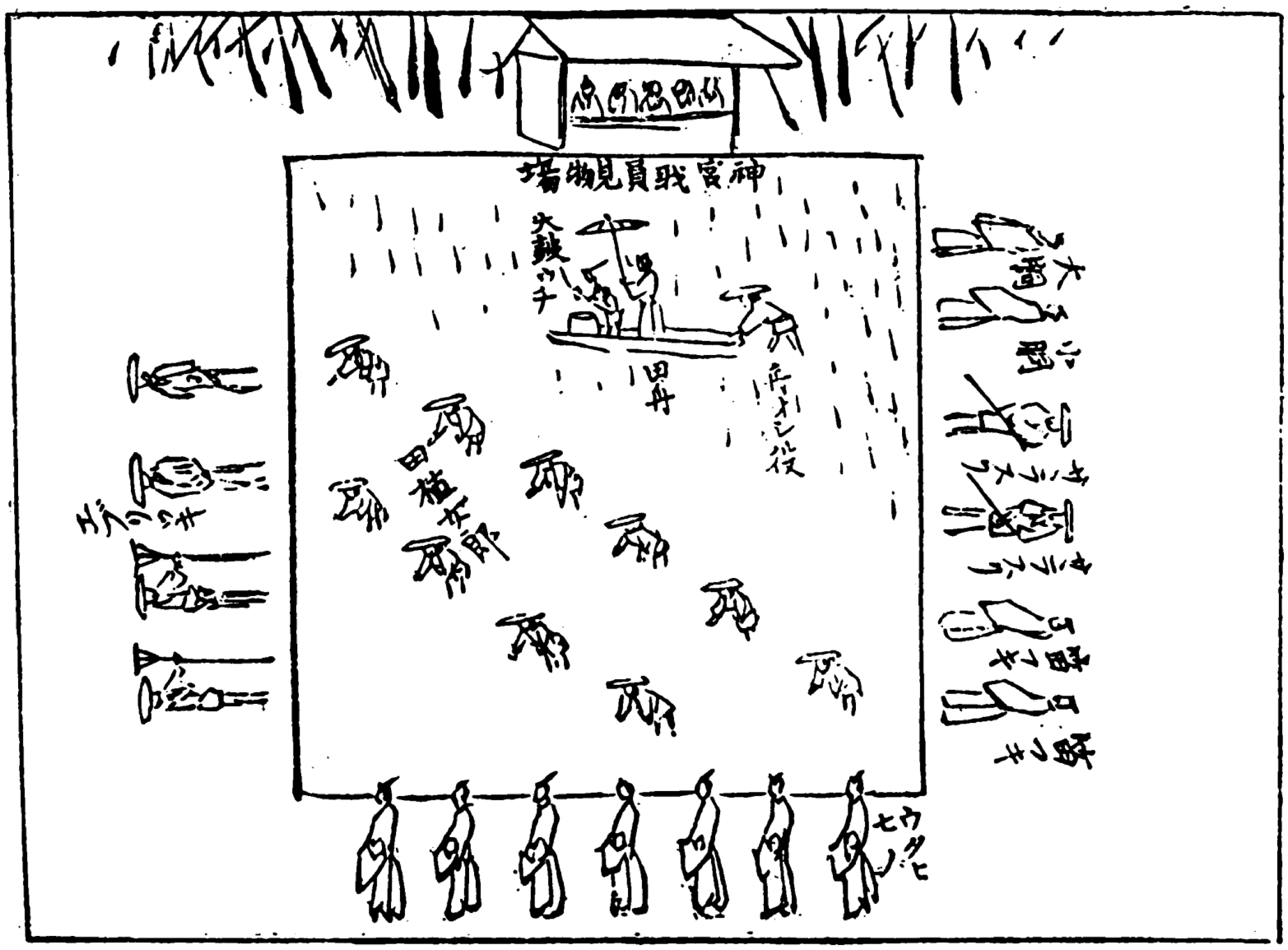
おくわかとて、末に列す。服装は、
ことあることあし。

立人　六人
服装　上着　白むく、膝たけの繻袢
　　　下着　白の、とち
　　　帯　藁を五寸まはりほどの注連縄
　　　　　にあひて、後にて結ぶ。
　　　笠　同上　紐は　白木綿
　　　股引　白
年齢　村内にて、いはゆる若い衆と稱する、
　　　廿二三歳の男を撰びてあつ。
大皷うち　一人
服装　とちの、ゆふせん、ひら袖の
　　　振袖の三枚がさね
　　　帯　ゆふせん縮緬　うはしめ同上
　　　脚袢　むらさきのとちにて、膸だけ
　　　のもの
年齢　七八歳の男兒を撰びてあつ。
大皷を結びたる紐は丈一丈三尺にて、緋白紫
の三色あり
大皷うちの、かいぞへ　一人
服装　羽織　袴
大皷うちの童兒の父、これをつとむ
大胴（大つゞみあり）　一人
服装　大紋
小胴（小つゞみあり）　一人
服装　同
笛ふき　同　同　二人
歌謡人　同　同　七人
柄振つき　二人

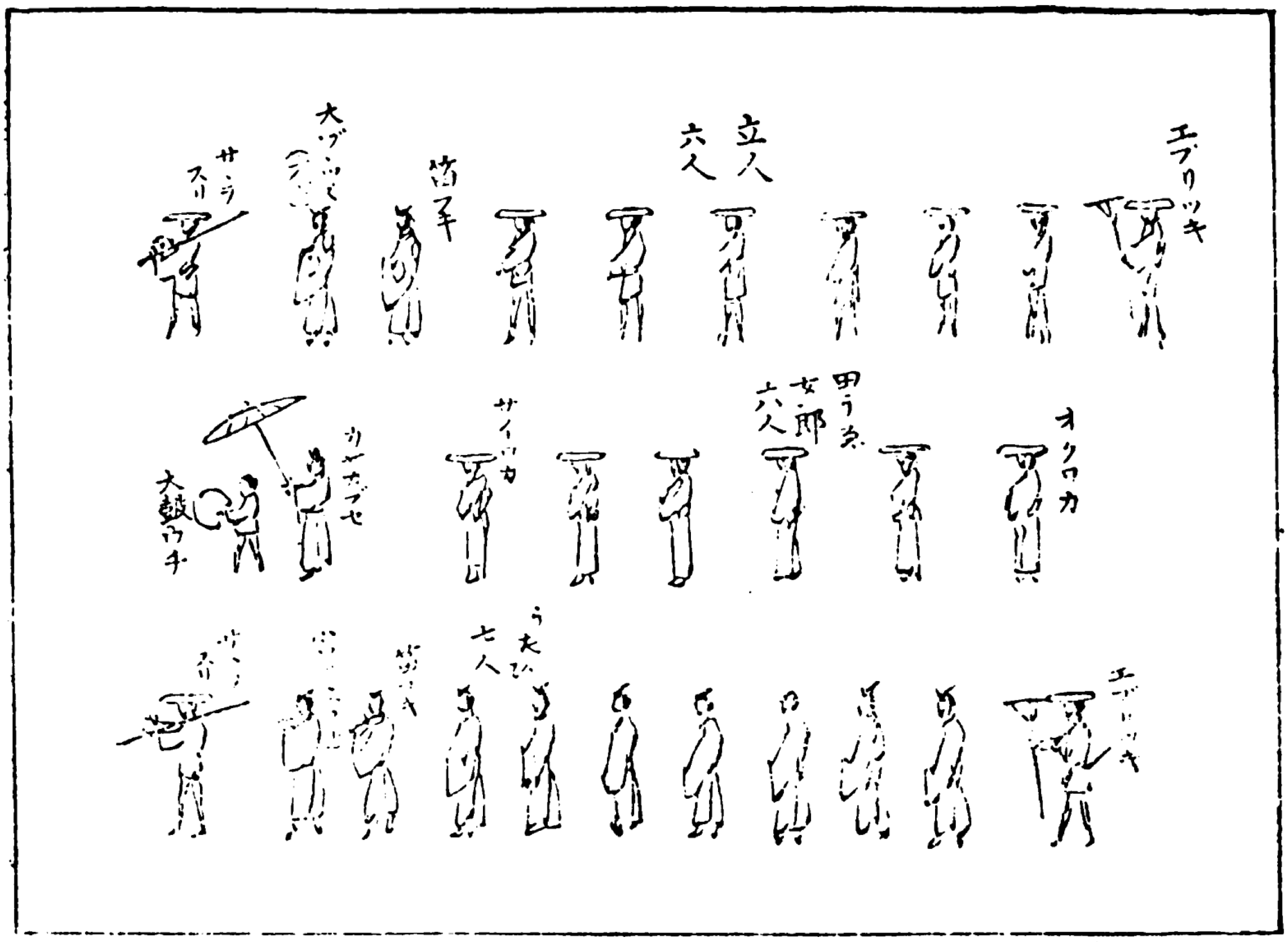
楽圖



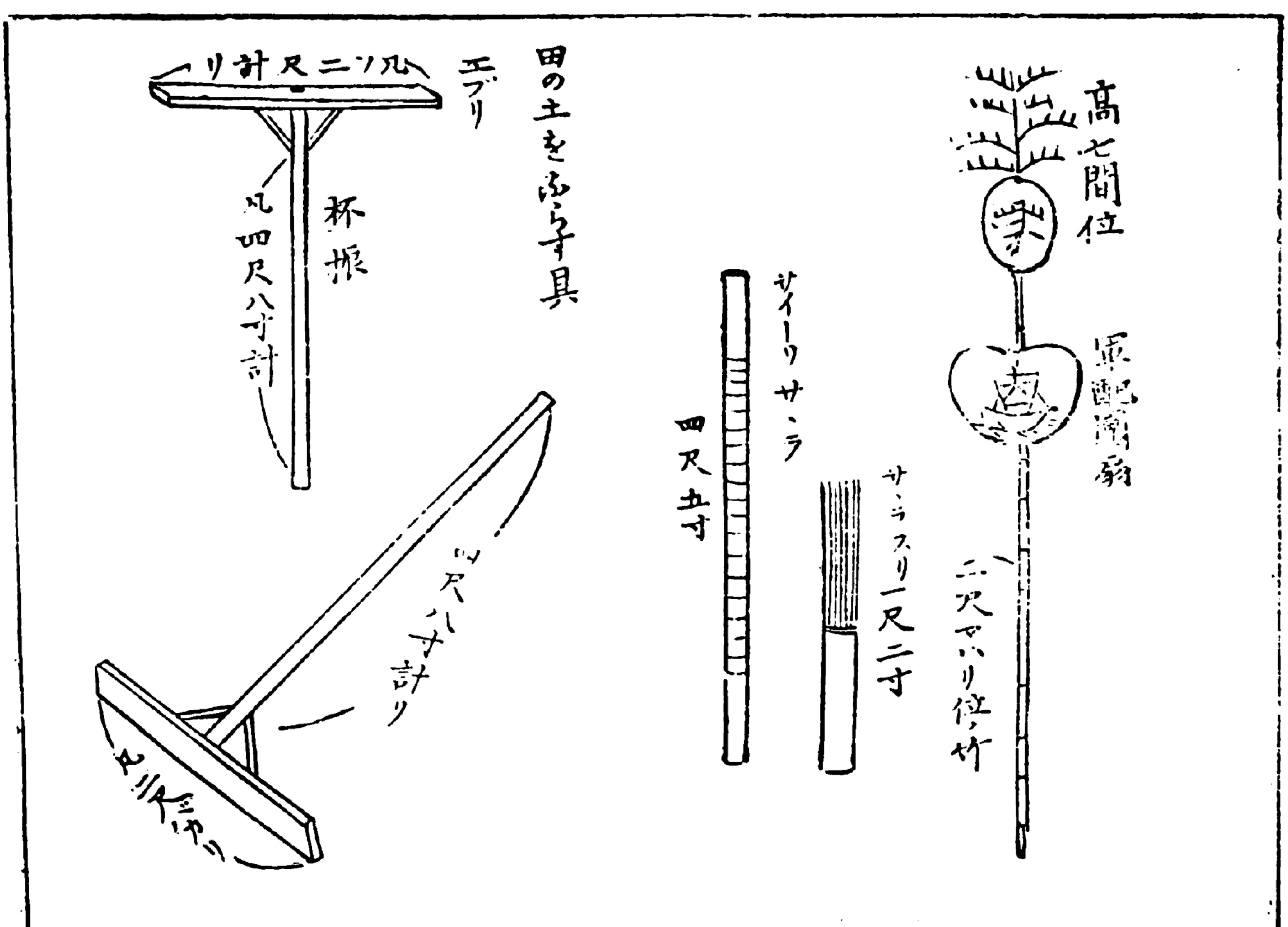
伊雑和宮
民家
民家
民家
鳥羽道
的矢道
神宮ヨリ神官出張シテ田植ヲ見ル処
伊雑浦



神宮職員見物場
大鼓ウチ
田舟
舟オシ役
田植女



エブリツキ
立人
六人
笛手
サヽラスリ
オクロカ
田うゑ
女郎
六人
サイハカ
カヽカブセ
大鼓ウチ
うたひ
七人



高七間位
軍配團扇
二尺マハリ位ノ竹
サイーリサヽラ
四尺五寸
サヽラスリ一尺二寸
田の土をならす具
エブリ
凡一尺二寸計リ
杯振
凡四尺八寸計
四尺八寸計リ

サヽラすり　　二人

服装　立人におなじ

まづ、伊雑宮を拜し、修祓をうけ、それより大御田にいたる道中の行列は右のごとし。

立人が、聲おもしろく大御田の謠をうたへば、これに和して、笛、大鼓、大胴小胴をあはすなり。

たとへば

立人ハヤシ　サーアーー　大胴ハヤシ　ヤアー、ハアー、

胴オンハァー　笛　ヒユルヒユウー

サァーアァーー　こーとーしや　よがァーよて

はにはーが　さァいィーて

サーアーー　ナアー、ハアー、オンハー　ヒユルヒユウー

まァーすーを　とりよーせ　みーィでェ　はァかアーるァー

エー　みィーでェーハァーかアーるァー

エイ〳〵　シヤンとせい

樂　圖

笛にて　ジロー　タロー　サムローと、

はやす

小胴はやー　ハアマの　マツカせ　ざゞんざァ

御大田神事すみて後、家々にて酒肴をとゝのへ、祝盃をあぐ。田植女郎は、紋附の衣服と改め、座席にて舞をまふなり。その翌日は、二の大御田とて、大御田におりたる（田に入るを、おりるといふ）田植女郎は、今日をはれと、力のおよばんかぎり美麗なる衣服を着飾りて、伊雑宮より佐美長神社に參拜し、それより、千田の御池にいたりて家に歸り、祝盃をめぐらす。この日の參拜を、衣裳くらべといふ。

旅のらくがき

明治三十三年熊本の旅舍にて　深山庵主人

(六)熊本の街路

我が國にては、城廓を中心として起りたる市街は、概ね、區畫井然として、大小の道路十字に交叉するに、交通の便にのみよりて起りし市街は、皆、不規律を極むるが常なり。前者は、平原にある故に、土地に餘裕多く、其の發達も人爲によること多きに、後者は、事情全く異り、海岸の狹き地に、一戸殖え二戸增し、其の發達も自然にのみ任せたる結果なるべし。前者の例としては、京都、大阪、廣島等を見、後者には、長崎、馬關、神戸など其の適例なり。熊本は、固より前者に屬するものにて、西肥の大平原に、城廓を中心として一市を搆へしものなるが、十年西南の役に、悉く灰燼となり、更に、市民の熱心を以て、新市を經營せしが故に、道路の端正は、頗る見るべきものあり。其の道幅の如き、廣き所は、十二間もあり。通例、通り筋と稱ふるものも、概ね、六間にして、兩側は、柳、梧桐、松、(中には櫻、槙、紅葉もあり)等を植ゑ、一間ばかり退きて、人家の軒を幷べたり。樹を植うることは、通り筋のみに限らず、全市中、如何なる寂しき横町も、塲末の邊鄙も、皆同じことなれば、人煙稠密の都會にても、空氣は、常に清潔にして、夏は涼しき木蔭を作り、冬は吹きすさぶ寒風を遮るなど、之れが爲めに、市中に住む人の愉快と利益とを受くるは、誠に淺しとせず。試に、街頭に立ちて眺むれば、嫋々として柳の糸の風に靡ける、梧桐の鬱々として茂れる、滿月葱然として、宛ながら、公園地の如く、貲朱を爭ふ俗界を、其の儘に雅了し盡せるに似たり。

殊に、彌生の春は、百貨を列ねし店さきに、爛熳として櫻花咲きみだれ、秋は、一葉の梧桐、蓄財に餘念なき人々の心に世の哀れを印し、霜降りくれは紅葉色づき、木枯し吹けば落つる葉は雨の如く、冬としなれば、松の翠のいや増して、雪には折れぬ柳の、處世に巧みなるさまを示すなど、慰愉も、利益も、教訓も、皆、此のうちに見出さるるにあらずや。我國五十餘市の内、何れか、かゝる特色を具へたる。誠に、都會らしき都會の典型にして、やがては、理想の都市に近きものとやいはまし。



挿圖

新年の感慨

竄關生

孟軻云へらく、天の將に大任を、この人に降さんとするや、その心志を空乏にし、行ひその爲す所に拂亂すと、余や、事、心と反して、空しく三十四年を迎ふ、よりて、一章の歌を作りて、鬱結せる心緒を披瀝す。

鳥がなく、あづまの國の、大江戸と、むかし云ひけん、千町田の、千代田の宮を、大宮と定め給ひて、宮柱、ふとしきたてゝ、天地の、よりあひのきはみ、神ながら、國地ことごと、しろしめす、我が大君の、大御代も、三十とせあまり、四とせ

てふ、春を迎へつ、御民われ、生けるかひあり、
日の本の、國の御いつは、谷ぐくの、さわたるき
はみ、天雲の、向伏すかぎり、いやてりに、いて
りわたりぬ、潮沫の、こりてなりたる、末國の、
國のこきしら、己が國、己がその身の、いやしき
を、打忘れつゝ、大地を、わがものがほに、ふる
まへる、しこの國人、もとつくに、この日の本の、
日の御旗、い仰ぐ時の、來りぬる、この大御代に、
生れあへる、われしたぬしも、しかはあれど、こ
れのこの身の、おもはへる、事のあらずて、今一
つ、年加へれば、ますらをと、思へるわれも、す
ぐしてし、その徃年の、しぬばれて、ふとき心を、
しづめかねつも

反歌

たゞにしも年迎へじとおもはへるこのわが心たが
ひつるかも

滯松日記の一節

一花女史

我身は、思もよらざる脚氣病に悩み、醫師の勸に從ひて、轉地せしは、會津若松の城下なりけり。始めて、慈母の膝下を離るゝ事あれば、何となく、心細き中にも、又、他鄕に屬するの經驗もと思ひて、覺束なくも、一月以上を送りぬ。

東山と云ふは、若松の城下より、東南一里ほど隔りつる處にして、當地隨一の浴場あり、殊に、妾が故郷なる、出羽の庄內、或は最上の上山と連稱し、會津の東山と、何時の頃、如何なる人の云ひ初めけん、何となく、懷かしく思はるゝからに、病の怠るに任せ、或朝、早く支度を整へて、見舞へり。

田甫を通して行くまゝに、遙かに聳ける大久保山

に、墳墓の見えて、荒れたる石碑の立つあり。

朝霧のおほへる姿ぞあはれなる
さ手なる岳にゐます石ふみ

あぢきなき世をかこつらん石文の
あはれを告ぐる虫のこえかな

野郎が前と云ふ所に至る、旅人の休む所なるらん、この土地の名物が野郎が前の田楽餅といふを、盛に焼きて、客待ちをする家の軒をならべて、あるは、何となく、田舎風致の見えて、面白し、こゝぞ東山の入口なる、左の方をながむれる、断崖絶壁、今にも崩れんかと思はるゝ計りなは山のあるに、引き替へ、右の方は、湯川となん云ふ、清き溪流の岩間を過ぎ行く様、畫にも書きたき心地せり。又、松原を通して、幽かに見ゆる伏に瀧は、白糸を曳けるが如し。時しも十月、小春ましてよき日和なりければ、木葉の紅葉して、日光に映じながら、風のまに〳〵散り落ちて、流に錦を敷へる美さよ、次第に瀧に近けば、百雷の谷に轟くが如き音の、耳に徹しければ、打ち驚き、見張れば白泡飛び散り、銀玉かと疑はれ其身恰も瀧つ瀬の最中にあるが如し、夏日の景や、さぞよからんと思ひぬ。

秋きぬと告ぐる木枝に一しほの
あはれを添へてふしみ瀧見ゆ

瀧の音はとふたひし人もかばかりの
ながめなりけめたきつほの音

この湯川の両側に温泉場数十軒もあり、向瀧の湯、新瀧、右瀧、目洗湯、不動湯など有名のものなり。

あまりの絶景に一泊して、朝またき起きいでゝ見れば、霧深くわたりて、空冷かなり、あなたこなた散歩しけるまゝに、日のかなたの山の頂よ

り、ほのぐとさし昇るは、實に言ひ難し、日もはや西山に舂けば、秋は夕くれさて、入口のかけの山の端のかゝやく景、またいはんかたなし。烏は、塒に歸り、樵夫は、家路を急ぎ、暮鐘二つ三つ、かすかに響き渡るなど、いともあはれなり、まして、生れて以來、初めて客窓に身をよせ、なく虫の音も聞くなど、げに秋の暮はど悲しきものはなかるらん。旅ねの枕かはくまもなく、

さらぬだにかなしきものを旅枕
　都をしのぶかりの一とこゑ

丑の年　けいせつ

忠々鼠の世もすぎて
今年はモーモー牛の年
いざや祝はん諸共に
君が八千代に屠蘇くみて



梅上鶯　東久世通禧

咲く梅のあるじはしらぬ宿なから
　なくうぐひすに引れきにけり

雪中鶯　佐々木高行

そらさえて雪はふれとも咲そめし
　梅のまつ枝にうくひずのなく

雛　高崎正風

久方のあまつそらよりおくるよを
　いかに知てかとりのなくらん

新年　副島種臣

千早振かみのまつりもまつり事も

あらたまるへき年たちにけり

鶯出谷　前田利鬯

うくひすもよにこそ出れ人しらぬ
谷のふるすをはるにとはれて

早春柳　福羽美静

あづさゆみはるのはしめは青柳の
糸もひかけものひまさりつゝ

貴賤迎年　本居豊穎

宮人かみかとおかみにゆくこまの
よほろもとしの初よそひせり

新年待鶯　宮地厳夫

年たちてまつ梅か香はかはれとも
またうくひすはき鳴さりけり

新年鶴　北郷久政

よろつ代をうとふ軒端に聞ゆなり
雲井をわたるあしたつのこゑ

新年鶯　荻原厳雄

年立てまつものおほきなかにしも
まつうくひすを数へつるかな

千鳥　三輪義方

いり汐のなみにおはれて磯ちかく
聲もよりくるうらちとりかな

竹雪有聲　蜂須賀随子

呉竹のよのまのゆきのしつるゝは
さむさ一ふしそへてこそきけ

寒雲　近衛貞子

あたゝけき日陰は窓にさしなから
未たかせさゆる雲のいろかな

晴後遠望　鍋島栄子

夕日さす野すえにしろくゆく水の
みゆるや雨のなこりなるらん

弓　南郷柳子

ときしあれは弓も袋にをさまれる
　御代のためしに引てけるかな

新年氷　　柳原愛子

改ためてくみし筒井のこほれみつ
　こほれしまゝに氷けるかな

溪梅　　小池道子

咲き匂ふ梅のこすゑはみえなから
　ふみわけかたし谷のしらゆき

谷春氷　　北島以登子

去年の冬こほりしまゝに解ぬかな
　ひかけにうとき谷かわのみつ

社頭杉　　坂田泰子

いその神古きやしろのひろまへに
　神さひたてりすきのひともと

窓前梅　　中島歌子

窓の外の梅のはなのみみつるかな
　つくゑの上にふみはあれとも

新年松　　川村重子

ひとしほの色こそみゆれあら玉の
　年たちかへるかとのこまつに

心のはな

井上頼文

新年風　　米奥學三

新玉の年たつ今朝の初風や
　外つ國までもふき渡るらむ

海邊朝

玉くしけ二見の浦の朝日こそ
　曇なき世の姿なるらめ

同

ふたみかた昇る朝日や天地の

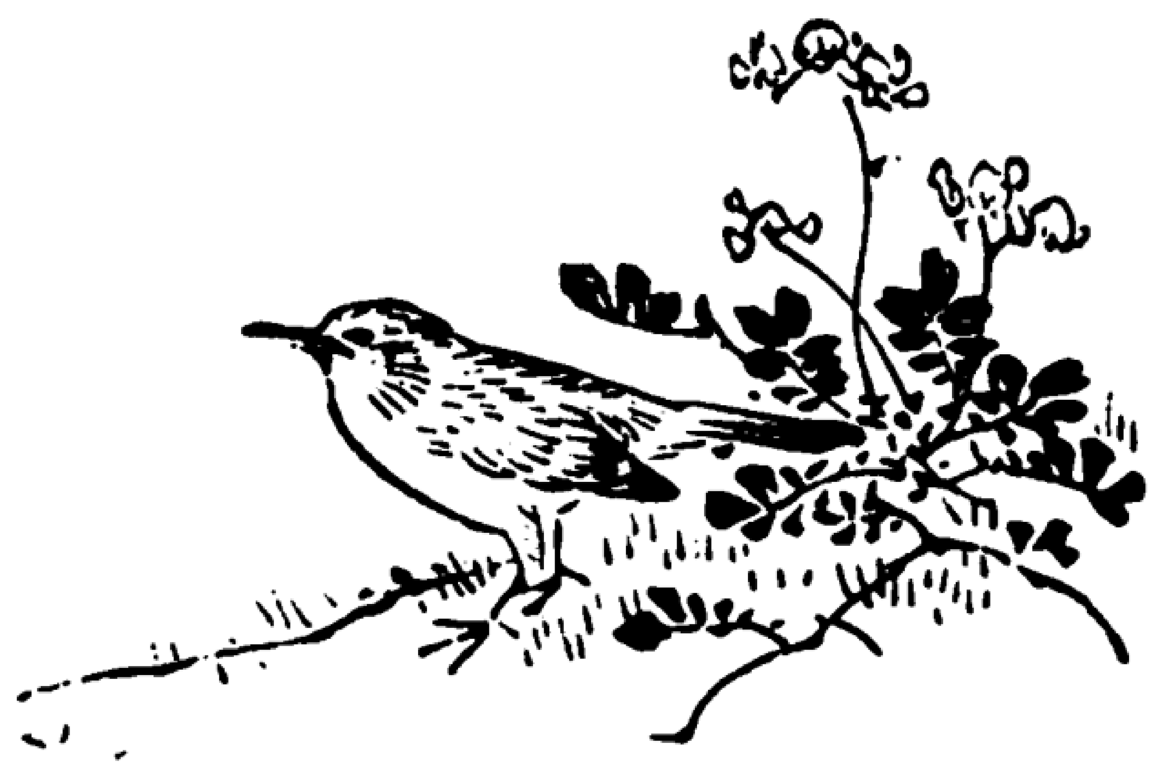
かきりなき世の姿なるらむ

生徒　高林吉誠

つき〳〵に君もなりいてん撫子の
學ひのそのに生ひしけりゆく

旅宿夏　鈴木至誠

草まくらなるれはなれふる里に
かよふ夢路ほともさかりゆく





雜報

●篤行　徳島縣那賀郡見能林村、六浦嘉一郎の長男有太郎(十九)、二男喜津次(十四)兩人共に、同地小學校に通學せるが、二男喜津次は、十一歳の時、疾病のため、左脚を損じ、起居自由ならざるを以て、兄有太郎之れを脊負ひ、十八九丁の行程を、毎日通學して、三年の間、一日も怠たりたることなく、兩人今年尋常小學校を卒り、更に、高等小學校に轉ずるや、有太郎の慈愛、亦前日と異なることなし、一美譚として傳へらるゝといふ。げに、いとめでたき心がけなり。

●孝女　大分縣西國東郡小野村に、一孝女あり、

初勢と呼び、年齢僅かに二八、實母の病褥に在るや、看護寸時も懈らず、神に祈願して、二年間、月に二回三晝夜の斷食をなし、以つて、ひたすら、其の平癒をいのるといふ。こも亦、今の世にはめづらしき心がけといふべし。

●高木兼寛氏の女子服制意見　高木兼寛氏は、夙に、本邦女子の服制改良に就き、意見を有し居るも、一般の社會に實行せんは、容易ならざる事なれば、先づ、私立學校の女生徒間だけにても、實行せしめたしとの希望にて、方今、女子の幅廣帶、長袖を廢し、上衣は、窄袖となし、袴を穿たしむるは衛生上、經濟上、及び、作業上に、至大の便利を與ふるものありと云ふの趣意にて、昨日、松田文相を訪問し、右服制改良に關する意見を、縷陳せりと。

●保姆傳習所の開設　東京府敎育會附屬の同傳習所は、一昨日愈々、其の許可を得たるに就き、本年早々、開設する筈にて、其の修業期間は六ヶ月とし、四ヶ年の高等小學校卒業者は、入學するを得る者なりと。

●毬の女子躰操　我國にては、是まで、男子の躰操のみにて、適當なる女子的躰操と云ふもの無かりしが、今回、日本体育會の敎師、白井規矩郎氏が、英國女子躰操を研究して、其の一種ある、毬躰操を、体育會に於て講習せしが、頗る趣味あるものありと。

●郵便電信局の女子雇員　東京郵便電信局に於て見習中なりし女子雇員は、此の程、其の業を卒て、雇員に採用せられたるが、當分の内は、内部の事務を取扱はしむる筈なりと。

●工女敎育の好成績　神奈川縣程ヶ谷在西谷村上星川日本絹綿紡績株式會社にては、四百名以上

の、工女を使役し居り、毎年、石川縣邊より、募集し來る者にて、少しも教育無き者なるより、同會社支配人、井上篤太郎、事務長辻半次郎兩氏が發起にて、昨年、同村の小學校長、中田義鏡氏に依賴し、工女の教育を爲す事にしたるに、頗る良結果にて、初め、いろはのいの字も分らざりし者が、僅々一ヶ年位にて、實家へ送るべき書狀をも認め得る程になりたるよし。尙ほ、同會社にては、工女に蓄財をすゝめ、已に、此の程、歸國せし女工等にて、工賃百圓以上を貯蓄して、歸りたるものありたりと。

●煙草のニコチン中毒に就て　ニコチンなるものは、人も知る如く、葉煙草中に含有せる分子なるが、近來、煙草の中毒即ち、ニコチン中毒に罹りたるもの、尠からざる爲め、之れが取締に關し、其の筋に向つて、其厲行を督促するものある程にて、當局者の語る處に據れば、煙草の中毒は、單に、ニコチンのみならず、卷煙草のカグ除けとして、使用する、種々なる藥液も、又、中毒の大原因なれば、目下、これ等の取締法策に就き、取調中なりといふ。

●鵞口瘡と公衆衛生　牛疫鵞口瘡發生して、市部は素より、郡部の牛畜に蔓延し、本月初旬より、當局に於ても、夫々、豫防制遏法を施行し、世人一般に於ても、大に警戒するに至りしは宜しけれど、未だ、此の傳染病の性質を知らず、流行性鵞口瘡が、公衆衛生に及ぼす影響を明らかにせざる爲め、只牛に傳染病あり、人にも感染の虞れあり、牛乳を飲むは危險あり、牛肉を食するも快からずと、所謂、素人流の觀念より、牛乳牛肉の需要者に、恐慌を起し、牛乳の如き、從來、飲用の慣習ありて、一日も缺くべからざる營養物を、用ふる

能はずして、衛生上の損失とは、不便とを忍ぶ者、多くこれが爲め、從來、市内の産乳販賣高は、一日平均八十石なりしも、昨今に至り、急に、二十石の減少を見るに至り、牛乳搾取業者は、一方に於て、鵞口瘡の爲め、直接に、牛畜の損害を受ると共に、他の一方には、販賣に差支なき良乳の販路をも減じて、大なる損害を蒙り、非常の災厄に苦しみつゝあり。元來、流行性鵞口瘡は、一名口蹄疫と稱へ、牛、羊、山羊、豕に發する傳染病にて、人犬鳥類にも、稀に傳染する事あり、歐洲にては、千七百年代の中頃より發し、獨、佛、伊、英等、往々之が爲に、莫大の損害を蒙り、我邦にては、今回の流行を以て、始めとす。この牛疫は、國家畜産經濟上より見れば、産牛を減じ、非常の損害を與ふるものなれども、一個の疾病としては、左して恐るべきものに非らず、最後發熱して、口内蹄邊に發疹し、泌乳の減量を來たすのみ。大概二三週日にして全治す、成長牛畜に在つては、爲めに、死に至るもの稀なり、偖、其の病毒は、唾液、乳汁等に存在する故、生乳のまゝにて飲用するものは、人にも感染することあり、其の結果發熱して、口内に發疹し、胃加答兒、下痢等を起すも、其の病毒は、案外薄弱にて、容易に殺滅することを得、則ち、攝氏五十度の熱を、十五分間加ふるか、攝氏百度の熱にて煮沸するときは、即時に、毒力を減殺することを得べし。(以上は、某獸醫學士の語る處にして、時節柄參考の爲めに揭げたるのみ)

●いろ〳〵　▲下女勞働時間の制限　濠洲ニユーサウス、エールス州の議會は、下女の働く可き時間を規定し一日八時間以内に限ることゝ定め、饗宴などを催せし場合には、一日十二時間に延長することを得るも、これは、二日に涉るを許さず、且つ、一年十二度を越ゆべからずとの、法律を議決せしといふ。▲往古

●埃及の結婚式　考古學者の、取調べたる所に據れば、太古の埃及には、結婚の儀式なかりし由にて、只夫婦の間に、嚴重なる規約を交換し、夫は妻に對し、或る權利を與へ、其結果として、夫は妻に服從の義務を有することゝなるなりと。又、女子は、已婚と未婚とに拘はらず、總て、社交上の事には、男子と同一の待遇を受けたりと云ふ。▲今の世に稀なる學者　伊國子ープルスに於て、此の程、死亡したる、マリニと云へるは、醫を業としたる人なるが、資產の豐ならざるに拘らず、或る醫學上の疑問を、解釋せんが爲に、既往四十年間、一身を犠牲に供して、熱心、其の研究に從事したる由なり、金錢を得るを以て、人生の唯一の目的なりとする、歐洲諸國に在ては、近頃珍しき人なりと謂ふべし。

●第十九世紀の日本婦人　昨年末、神田美土代町の青年會館で開かれた、十九世紀送別演說會にて、巖本善治氏の演ぜられた演題である。氏は、世界に幼稚視せらるゝ日本婦人は其實大に世界に誇るべき三大美質を有せり、其美質とは即ち柔順にして謙讓なる事、嫉妬を愼む事、獻身的なる事の三つにて、宗教に、文學に、政事に古來婦人の之を努めて功蹟千歲に赫々たるもの殆んど枚擧に遑あらず、とて天照大神、神功皇后、光明皇后、橘姬、紫式部等を例に引き、我國が婦人教育の早く發達したる點に於て他邦に遜色なきを明にし、轉じて今日の社會を觀察すれば婦人教育は殆んど古來の美質を打破せんとするものあり、曰く、男女同權、曰く活潑進取、曰く何、曰く何と、偖其の影響は最も進步したる日本婦人の道德を誤らしむるものあり、さるを第十九世紀が之に向つて上帝の教を輸注し以て此危險を救ひたるはこの世紀を送るに當つて我々の大に記臆し置かざるべからざる一大事なり云々と結論せられた。とにかく、この種の人々が、本邦固有の美質を識認することが出來るやうになつたのは、非常に喜ばしいことである。但、曰く男女同權、曰く活潑進取、曰く何、曰く何と、最も進步したる日本婦人の道德を誤らしむるは、第十九世紀が、所謂上帝の教

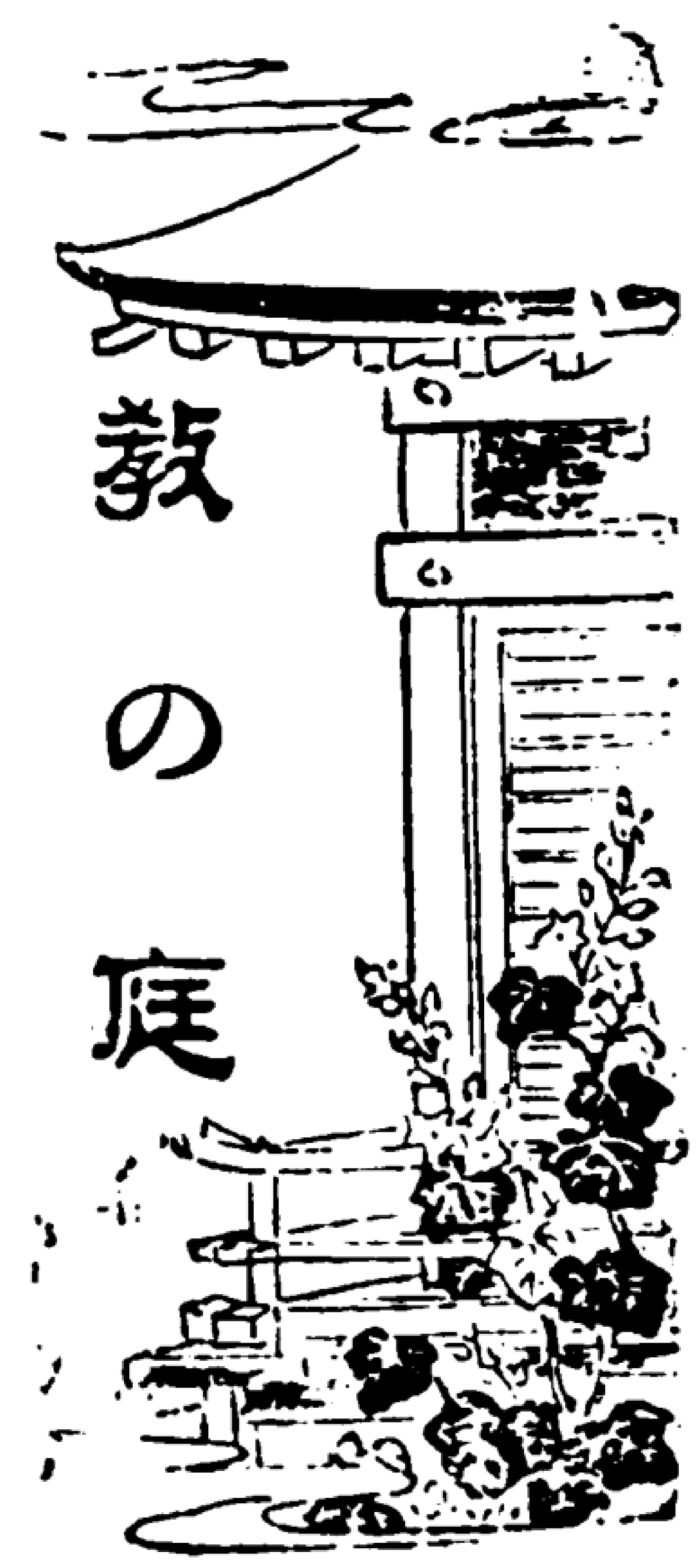
を輸注して、以つて、この危險を與へたるものにして、この世紀を送るに當つて、我々の記臆しおかざるべからざることあるを、警告しおかなければならぬ。

●日本女學校の談話會　十二月廿二日例の裁縫室で開かれました。三輪田學監、まづ、懇篤に、冬期休業中の心得を戒諭せられて、それより左の順序に進みて會ををわられました。

一唱　歌　　一二年生一同
一おはなし　　一　年　生一人
一國語講義　　二年生イ組一人
一英語話話　　二年生ロ組一人
一作文朗讀　　三年生イ組一人
一漢文講義　　三年生ロ組一人
一唱　歌　　三　年　生一同
一おはなし　　技藝科生徒一人
一唱歌君か代　　一　　同

開校以來日淺きにもかゝはらず、薫陶の行屆けることは、生徒諸子の學業の進歩とは、この會にて、明に證明せられてござりました。老いたる身には、御羨しさに堪へられませぬ。(あは子)

●日本女學校の生徒監督　寄宿舍にての監督は、往々、一種の弊風を傳ふるのみならず、到底平和圓滿なる生活を味はしむると能はず、彼の下宿屋、もとより女學生をおくべきところにあらず。女學生の監督については、世人の甚だ憂慮するところなるが、日本女學校にては、地方より來學せるものは、總べて、敎師の家に寄宿せしめ、家族として、慈愛と懇切とを盡して、監督するとに定めたりしに頗る好結果を得たりといふ。



一月五日兼題

新年

天　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

あらたまの年はきさけのさかつきに
　まつたのしさのあふれくるかな

地　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

あにごともきのふにかはる心ちして
　としのはじめはうれしかりけり

人　三河國幡豆郡平坂町　石川樂子

老の身もわかかへるへきてゝちして
　としのはじめはうれしかりけり

（以下原稿到着順）

あたらしき年をむかひてみたみらか
　きみのよろつよゝうたはぬはなし　藤甚たき子

指折りてうなゐかよはひたしふるも
　さしのはしめのすさひなりけり　木下はる子

いさや〱神もふてしてけふこそは
　はれにてまりにあそひくらさめ　瀬戸ゐい子

嬉しけきうきみろからもあらたまの
　さしたつけふはのさけかりけり　中島さた子

あたらしき年のはしめはなにこさも
　あらたまりぬるこゝちこそすれ　牧梁子

はつ春の今朝ふくまつのかせたにも
　千代に八千代をよはふこゑする　稲津仙子

大きみのめぐみあまれくみやこをも
　千しまのはてもさしそむかゆる　德永則子

新たかのしまやまかけてきみか代の
　めくみあまれくさしはきにけり　吉富彦子

谷くゝのさわたるおくのやまさきも
　みやこのはるにおさらさりけり　村上昌子

今朝みれば松のみどりもさしそひて
　いさもにぎはふあらたまのさし　大麻一子

うぐひすの聲もにほひてたつさしの
　こゝろもさらにあらたまりけり　松永信子

山かつがふせやののきもうちひさす
　みやこもおなしさしたちかへる　佐々宮枝子

ものごさにおくれかちなる山さきも
　めぐみあまれきさしたちにけり　佐々木忍子

新たまのさしたつ今日のたまうきに　受樂院圓子

きみがめぐみをたゝへてそくむ

きのふ今日としもきた野の一夜まつ
ふた葉に千代のはるぞみねける　志方之子

高さこのしまやまかけておほきみの
めくみあまねきとしはきにけり　森川儀子

うみに陸にあさひのみ旗うちおひき
ゆたかなる代のとしはたちけり　鎌田喜代子

歌かるたくみかはしつるおとめ子の
たぬしひおほきとしたちにけり　板橋延子

門ごとにたつるかざりのまつかねを
おもむろにふくとしのはつかせ　板橋直子

おとめ子の羽子つく音もなにとなく
あらたまりたるこのあさけかな　高石とよ子

さしのほる初日もゑみてみゆるかな
うれしきとしはひとはかりかは　村上操子

としとしにふりゆく身にも新らしき
としのはじめはうれしかりけり　田村多豆子

昨日をも去年とふるすやたちかはる
としのはじめのこゝろなるらむ　上原信子

とし波のよるをいとはてよろこふは
たちかへり來るあらたまのはる　竹村篁子

門ごとのまつにかけさすにひとしの
はつ日あふかぬひとなかりけり　鍋田龍子

ふるとしはことなくすきて新らしき
いはふけふこそたのしかりけれ　河合縫子

天の戸をいつるはつ日のあきらかに
をさまる御代をまづいはふなり　本多きさ子

あたらしく朝日にほへりあめつちの
こゝろのとかにとしやたつらむ　村田多豆子

みゝにきゝめにみるものと新らしき
としのはじめをいはゝぬはなし　加藤濤子

わかとものまなひの道もいやひろき
ひらけゆく世のとしたちにけり　服部正子

いなたきになみよる老もうれしきを
わかくてすゝむとしやいかなる　服部萬子

あたらしき年をむかへてのとかなる
はつ日かゝやくみ世ぞたのしき　熊谷かほる子

あらたまの年のはじめにきみかよを
千代にといはふけふのたのしさ　木村まさ子

たらちねのかはらぬかけをあふきつゝ
ゆたけきとしをむかへつるかな　菅俊子

ことさらに光りをそふるはつ日の出
けふはゆたけきとしのはじめぞ　荒井幾久子

松たてゝいはふはつ日はひなさへも
かどにおとめのおひはれのこゑ　荒井滿武子

川いけのみつとにうつるはつひかけ
はるとおもへはいとゝさやけし　荒井千代子

幾千代もかはらでけふのはつ日の出
そのふのまつにあそふつるかめ　高塚佐多子

明けぬれははや門まつにつるの來て
まふはめでたきあらたまのはる　荒井美知子

身にそはる老もわすれてうれしきは
にひとしいはふあしたなりけり　名取正代子

來るたひにふり行く身にも樂しきは　戸賀崎治子

今朝こそは年につきひにはしめなれ
　さしのはしめのあしたなりけり　高橋松江子

さし出るあさ日のかけもうら〳〵さ
　いはへやいはへゆくすゑのため　福原菫子

あきらけき御代そ嬉しきまつたてて
　さしたつ御代のゆたけくあるかな　仁保しま子

もの皆はありしきのふにかはられさ
　わか千させさへいはふけふかな　平野琴柱子

あたらしき年のはつ日のさしのほろ
　あらたまりたるこゝちこそすれ　青木たま子

あらたまのさしのはしめは天の戸を
　御旗のかけのいさゝのさけき　北島功子

吹く風もねだなならさぬきみか代の
　いつる日かけものさかなりけり　北島松子

あらたまのさしのはつ日を仰きつゝ
　しつけきさしのたつそうれしき　北島操子

なにさなくさしのはしめそ珍らしき
　み代よろつよさいはふたのしさ　日下徳子

あらたまのさしたつけふの朝日かけ
　あたらしからぬ日はなけれさも　饒山増代子

大御代のさしたちぬれはあめつちも
　くもらぬ御代のひかりなるらん　武田亀子

すゝみゆく御代になひきて民くさの
　あらたまりぬるこゝちこそすれ　升田鶴子

初日かけのほらむさするみそらより
　かまさにきほふさしはきにけり　山田米子

年たては世々ふるゆきの富士の根も
　さしのひかりはあらはれにけり　山田稻子

何こさもみなあらたなるこゝちして
　あらたにみゆるけさのそらかな　川端まさ子

あたらしくのほる初日をはしめにて
　さしのはしめをいはふうれしさ　日高かず子

はつ日かけさつ國ひさもあふくらむ
　御代あきらけきさしたちにけり　石川類子

百千さりこゑあたらしくあさぼらけ
　四方にかゝやく日の御はたかな　佐々小琴子

のごかなる年をむかへてさま〳〵に
　さしのはしめはきこねぬるかな　松尾富美子

君か代をいはゝぬささもなかりけり
　たのしふさきそうれしかりける　松尾せい子

ひのみはたなひかぬ里もなかりけり
　さし立つ今朝のはつ日あふきて　眞鍋貞子

大きみのめくみにもれすのさかなる
　なさまれるよのさしのはしめは　眞鍋直子

あらたまのさしの光りはたきゝこり
　さしをむかふるけふのうれしさ　佐野きやう子

さしたてはきのふのまゝの野山へを
　すなさるひなものさけかりけり　山崎すま子

いさあつきはゝのておりの新ころも
　みるものさけきこゝちこそすれ　佐野みさ子

追羽子やまりつきてあそふ齢ならね
　さしたちきぬるこゝろうれしも　關勝子

はつ日かけ君か八千代をことほきて
　さしのはしめはものそうれしき　井川澄子

とそくみかはすけふそたのしき

あらたまるのとけき御代に待るゝは
すこもるたつのひなのこゑかな　駒澤まつ子

老するを知りつゝなとてかくはかり
としたつけさはうれしかるらむ　本庄信子

あら玉のとしのはじめにさくうめと
ともにうれしきはるをむかへん　中川芳尾子

立かへるとしのはしめはむらきもの
こゝろよりまつあらたまりぬる　田代綾子

かとまつに雪つもれとものとけきは
としたつけさのこゝろなりけり　田代艶子

あら玉のとしのはつ日にともとちと
きみか代いはふことのうれしき　田山芳子

をさなきに老もかへりてうれしきは
はるのはしめのこゝろなりけり　推野ぬき子

あけわたる空にかすみのたちそめて
はるのしるしはまさしかりけり　推野秀子

たゝひとよへたてしとしもけさあけて
ひとのこゝろにはるはきにけり　推野薫子

山のはにけさはかすみのたちそめて
はつひとゝもにはるはきにけり　椎野清子

あけわたるかとへのまつにはるみえて
あさひのかけものとけかりけり　椎野鋭子

あら玉のとしたつけさのいさぎよき
こゝろをながくたもちてしかな　伊豫田ふく子

はつひ影あふくあしたのおほそらに
たつかねたかくちよゝはふなり　丹下花子

久かたの空さへけふはあら玉の
春つけかほにかすみわたれり　關口きれ子

常盤なる松のみどりのいろそへて
よろつよ祝ふあらたまのはる　金井梅子

新たまのみやこもひなもにきはひて
きみか代いはふ今日のたのしさ　赤尾つた子

大みよのひかりもそへてひのみはた
いよゝかゝやくあらたまのはる　中村いそ子

若水をむすふ手さきはこほれとも
とけしこゝろはたれもかはらし　田中芳子

一月五日兼題

うれしきこと

甲府市山田町　名取正代子

世にうれしきことの數多あるが中にも、日に實にさかゆく此大御代に生れあひたる身の幸は、いはずもあるべし。新年いはふあした、うからやから打集ひて、屠蘇くみかはしたる、まづうれし。試筆の我がおもふやうにかき得たる。親しき友はいふも更なり、常うときも、けふはとて集ひ來ませ

る、さて歌合せに、將、かるたなどにも勝をしめたる、とり〳〵にうれし。去年の暮よりなほし培ひたる鉢植の梅の咲そめたる。初ずりの新聞雜誌のはやう屆きたる、まして我歌文などのよき位にのせられたるはいみじううれし。開校の日、久し振にて師の君に將、友にも逢ひたる。やがて三月の試驗も卒へて、しるしのふみ得たるに、其の成蹟のゆくりなくもいと優れたる、いはん方もなくうれし。ことに異鄕に物學したるが、此證書を得て、故鄕にかへり、父母の賞詞にあづかりたる。暑中休暇に歸省せむ折も又うれし。花紅葉など見に誘はれたる、まして學びやより師の君にともなはれて運動にいでたつなどは、いはん方もなし。將、月見のまとひ、雪見のうたげなど、一とせの內、うれしき事どもかぞふべくもあらず。其の外、みかどをがみの三大節はまをすもかしこし。常の事なれど、父母のゑましげなる顏をがむ、はらから相和らぎ樂しげにかたらひたる。舅姑の機嫌うるはしき、妯娌との中らひむつましき、いづれうれしからぬかは。又久しう旅にありたる親はらからの歸りきたる。遠き國べより、親しき友の、こまやかに、まごころこめたる消息おこせたる。病人のやう〳〵怠りげにて、すゝむる食などようまゐりたるなど、うれしといふ事いと〳〵澤にて、一々あぐるに遑あらず。されど、これらの事は、大方私欲なりけり。さはなくて、まことにこよなきは、世の爲、人の爲に、事をはかりて、誠をつくし、よくとりまかなひたる。さては人をめぐみ、博く人をよろこばしめたるなど、すべて、よき事を行ひたる後の心地は、又たとへんものもなしや。

伊豫國松山市一番町　宇高松子

年の始のほきことと、先嬉しきことの始めなりや。何日しかと待たるゝ朝鶯の初音聞たる。立ちいでて見れば、まだしと思へる、梅の花の、三ッ二ッほころびそめたる。主人だにも未しらぬを如何にしてとめきにけんといとうれし。初花初郭公初厂いづれも〳〵人より先に見いで聞つけたるこそよなう嬉しけれ。遠きは更なり、近きよりも隔てぬ友の訪ひ來たる。ましてつれ〴〵なる夕、あるは物思ひ堪がたき折など、とぶらひきて、懇にかたり慰めなどせらるゝは、殊に願もしく嬉しきものとぞある。兄妹などの人々はめらるゝをほのかに聞たる。試驗よりよき成蹟得たる。僥倖と思ふ

ものからなほうれし。まして學の業をへて、故郷に錦をかざる人、殊に老せぬ父母に笑みて迎へらるゝ人の嬉しさは、實にいかならんかし。

大阪市西區新町通三丁目百五十九番屋敷　日下德子

うれしきこと。といふ題によりて、文かゝむとて、まづ思へば、たらはぬことなき　大御代に生れあひぬる身の、何事をかうしとなき、何事をかつらしと恨みん。たゞ日にけに。袂のひろさをのみ願へば、思ふまに〳〵數へゆかんには、極りなき地を、普く筆の林となし、そをもてかきつゝるとも、猶あかしものをや。さはいへ一つ二つ取出んと思へば。

ほど〳〵に人のこゝろの見ゆめればうれしといふもやさしかりけり。

とふと、おぢ心つきぬれば、筆さしおきぬ。

（以下原稿到着順）

北島功子

世にうれしきことのかづあるが中に、あらたまの年たつけさの、おもひにはしくものぞなき。見渡すかぎりをちこちに、日のみ旗のどかに打なびきつゝ、門毎に常盤の色の、松竹たてゝ、まづ、大君を萬代と祝ひまつり。親はらからまどゐしつゝも、笑かたむけて、いく樂と、いにしへにめでたまひし、すめかみの、くしのみたまの、とよみきくみ交しつゝ、若も老もけじめなく、うたげ遊び、またをさな子は、羽子つきかはし、童子等は凧打あげて、おのがしゝ祝ひことほぎ、むれつゝ遊ぶも、實に大御代の惠にあまる年の始と共に、うれしさのかぎりもなく、目出度きことのかきつくしがたくなん。

福原菫子

新しき年立ち歸れは、晴れ渡る東の空麗かに、さし昇る朝日の光も、昨日に似ず、甚と長閑に御旗に映ずる、今日の此日を、故郷なる深井の里にかんはせ美しきかぞいろ君を初めまつり、都より歸りませる兄君同胞と打つどひて、睦まじう屠蘇くみかはし、笑ひことほくばかり、野にも山にもうれしき事はあらずかし。しかも年々まどひかはらず、うるはしき新年を向ふることのうれしさよ。あゝ思へば此うるはしき新年を向ふる事を得るは、汝も知るがごと、實に　大君の御惠みに依り奉るにこそありけれ。さもなくばいかでか、四方の海波靜かに、吹く風も枝をならさぬ、此のめでたき秋津島根に年を向ふる事のうべきと、兄君のうちとけて優語り出させ玉ふなど、又なくうれし。夜に入れば近きわたりの友どちつどいきて、かるた遊びに時のうつるもおぼへざるなど、中々にうれし。世にうれしき事さま〴〵ある中に、故郷に事無く新年を重ぬるを得るぞ、最も妾のうれしと思ふことなれ。

北島松子

幼なかりし其昔ちゝの實のちゝの命の、公用にて、西の都に旅のし給ひし其かへるさの家苞にとて、愛らしき人形を給ひたる其かみの、嬉しきこと何に假令へむやうもなかりき。或は己れ饒倖にも前席を占め學の道を成し終へたる、また兄なる君の多年螢雪の苦學空しからで、榮譽の學位を得られたる、序ほ床しき姉きみをむかへ、伉儷の典を擧けたまひつる事共、みな永久に忘れ難き嬉

歎過事なりける。されど、近き頃われに無禮を加へたる人の切なる此身の諫によりいたくも、已れを悔るいみしそも過を改むるに咎ならざりし行のいとゝかしこく、斯くてそ人道に背かざるべくやとなかく〳〵にうれしかりき折しも、文月の中あらがれの地もさけなん畫の暑さも、夕されは、しかすがに、涼しき風の吹立ちて、頓て、窓近う生ひひろごれるさゝむらあり、昇りたる眞如の月に向ひては、心地爽かに、すみ渡りて、佛者の禪定とやらむもかくやとおもはれてなん。かくも嬉しくすが〳〵しき事の、我身一生に又とあるべくもおもほへれば、たと〳〵しき筆の跡ながら、誌して以て女鑑衆題の課題に充てつ。

松尾せい子

瑛玉の年たちかへり、豊坂のぼる初日影のさかに、常磐なる松のみどりに映じ、日章の御旗にかゞやきたる、賤が軒にも瑞氣みちて、治まる御代のめぐみのいかにうれしきよ。人毎に悦びの色見へてめでたし。神のみまへにいよゝ　皇室の御榮ゐ、家の無事を祈り、祖先の靈を禮拜し、父母はらからまとゐして、屠蘇の盃めぐらすも、賤かき家の風にや。若水に筆を洗ひて、今更に心改まりぬ。あはれ數ならぬ身にしあれど、この大御代に生れあひて、かぞいろの君の深き惠に世のうきふしだに知らず、幸多き新年を迎ふるは、いかばかりうれしき事のきはみなるよ。

佐々有隣子

今年は熊本市にて、八縣聯合共進會を開設せらるゝ事なれば、各地の小學校よりは、習字、裁縫品なとも陣列して、勝をあらそふべければ、三學年四學年の吾儕は、朝夕に指をりて、夢にだもわすれず、うれしきことのかぎりにやいはん。たのしきことのきはみとやいはん。あな心すが〳〵しうなん。

眞鍋貞子

うれしきことの、いとあまたある中にも、ことに、あら玉の年立かへりたるあした、ちりはかりのくもりたもなう、いとよう晴わたれる雲に、かう〳〵しうさしいつる日の御かけを、ふしをかみては、心もきのふには似す、あらたまりて、いとはれ〳〵しういはんかたなきに、まして年とりたまへる人をはしめまつり、幼きものにいたるまで、みな〳〵打つとひ、とそ汲かはして、わが大君の、みさかゐを、祝ひまつり、あたらしき年を、ことほきたろこそ、うれしきことのきはみなりけらし。

眞鍋直子

ものへまからんとて、たのしみていれたる、あしたのそらの、いとやう晴わたれる。待まちし人の、かへりきたれる。幼きもの〻、むしのけもなう、すく〳〵と生たちたるなど。さり〳〵、うれしきことの、あまたある中にも、わけて、久しうあひまつらさりし、父君母君の、すこやかにかはらせたまはぬ御かほを、はいしまつれる。はた久しう打ふしたまひて、くすしなとも、いとあやふしと、いひたるみやまひの、おこたらせたまひて、いはひのむしろを、うちひらきたるなん。うれしきことの、限なりける。

關勝子

いつしかと待わひし鶯の初音を人よりも先にきゝたる、はた、已が土かひし植物の花咲き初めたる、いと嬉し。いふせくも、長雨ふりつる夕、一人つれ〳〵に思ふ折から、友の訪ひ來たる、又嬉し。さては、學やにかよふはらからの、いとよろしきせいせき成りときゝたる嬉し。朝、ふしとをいつる郎も、かそいろの君の、笑ましけなる面わに接したるこそ、此の上なく嬉しけれ。

女鑑歌文月次兼題

一月廿日分

歌　早梅

文　新年の景況を知らする文

右一月十五日〆切

二月五日分

歌　霞

文　梅見の記

右一月廿五日〆切

二月廿日分

歌　桜に寄する祝

文　出産を祝する文

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題

住所

姓名

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所

姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

渚乃雪

[illegible]文学撰

全

渚の玉

本居大平翁選

なきさの玉のはし書

いせのうみの清きなきさの鹽かひにとあるは古き世のうた物の言葉にて其こゝろはへによりてかく名つけられたる此まきは鈴屋集にのせられたる近き世の手ふりの歌ども中にて今一きはしらへ高くすがた言葉うるはしきかぎりをわが藤垣門の翁のつねに心とゞめて其歌の上にいさゝかしるしをなむつけおかれたるをこたびおのれこひうけて其しるしあるをひろひあつめて一巻となしたるをうつしひかめもあらむかと翁のもとにさしいでければよみ見られけるついでにかく名づけられたるなりけりそもそも鈴屋集の歌どもは古きも近きもなへてめでたきはもとよりにてそれが中にも取わきて此近き手ふりのは彼翁のわかこのましくせられける風躰にて下れる世の歌どものいやしくよからぬくせどもをよみあらためられたる殊に正しき手ふりのかゞみともなるべく物せられたるなればすべて〳〵うるはしく世に秀てなむあるを此一巻は猶はたわが翁のこゝろふかめて世の人の思ひおよはぬぬけいでたるかぎりをとえりとられたるなればまことに名にしおひてきよきなぎさにひろふてふ玉とめでたふとふべきになむありける

文政八とせといふ年のかむなつきかくいふは　橘百枝

鈴屋歌集

渚の玉

春歌

年のはしめによめる

さし出る此日の本の光よりこまもろこしも春をしるらむ

春のはしめによめる歌

春の來てふりゆく身さへもゝ千鳥さけは心はあらたまりぬる

岡上若菜

春來れはわかなつむとて里の子がならしの岡は雪も殘らす

水郷春望

みなせ河なひく柳もほの／＼と春風かすむ山本のさと

春曙

梅香も色見えそめてほの／＼と花よりにほふ明かたの空

名所春曙

またや見む一夜旅寐の曙に霞しきつのうらの松原

曉梅

夢かとよ寐さめのはての春風もほのかに過しまとの梅香

曙梅

にほひくる梅のありかも見えそめて春風しらむ明ほのゝ空

梅遠薫

たましまや河上とほきうめか香も流れてにほふ里の春風

梅薫風

春風をひたすら花にうき物と梅香しらてかこちけるかな

梅薫夜風
月に見てまつ屋戸いつこ春風のこてふにゝたるよはの梅香

霞
立こめて花うくひすののとけさもおのかいろねの春霞かな

歸雁
春來れば霞を見てやかりかねの我もと空に思ひたつらむ

海邊歸雁
すみのえや菊の花さく秋とたに契りもおかてかへる雁かね

春雨夜靜
軒くらき春の雨夜のあまそゝきあまたも落ぬ音のさひしさ

古郷春
しかのうらや今もたはるゝ花そのゝこてふよ夢か有し昔は

雲雀
淺みとり霞の色も一しほののとけさそへてなくひはりかな

野遊
道すから草の若葉になつさひてさも心ゆく春の野へかな

同
思ふとちあそふ春野の夕かすみ立ことしらてけふもくらしつ

同
分のこす末野の霞立かへり明日も來て見む春の夕暮

待花
山里の人のたよりもはつ花をまつにまたるゝ二月のころ

同
櫻花こゝろのまつの木間より面影にほふ春のやまのは

遠尋花
尋ねいる花のそらめにはかられて分しやいくへ峯の白雲

同
こえてなほ風もいくへの花の香にうかれ行らむ春の山ふみ

盛花　咲つゝくさくらの中に花ならぬ松めつらしきみよし野の山

名所花　見わたせは雲も霞も櫻色ににほふや櫻みよし野の山

花のうたとも　たくひなき花とはかねて聞しかとさらに驚くみよしのゝ山

同　みわたせは花より外の色もなし櫻にうつむみよし野の山

同　かくならちらてしあらは庵しめてわかよはへなむ花の木本

同　めつらしきこまもろこしの花よりもあかぬ色香は櫻なりけり

同　櫻なきこまもろこしの國人は春とて何に心やるらむ

落花　いかにせむよし野のおくもちる花のうきよのかれぬ春の山風

同　よしの山風のうき世をいつこにかのかれてちらぬ花の見るへき

落花埋苔　庭の面は櫻ちりしく春風にさそはぬ苔の色そ消ゆく

曉庭落花　花さそふ明方寒きま木の戸に雪ふきいるゝ庭の春風

落花の歌　たつねても殘らぬ枝にとふ蝶の夢かきのふの花の盛は

名所欸冬　うち河やうつる影さへ名に立て咲山吹のせゝ岩のなみ

夏歌

新樹　しくれせぬ夏のみとりも日にそへて色はまさきの葛木の山

同　夏子立しけれる陰のをくら山いつか紅葉のてらむとすらん

曉郭公　もらしけり五月まつまもほとゝきす忍ふかきりや有明の空

雨後郭公　雨はるゝ軒のしつくを涙にて鳴音おちくる山ほとゝきす

故郷橘　にほひかは見るにつけてもふるさとは昔戀しき軒のたち花

山家樗　山里はたゝ青葉のみ繁りあふをりにあふちの花もめつらし

江五月雨　立てゆる浪にたゝよふ夏かりの玉江の蘆のさみたれの頃

河夏月　水もなき空に見るだに涼しきをまして川せの夏の月影

螢　夕闇にしのふの露も顯れて軒はすゝしくとふ螢かな

水邊螢　夏の夜はうつる螢のかけもよしやとりてやみむ飛鳥井の水

池螢　うき草にすかる螢もさそはれて風にたゝよふ庭の池水

江螢　なに事を思ひ入江のほたるとて庭にも影のもえてみゆらむ

夕立　露しけみ入日の影も夕立のなこりすゝしき庭の浅茅生

河夕立　夕立の雲にきほひて凉しさのますけかたよるそかの河風

松下納涼　夕風になるをの松の下すゝみ凉しき袖に浪もかけつゝ

晩夏　河風にちかきみそきの面影もかねて凉しき浪の白ゆふ

秋歌

初秋風　まちし夜のうたゝねなから東雲の袖に吹くる秋のはつ風

湖初秋　あきゝぬと海ふく比良の山風もうらめつらしきあまの衣手

夕荻　夕暮も荻の葉ふかぬ秋ならはいとかく風の身にはしまめや

山家荻　おひしける山下荻を軒端にてねられむ物かよはの秋風

荻露　ふき渡す荻より荻にみたれつゝ風も色なる宮城野の露

薄露　咲よれはこほれてなひく秋風にぬきあへぬ露の玉のを薄

月前草花　よるは又ひかりをそれとちらす野に月も千種の花の一種

野外露　袖かこつ人にとはゝやことわりの秋のさら野の露は見きやと

野虫
月影もこほる丶野への秋風に虫の音きこえぬ淺茅生の露

庭虫
はしゐして月まつ庭の夕暮にまつ鳴出るむしのこゑ〳〵

夕虫
秋の野はれくゆく花の下葉よりなくも千種のむしの聲々

月前虫
むしの音かいつれに落るあはれとも涙わかれぬ秋のよの月

秋夕思
わか袖にかゝれとてしも夕風はふかしを庭のをきの上露

月
こゝろある人いかならむ秋の月しらぬあはれも深き夜の空

月催涙
心からぬらしけるかな月見すは秋とて袖のかゝらましやは

草庵月
露しけき草のいほりにさし入てわかすむ影も月に見えけり

都月
千里まてよるは光の外ならてみやこも月の都なりけり

社頭月
わきて又てる月よみのみや柱秋のもなかにめくりあふよは

山家月
山のおくにたゝ我こそと思ひしに猶すみまさる秋のよの月

山月明
山端は雲もかゝらて松はかりさはる木間の月のさやけさ

野月
咲みたる露のゆかりに月影もあたの大野のよはの秋風

野亭月
寐覚するすゝのしの屋の東雲に露おく袖を月そとひくる

池月　いとヽしくつるきの池の草葉には秋の霜かと見ゆる月かけ

澤月　ゆく月にさはらぬはとはうき雲の影さへ清き野への澤水

磯月　うちよせてぬるヽ磯邊の眞砂にも殘してかへる浪の月かけ

月前眺望　わかなくにふけゆく月の清見かた影たにとめよ浪の關もり

月前情　秋をへて月のあはれはます鏡わかよふけゆく影を見るにも

霧中鶉　はれやらて霧さへ秋は深草の里をうつらの夕暮の聲

遠山霧　とは山のヽこるあかめもあやにくにまたきくれ行秋の夕霧

霧中雁　こゑはして山立かくす夕きりに面影おつるかりの一つら

雁　みよし野の田面に落る雁かねもよる方たとる秋の夕きり

鹿　たくひこし嵐は松にやすらひて軒端過ゆくさを鹿の聲

野鹿　妻やうき野風を寒み鳴鹿のあみたいろある露のはき原

關路鹿　さをしかの戀て鳴音もそらねとて妻やゆるさぬ相坂の關

海邊鹿　吹こゆる關のあらしもすこき夜に須磨の上野のさを鹿の聲

名所鹿　明ぬとておのかいるさの山のはに月をもさそふさを鹿の聲

擣衣　淺茅生やたか秋風を身にしめてひとり寒夜の衣うつらん

名所擣衣　いこま山あらし吹そふ秋しのゝ里は夜寒のころもうつなり

谷菊　ひかりなき谷ともいはしきくの花天つ星かとまかふ盛は

同　秋も又ふく谷風にうち出るなみかとまかふ岸のしら菊

紅葉　たかためそあたら錦をたつたてふ山の名惜き峯のもみちは

山家秋深　はけしさもまさ木の末葉かつ散て嵐色つく秋の山里

冬歌

初冬曉　寐覺する涙の枕霜とちてあかつき寒し冬やきぬらむ

時雨　さそひきて風の末野をゆく人の袖にしくるゝよそのむら雲

山路村雨　袖ぬらす小坂の道の夕しくれかへてはすまの衣かせやま

落葉　吹まよふともの嵐の山本は松よりもちる峯のもみち葉

路落葉　跡もなき庭の落葉に冬きぬと中々しるきやとの通路

河落葉　枝にこそちるとていとへもみち葉の河瀬の秋は嵐なりけり

千鳥　よるなみに聲たてそへて夕しほのみつの濱邊にちどり鳴也

浦千鳥　妹か島あかぬ別れになく千鳥月やかたみのうらのあけほの

寒草帶霜　なまめきし秋は昔の女郎花霜をいたゝく野へのさひしさ

岡寒草　白露の玉まくす葉もうら枯て夕霜さむき水くきの岡

鷹狩　八千種の秋の花より御かり野はすり狩衣のそての色々

夕鷹狩　末暮て明日のとたちも殘る野に狩場なからの假寐をやせむ

爐邊閑談　かきくつし心のくまも埋火も殘りなきまてかたる冬のよ

朝雪　夜のほとはふる音もせて積りたる庭におとろく雪の朝戸出

同　朝またき見わたす山の白雪に跡つけそめてとふ鳥かな

積雪　とはまくもあとをしむまのやすらひに分かたきまて積る白雪

禁中雪　來む春もちかきまもりの櫻花おもかけ見せてつもる白雪

都雪　めつらしく都の野へもつもりてはみ山の松の雪そふりぬる

船中雪　島山はつもるも見えすかきくれて友船しろき雪の海はら

年内梅　年の内ににほふ梅をば咲花のはてとやいはむ始とやいはむ

歳暮　行年は迚もかくてもはてしあれは宮もわらやも同しけふ哉

同　ふりゆくも惜からぬ身を人まねにことし暮ぬと何歎くらむ

同　驚きてをしむ心のはかなさよけふ餓あるとしのくれかは

惜歳暮　時のまも惜き日影のうつりきてけふは年さへ暮むとすらむ

同　失ぬともちゝの黄金は又もえむ惜きは年の暮にそありける

歳暮夢　さめていま思へはくれし一とせもともに一夜の手枕のゆめ

雑歌

梅の花の盛にはせかはの常雄かもとより蓬生のあれたるやとも心あらはとへかし梅の花のさかりによみておこせけるかへし

いろもかもしらぬわか身そかこたるゝ心あらはとゝふにつけても

鹽崎某が家の高き屋にのほりて軒ちかくたてる櫻の花のさかりあるを見出してよめる

たかき屋は高き梢も手折來て見るよりちかく見る櫻かな

西山政樹か許に山田に四月のころよみてやりける

つてにても山田の原の郭公きかはやきゝし君かことのは

扇に書ける歌とも

すてられむゆかりとしらて秋風を閨の扇よなとやとすらむ

夏ころもうすきは人の心そと秋にあふきや思ひしるらむ

八月十五夜雨ふりけるをやみぬれと猶月見えさりければ

をやみてもおこり晴せぬ雨雲に風をさへまつもち月のそら

九月十三夜横瀧といふ山寺へ月見にものして

のほり來て見る山寺も月の名も高きこよひの影のさやけさ

その夜は其寺にとまりて鹿の聲をもきかむとまつにふくるまて
さらになかさりければ

谷の水まつのあらしにいまひとつきかてさひしきさを鹿の聲

紀の國の若山にて小浦朝通家にて會しけるに名所千鳥といふ題
をとりてよめる

影見てもくもりなき世を八千代とや木の川千鳥月になくらむ

あきの國人末田芳麿かもとよりかの國のいつく島の圖のいとくはしく書たるをおくりけるを見てかへりことに

めのまへに見るこゝちしていつき島いつきぬらむとたとる寫し繪

琴

ねさめしてあはれなる音にきく人も涙かきやるよはの玉琴

峯松

契りてもいつまてとてかみねの松たれも千年の友ならぬ世は

松爲友

いつとなき友はねさめの枕にもひる見る庭の松風の音

山家

ある時はありのすさひの世のうさも又忍はるゝ山の奥かな

山家月

山ふかみ月もうきよの月よりはすみまさりける峯の庵かな

山家水

世中のうき事きかぬすまひかなたゝ山水の音はかりして

同

山陰はすまぬ心もすむはかりさもいさきよき水の音かな

同

問はばやなすみつき堅き山のおくにいかにしてかと水の心を

山家松

軒の松むかしの友といふはかりわか山すみの年も經にけり

山家橋

いは見えてわたす朽木の一つ橋かゝる谷にも人は住けり

山家人稀　とはるゝも稀の人めはなか〳〵になこり淋きやま陰の庵

別　旅衣さきたつものは涙にてこゝろもゆかぬわかれちの空

岡山正興二月の頃江戸へいくに
旅　すくすなよ霞のよその花のかもにほへは匂ふ風のたよりを

旅宿　いる方のみやこの山のおもかけも月に戀しきあつま路の空

旅宿　あはれなるうつの山への旅寐かな枕にかゝるつたの下露

旅宿夢　見もはてぬみやこの夢よ中々になに面影のさやの中やま

同　うつゝにはいつかといとゝ草枕なこりかなしきふる里の夢

同　いつしかとふる里人やまつかねの枕の夢もことかたは見す

月前旅　故郷を思へはいく重こえ過て見る夜の月もおはすての山

驛中眺望　ふしのねは雲の絶間に見えそめていくかになりぬ東路の空

驛中衣　みやこにはいつかかへらむいたつらに衣の裾は浦風そふく

旅泊　關守のしらぬうきねの夢路たにしはしはゆるせすまの浦風

旅泊夢　まれに見し京の夢もなか〳〵になこりうきねの明方のそら

きの川を船よりくたりて紀三井寺にまうてゝまへなる入江のけ

しきを見わたしてよめる
吹風のおくさのはまに船よせて浪もしつかにみるめをそかる
同しところより若のうらを見やりて
水清き入江にしつく影見えて照る日にみかく玉津しま山
梅宮に梅の木をうゝる事を神主橋經亮すゝめけるにうゝるとて
よみてそへて奉れる
よそめにもその神垣と見ゆはかりうゑはや梅を千本八千本
さすか又嬉きふしもましる世に浮事はかりかそへられつゝ
ある人の八十あまりにてやよひのころみまかりけるに
やそとせは花にぬるまの蝶の夢おなかしと見しも春のやま風
小津正啓みまかりにけるとふらひの會に雪中懷舊
おととひてあらましかはと思ふには憐もふかきやとの白雪
一年京にのほりける時十一月廿三日雙林寺に京の人々國々の人
人あまたつとひて歌よみけるに寄日祝といふ題をとりてよめる
とことはに世をおまてらす日の本の國のさかえそ限しられぬ

秋祝

人の祝に松を題にて讀める歌

吹風もをさまれる世をかきりなき數にとらはや武藏野の露

岩におふる松をためしに契りおかは千世の春にもあはさらめやは

きの國のある人の賀にかの國の名ある所々を題にて歌こひけるに若浦

老の浪よるとも見えす萬代をまつにのとけきわかの浦風

寄雪祝

吹風も枝をならさぬ君か代は八千世もつもれ松のしら雪

人の賀に寄海祝

世中にはてなきものは大海の浪路と君かよはひなるへし

菅原神の御かたに

みやこにて君かへるまつ梅も心つくしの年そ經にける

源義朝妻ときはか平治のみたれに三人のいときなき子ともをおもひて雪のふるにさすらひゆくかたかきたるに

白雪のかゝるうき身のなけきにもこすゑ花さく春をこそまて

柳のわたりにつはくらめのとひたるかたに

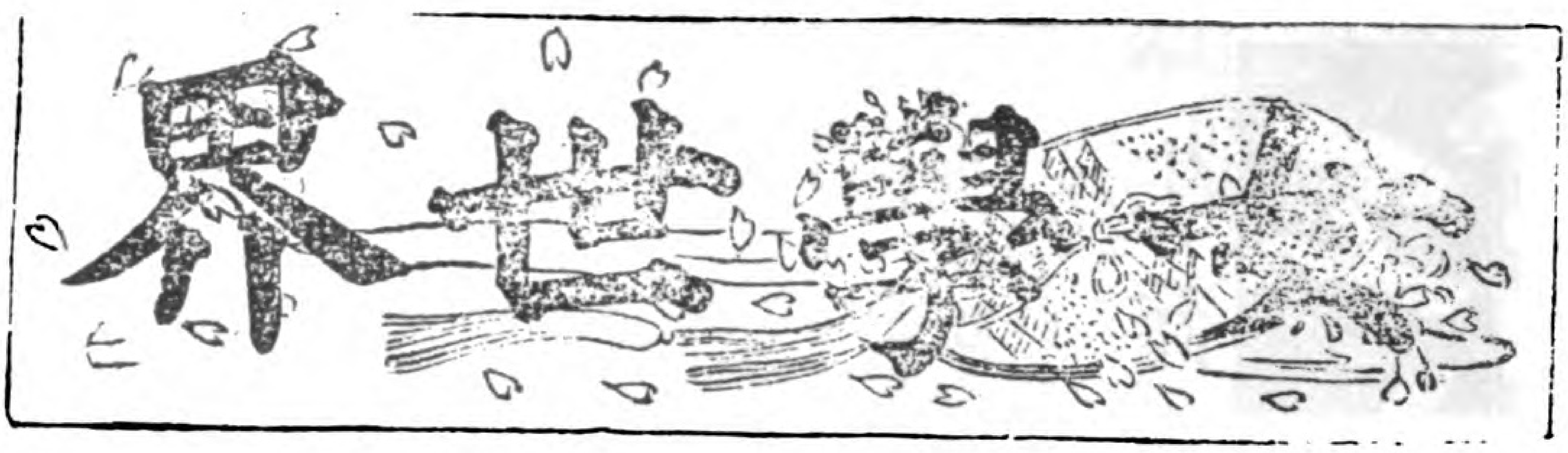
うちなひく柳が枝の春風におのれみたれてとふつはめかな

鈴屋歌集

渚の玉　終

毎月一回五日發行

本文紙數二百八頁
外ニ習字畫八頁〇



口繪寫眞銅版八丁
特別口繪二丁兩面
〇年四回定期增刊

本領

女學世界

女子教育普及の急務漸く世に知られて公私女學校の創設日に其數を加へ天下の輿論は一世の人心を皷舞し、遂に吾人をして一大婦人雜誌を發刊するの必要を感ぜしむるに至らしめぬ、即ち題して『女學世界』と云ひ、其初刊は即ち一月五日を以てす其本領とする所は將來國民の母たるべき方今の女性に滿腔の同情を濺ぎて、其修養に備へ、其地位を高め、其幸福を進め、以て婦女社會の木鐸たらんとするに在り其各欄の組織は下表に就て了知せられよ

（一月五日初刊）

論説 女學生及女子教育者を警醒誘導すべき諸名流賢媛の雄篇大作を收む。以て女子教育の精神を知るべく以て女子思想の涵養に資すべし。

講義 歌學、國文、漢文等各專門の大家に依囑し、難解の學理を平易に叙說し、以て婦人の修學に貢獻せんとす。

傳記 古今東西の名媛秀女の傳記逸事を流麗明快の筆を揮つて描き、以て讀者をして親しく其風采謦咳に接するの想ひあらしめ、以て高尚優美なる氣品と強健毅直なる性質とを造るに益せしむ。

學術 物理、化學、衛生等の學術事項中より趣味と實益ある題目を提へ來り、以て智育と休育とに資し、娛樂の間快心の裡に其得る所少からざらんを期す。

技藝 習字、繪畫、音樂、挿花、抹茶等を平易明快に說き、以て社交家庭の裝飾的教育を發達せしめんとす。

小說 文壇大家の手に成る每號讀切の小說を揭ぐ。以て趣味津々たる人生の幾微を察すべし。

家庭 家政、女禮、料理、裁縫、育兒、衛生等の日用實際の必要事項を載す。專門諸家の擔當する所。以て現時の夫人と將來の尊姐とをして處生の任務を會得するに遺憾なからしめんとす。

雜錄 名門大家の家庭の光景及内外古今の佳話逸事、若くは名士を訪問して其淸談卓說を筆錄す。

文苑 名流大家の和歌國文等を收む。瑰章、玉句、總て本欄に聚る。菊の芳蘭の秀、亦德性の涵養に補なしとせんや。

娛樂 四時の遊歡行樂、諸興行等の模樣を輕妙巧緻の筆を以て寫す。以て深窓にある人をして社會人事の百般を識らしむ。

社交 冠婚喪祭往來贈答等平常交際の心得となるべきものを摘錄し、以て人間交際の栞たらしむ。

流行 衣服髮飾携帶品等苟くも流行に關するものは各種の模樣、新奇好の意匠、細大之を收む。以て世の婦女をして詳かに社會風俗尚の變遷を知らしめんと欲す。

才媛詞藻 和歌、國文、日用文等妙齡才媛の詞藻を募り、各專門家の削正を經て茲に收む。又時々賞を懸け題を課す。才藻を修練し、氣品を養成せしむる者是にあり。

問答 婦人の必要事項に就て其如何なる事を問はず、讀者と讀者、若くは讀者と編者が質問應答紹介して其利益を交換せんとす。

雜報 全國女學校の動靜、名媛の消息、總て婦女に關する時事を網羅す。

新年大附錄 眞寫銅版 世界貴顯婦人肖像（大判額面）

定價 一册金貳拾錢〇三ヶ月前金（增刊共四册）七拾五錢〇半ヶ年前金（增刊共八册）一圓四拾五錢〇一ヶ年前金（增刊共十六册）二圓八拾錢〇郵稅一册二錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

歌所寄人小出粲先生題詠　從五位木村正辭先生序　贈正四位釋契沖阿闍梨撰

百人一首改觀抄

洋紙刷和裝全一冊（製本既成）

正價金參拾五錢

郵稅金六錢

契沖阿闍利が卓拔なる見解と該博なる學識とによりて百人一首を釋疏したるもの今阿闍利自筆の原本により最も嚴正なる校合を與へて上梓す蓋し近時稀に見るところの珍本たるなり

釋契沖阿闍梨撰木村正辭先生校訂

萬葉集代匠記

●全廿五冊●十帙にて全部完結す●正價每帙金八拾錢郵稅八錢

第三版印刷中

一帙及二帙既刊

發兌元　東京市神田區淡路町一丁目　四海堂

未來の賢母に乞ふ必ず一讀せられんことを

本書は江戸時代の風俗史なり又一つの武士家庭敎育史なり

江戸時代之武士

瓜生喬先生著

●發行所　東京市神田小川町　寶永館書店

發賣所　神田區裏神保町　富山房

東京堂●勉强堂●岡崎屋●林平

洋假裝頗美本全一冊●價四十錢●郵稅六錢●郵券代用（一錢に限る）五錢增●

花は櫻木人は武士武士の意氣地や優に帝國史の一名物たらずんば非ず而かも維新以降卅年立憲の美愈完備ならんとして熨斗目麻上下金紋の先箱綺羅びやかに大手を打ふりたる時代は刻々世人の記臆を離れ去むとす豈に歎惜の情に堪へざらむや本書は著者の閑餘靈犀の識と明暢の筆を以て當時の江戸武士の性格を描破し武士道の變遷を叙せられし故に一度び之を繙かば身親ら當時にありて江戸武士と歎語膝を交ふるの感あるべし蓋し近來稀に觀る所の珍本なり

月島丸遭難吊慰金募集廣告

商船學校練習船月島丸ノ蹤跡ヲ失スルヤ朝野力ヲ戮セ百方捜索ノ手段ヲ盡シタルモ今ニ至ルマテ杳トシテ消息ナシ然レトモ之ヲ船長ノ遺骸其他漂流物件ニ徴スル𠀋ハ該船ハ業ニ既ニ言フニ忍ヒサル悲酸ノ運命ニ陷リタルニアラサル耶若シ青年有望ノ子弟七十有餘人及其教育ノ任ニ當リシ乘組職員其他水火夫等ニシテ空シク海上雄飛ノ材ヲ懐キテ一朝魚腹ニ葬ラレタリトセハ眞ニ是レ海國ノ一大慘事ニシテ吾人豈ニ之ヲ默視スルニ忍ヒンヤ是ニ於テ下名等相謀リ廣ク世人ノ義捐ヲ募リ之ヲ吊祭慰籍ノ資ニ供シ以テ遭難諸士幷ニ其家族ニ同情ヲ表センド欲ス江湖同感ノ諸君左記ノ條項ヲ諒セラレ多少ノ出捐アラムコトヲ希望ス

明治三十三年十二月

月島丸遭難吊慰會發起人（イロハ順）

子爵 伊東祐亨
伯爵 吉井幸藏
田健次郎
淺野總一郎
莊田平五郎
男爵 岩崎久彌
中橋德五郎
男爵 有地品之允
齋藤實
男爵 澁澤榮一
加藤正義
山縣伊三郎
男爵 赤松則良
三井元之助
平山藤次郎

一 本會ノ事務所ハ商船學校内商船學校々友會ヲ以テ之ニ充ツル事

二 發起人中ニ於テ特ニ委員ヲ選定シ諸般ノ事務ヲ處辨セシムル事

三 義捐金明治三十四年三月三十一日限リ本會事務所幷ニ左記ノ場所ヘ拂込マルベキ事

日本海員掖濟會本部 東京市麹町區八重洲町一丁目一番地
日本海員掖濟會横濱事務所 横濱市海岸通五丁目二十一番地
日本海員掖濟會品川事務所 東京府荏原郡品川町利田新地八番地
日本海員掖濟會大阪事務所 大阪市西區本田町通一丁目番外百一番屋敷
日本海員掖濟會神戸事務所 神戸市東川崎町五丁目百六十五番屋敷
日本海員掖濟會函館事務所 函館區鍛冶町三十一番地
日本海員掖濟會長崎事務所 長崎市樺島町三十九番戸
日本海員掖濟會馬關事務所 赤間關市田中町十一番戸
日本海員掖濟會臨時宇品出張所 廣島市宇品町海岸通四丁目
三菱合資會社銀行部 東京市麹町區八重洲町一丁目一番地
仝 各支店
三井銀行 東京市日本橋區新右衛門町十五番地
第一銀行 東京市日本橋區兜町
仝 各支店
第三銀行 東京市日本橋區小舟町三丁目
第百銀行 東京市日本橋區萬町

四 義捐者ノ氏名及金額ハ便宜新聞紙ヲ以テ廣告スル事

五 吊祭慰籍ノ方法ハ發起人ノ協議ニ依ル事

六 若シ幸ニシテ船体無事乘組員中生還スル者アルトキハ前項ノ協議ニ依リ適宜慰勞ヲ爲ス事

七 義捐金ノ出納決算報告ハ新聞紙ヲ以テ廣告スル事

（後付の表四）

肺病患者に急告す

一大發明肺治散

私儀明治廿一年の十一月以来慢性肺病に罹り千葉縣下の醫藥は勿論妙藥なりと聞く所に諸種の賣藥服し東京市内有名大家諸先生の診断服藥し猶ほ横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも困三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳嗽甚しく骸骨同様に成り最早此上は致し方無之く只死を待の外なし居るに私は病中臥褥の内と雖も常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議にも爽快を覺へ尚續て服するに益々快方に赴き四週間餘りにて全く根治したり既に死に望みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り從來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざる者なし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て深く之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺病患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市ダイヤーガ商會及び印度バダビヤヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に三千五百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらずに天壽を全ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ



藥價 七日分一圓五十錢◎二十一日分四圓◎三十五日分六圓五十錢◎遞送料十二錢◎爲替局名は安房國千倉局宛取組の事

主治効能 ◎肺結核◎肺炎◎氣管支加答兒◎肋膜炎◎肺尖加答兒◎たん咳嗽胃病より起る諸症を根治する偉効あり

用法及び詳細は本能書にあり(但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模様を詳細に記入御申越を乞ふ)

千葉縣安房郡𥧄村千倉千三百四十一番地

調劑本舖 川名助次郎

大阪特約店 大阪市心齋橋筋二丁目 **丹平商會**

仙臺大取次 仙臺市新傳馬町 **櫻井伊之助**

山梨大取次 甲府市相生町五十四番地 **矢崎房次郎**

東京一手特約店 東京市神田區花房町二番地 **山崎帝國堂**

横濱一手特約店 横濱市吉田町二丁目都橋際 **永井永進堂**

大阪特約店 大阪市道修町三丁目 **賣藥卸賣 株式會社**

肺治散特約店

長野縣信濃國上田原町山崎山林堂○愛知縣三河國豊橋吳服町中村丈三○長野縣長野市大門町小林傳兵衛○靜岡縣小笠郡南山村高橋英進堂松本德太郎○秋田縣羽後國北秋田郡下大野村奈良源五郎○群馬縣上野國前橋市桑町馬場常七○靜岡縣靜岡市梅屋町森文吉○栃木縣下野國宇都宮市通り馬場町藤井愛生堂○福島縣福島市大町石井松五郎○上野國高崎九藏町小澤宇平○市岩代國郡山町根本祐太郎○長野縣信濃國上諏訪清水町河西善七○山形縣山形市旅籠町字一ト町六合館前島○大阪府東成郡平野郷町西脇上谷庫藏○大阪心齋橋筋博勞町高橋協大堂○大阪堺筋伏見町谷回春堂○大阪市淡路町日野合名會社○愛知縣名古屋市本町四丁目土屋怨兵衛(全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)

女鑑

明治三十四年一月五日發行

毎月二回五日廿日發行
第貳百貳拾號

明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

東京築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷